324
630

始

324-630

帝國圖書館藏

自我偈俗解

大僧都 橘泰善講述

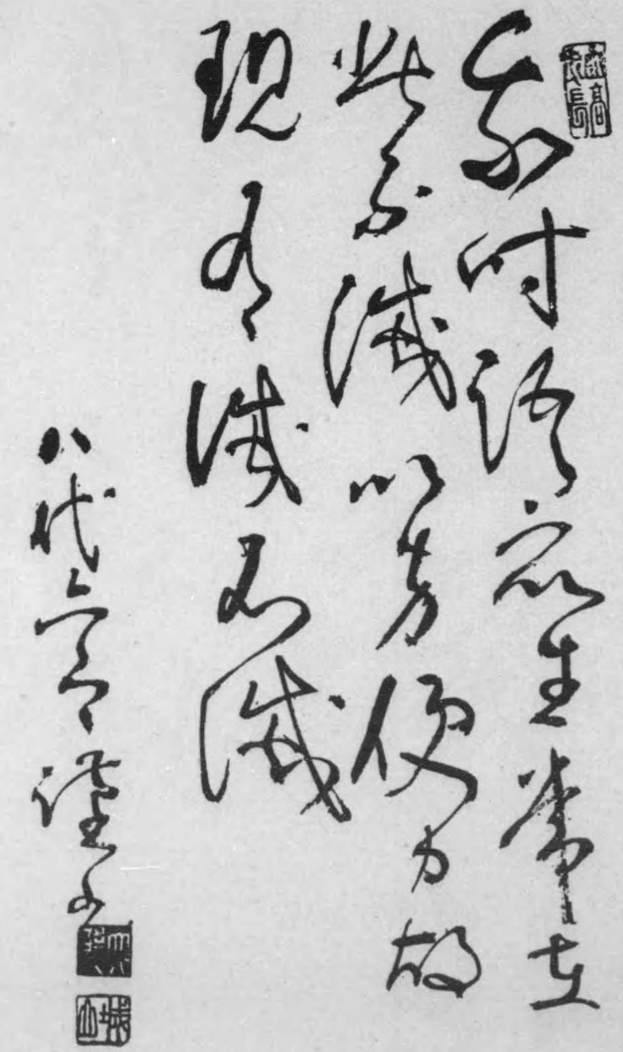
法華會

大正
9.11.10
内交

壽量

平八月帥壽五

東宮御學問所總裁海軍大將元帥　東郷伯爵



軍事參議官海軍大將元海軍大臣　八代男爵

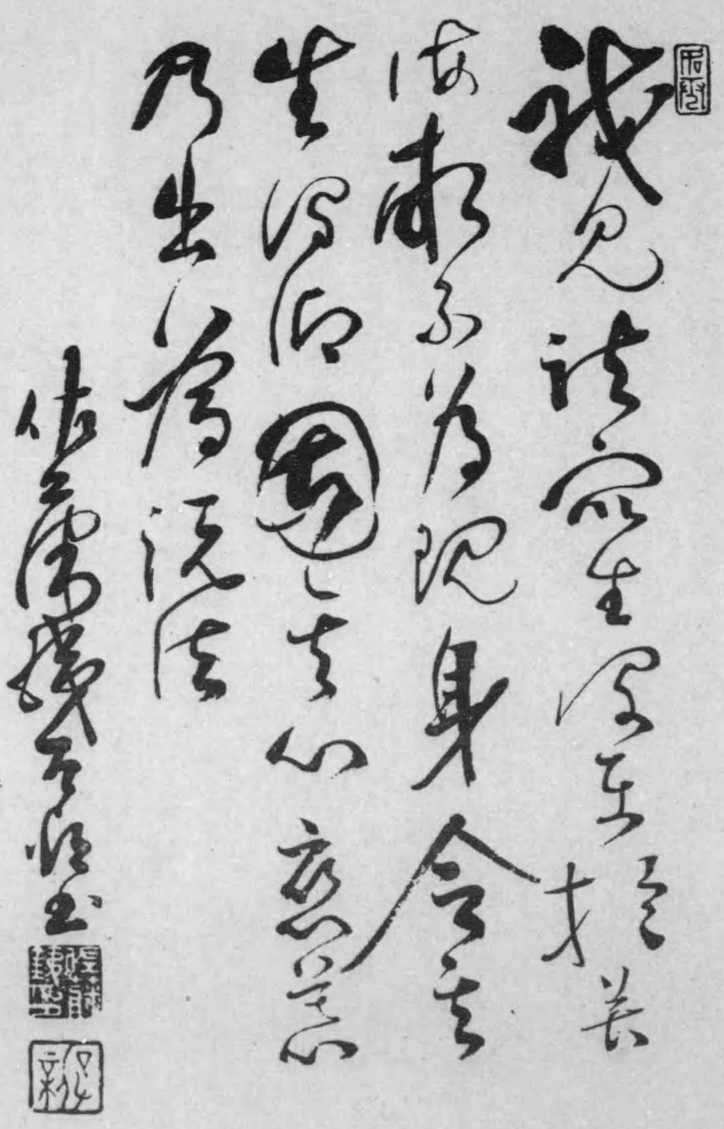
而實小

戚度

東宮御學問所幹事海軍中將　小笠原千齡

大正庚申歲

源長生謹書



舞鶴鎮守府司令長官前海軍大學校長　佐藤中將

凡例

一、來間泰三郎君の乞に依り大正五年十一月八日より毎月數回法華經の講筵を開き翌年十二月八日で會數恰も八十回に及んだので同月九日を以て盛んなる滿講式を擧行し其を記念すべく佐藤海軍大學校長に妙法蓮華經の題字を乞ひ會員二十一名に自我偈の淨寫を求めて（一尺）縱八尺七寸餘横四尺二寸の大幅物に調製し且つ法華會を創め例月八日二十八日を定日に開會して既に一百七十回（九年五月二十八日迄）に及び尙ほ大正八年夏より法華會支部を新田と檜山村とに設け近頃また婦人法華會をも設けて漸次隆盛なるが今回會員の希望を容れ講演中の一節なる自我偈を最も平易通俗的に解釋を試みたのが本書であります。

一、佛書とし云へば難讀のやうに想はるゝが本書は誰にも容易に讀め得られるやうに態と普通の口語體に述べてあります。

一、本書は主として素人筋の人に提供したるゆゑ專門語は成るべく普通語に換たりと雖も偶には科段を分ち又は學術語を交ふれば玄人筋の人が讀れても敢て差閊ありませぬ。

一、自我偈には眞讀訓讀ともに振假名を附しあれば單に讀經用の經典としても便利であります。

一、本書は聖日蓮門下の各派に共通すべく說明しあれば門下の何方が讀れても差閊ありませぬ。

一、引例の文言には括弧を附し且つ漢文を書下しに直したのは讀むに便宜ならしめんが爲であります。

一、譬喩例證が餘り煩雜に失するやうであるが本書を讀む人よりも讀まないで打つちやる人の目に觸れ易からしめんが爲め且つは勸信談の種にもと思うて態と澤山に加へたのであります。

一、自我偈ゾクヨミを製したのは偏に素人筋の人に讀まして自から意義を略解せしめんが爲なれば必ずしも之を以て經典に代用することは出來ませぬ。

一、本講に先立ち領解に便せんが爲め偈中難解の字句を錄して略解を施してあります。

一、本書は自我偈の意義を充分に解釋したのでなく唯だ九牛の一毛として僅に其一部分を俗解したまでのものであります。

一、本書の目次は各名士の題字、凡例、聖日蓮、自我偈眞讀、自我偈訓讀、偈中字句俗解、自我偈俗讀、諸經中法華本門中心圖、三身と三祕、大意、偈に就て、自我偈科段圖解、本佛に就て、自我偈俗解、日蓮大上人略年譜、大上人門下一班等であります。

余は淺學韮才尙は修學中の小僧なれば粗漏杜撰誤謬等ありがちのことゆゑ御氣附きの個所ある時は宜しく御叱正あらんことを切望致します。

大正九年六月吉日

大僧都　橘　泰　蕃

『聖日蓮』

△日蓮大上人は貞應元年二月十六日安房國に生れて弘安五年十月十三日武藏國に死せる六十一年間が御一生涯であつたそして。

△日蓮と名乘ることに就ては（寂日房鈔）『日蓮ト名ノルコト自解佛乘トモ云ツベシ』とも（四條女書）『明カナル事日月ニスギンヤ淨キ事蓮花ニマサルベキヤ法華經ハ日月、蓮花トナリ故ニ妙法蓮華經ト名ク日蓮又日月ト蓮花トノ如クナリ』等と云はれて自ら佛乘を解しての命名だとある。

△それから印度支那日本の先哲大論師にも亭然秀でて一切經中法華經の勝能を述るに全力を注いだ敎傑は古今にもとめ中外にさがして獨り大上人のみである。

△斯くも『唯有一乘法』の法華經を唯一の信條とし殊に壽量品を取て主義の心髓とせられたことは大上人の遺文五百篇中各所に現はれて（法華書）『法華經壽量品ヲ持ツ人ハ諸佛ノ命ヲ續グ人也夫法華經ハ一代聖敎ノ骨髓ナリ』とか（得意書）『此壽量品ノ佛ノ天月ノシバラク影ヲ大小ノウツハモノニ浮べ給ヲ諸宗ノ智者擧匠等ハ近クハ自宗ニマドヒ遠クハ法華經ノ壽量品ヲ知ラズ』とか（開目鈔）『一切經ノ中ニ此壽量品マシマサズバ天ニ日月ノ國ニ大王ノ山河ニ珠ノ人ニ神ノナカランガゴトシ』等と枚擧するに遑なき程ある。

△且つ壽量品の主腦たる南無妙法蓮華經を以て自分の魂魄として（經王書）『日蓮ガタマシイハ南無妙法蓮華經ニスギタルハナシ』とか（南條書）『釋尊ノ一大事ノ秘法ヲ靈鷲山ニシテ相傳シ日蓮ガ肉團ノ胸中ニ秘シ隱シ持テリ』とか（開目鈔）『日蓮ナクバ誰ヲカ法華經ノ行者トシテ佛語ヲタスケン我身法華經ノ行者ナリ』とも云つて自分は活きた法華經であると云はれた。

△勿論大上人は決して團體的一宗一派の祖師でなきゆゑ（妙密書）『日蓮ハ何レノ宗ノ元祖ニモアラズ又末葉ニモアラズ』と明言された。

△一宗一派の祖師でなくて世界統一の使命を持てる日本の祖師である（波木井書）『日蓮ハ日本ノ大難ヲ拂ヒ國ヲ持ツベキ日本國ノ柱也余ヲ失ナラバ日本國ノ柱ヲ倒也』とか（御振舞鈔）『日蓮ニヨリテ日本國ノ有無ハアルベシ』とか（開目鈔）『我レ日本ノ柱トナラン我レ日本ノ眼目トナラン我レ日本ノ大船トナラン』等と誓はれたは何より確な證據ではあるまいか。

△日本の祖師はやがて大日本なる世界の祖師たることは理の當然である。

△試に大上人の國家觀の一端を示さんか夫の言論束縛の時代に出で武斷專制の治下に在て所有壓迫と妨害とを受けつゝも幕府の執權と五山の名僧を向ふに廻はして大聲疾呼（神國王書）『我日本國ハ一閻浮提ノ內月氏漢土ニモ勝レ八萬ノ國ニモ超ヘタル國ゾカシ』と叫んだのは啻に面積や方里の上の領土的國家を指して云たのでなく國體の奧底に深く潛める靈德靈性を指して云たのだから普通の在觸れた國家觀ではない隨つて其國家の元首を尊重することに於ても普通の天皇觀でなく一念三千の法華眼から見て神聖不可犯の天皇たることを訓示して（高橋書）『日本國ノ王トナル人ハ天照大神ノ御魂ノ入リカワラセ給フ王也』とか又は『先ヅ此國ノ大王ヲ敬ツテ後ニ他國ノ王ヲ敬フベシ天照大神八幡宮等ハ我國ノ本主也乃至王ト申スハ三ノ字ヲ横ニ書キテ一ノ字ヲ竪サマニ立テタリ横ノ三ノ字ハ天地人也竪ノ一文字ハ王也乃至天地人ヲ貫キテ少シモ傾カザルヲ王トハ名ケタリ』とか仰有つて吾國の天皇は全く天照大神の御再來である故に天地人の三才を一貫したる王と申すは日本の天皇に限れりとの斷案は誰しも云ひ得る常套語に似て而も大上人の活釋に依て始めて新らしき意義を見たのみならで生命をも賭して云ひ得られたので其印象を深からしめ其効果を厚からしめた。

△ガ尤も其當時北條一門が非常に横暴を極はめ身分は陪臣でありながら國政を執て天皇の廢立をも自由にするのみか專恣の結果三天皇を三個所に配流すといふ惡逆無道を敢てしたので（一昨日書）『日蓮生ヲ此土ニ得タリ豈ニ吾國ヲ思ハザランヤ』の大上人は奮然驟起口角泡を飛ばして（御振舞書）『隱岐ノ法皇ハ天子也權ノ大夫ハ民ゾカシ』と叫び尙ほ（富木書）『關東ノ武士等先祖傳來ノ君ヲ捨テ奉リ伊豆ノ民タル義時ノ下知ニ隨フ』と嘆きて大に非臣非民の罪を糾されたガ所謂權の太夫とは卽ち日本開闢以來謀叛人二十六名中隨一の朝敵たる北條義時のことである。

△勿論今日斯んな義時は居まいケレど體裁の宜い色の變つた義時なら思想界に隨分澤山居るから危險ではあるまいか。

△大上人が六百五十年前に天下を敵として斯く叫んだ此大音聲は爾來の思想界に反響して南北朝時代北畠親房の神皇正統記の尊王論を生み德川時代水戸光圀の大日本史の尊王論を生み幕末志士の勤王論を生み終に明治維新の王政復

古を生んで大正の今日あるを致したのであらう。

△成程大上人の當時は（成佛鈔）今日本國ヲ見ルニ當時五濁ノ障重ク闘諍堅固ニシテ瞋恚ノ心猛ク嫉妬ノ思甚シ』と仰有つた如く天地轉倒せる承久三年の翌年出現して（本尊鈔）此時地涌ノ菩薩始メテ世ニ出現シ但ダ妙法蓮華經ノ五字ヲ以テ幼稚ニ服セシメン』と是好良藥たる妙法劑を投じて五逆謗法の病を治療すべく自ら身命を正法弘通の犧牲に供された此時よ（佐渡『日蓮魁ケシタリ吾黨ドモ二陣三陣續キテ迦葉阿難ニモ勝レ天台傳敎ニモ超ヘヨカシワヅカノ小島ノ主（執權北條）ラガヲドサンヲヨジテハ閻魔王ノセメヲバイカンガスベキ佛ノ御使トナノリナガラ臆センハ無下ノ人々ナリ』（波木井鈔）『我不愛身命ノ法門ナレバ命ヲ捨テヽ此法華經ヲ弘メテ日本國ノ衆生ヲ成佛セシメン纔ノ小島ノ主君（北條執權）ニ恐レテ是ヲイハズンバ地獄ニ墮テ閻魔ノ責ヲバ如何セン』と壯なる哉本化の英姿！快なる哉上行の態度！五山震ひ畏れて道隆良觀も頸を縮むる左の軍令！（波水井鈔）『建長寺極樂寺等の念佛者禪宗等が堂塔を燒き拂ひ彼等が頸を由井が濱にて悉く切り失はるべく候不然者只今此日本國の人々他國より責られ同士打して自界叛逆の難あるべし』（撰時鈔）『建長寺等ノ一切ノ念佛者禪僧等ガ寺塔ヲ燒キ拂ヒヲ彼等ガ頸ヲ由比濱ニテ切ラズバ日本國必ズ亡ブベシト申候』とアヽ意氣何ぞ昂れる辭色何ぞ激しき（誘法書）『國ノ大蝗蟲（イナムシ）タル諸僧等近臣等ガ日蓮ヲ讒訴スル彌ヨ盛ナラバ大難倍々來ルベシ』（撰時鈔）『今日本國ノ高僧等モ南無日蓮聖人ト唱ントストモ南無計リニテヤアランズラン不愍不愍乃至日澤ハ眞言禪宗淨土等ノ元祖ヲ三蟲ト名ク』と膽は疾く城壘を拔き氣は既に勁敵を呑む旗鼓堂々軍隊の進まんとするや馬上の大將聲高く（御振舞書）『此身ヲ法華經ニ替ルハ石ニ金ヲカヘ糞ニ米ヲ替ルナリ』（佐渡書）『イタヅラニクチン身ヲ法華經ニ捨マイラセン事アニ石ニ金ヲカフルニアラズヤ』（修行書）『イカニ强敵重ナルトモユメユメ退スル心ナカレ恐ル、心ナカレ縱ヒ頸ヲバ鋸ニテ引切リ胴ヲバヒシホコヲ以テツツキ足ニハホダシヲ打テ錐ヲ以テモムトモ命ノカヨハンホドハ南無妙法蓮華經々々々々々々々ト唱テ唱ヘ死ニ死セヨ』！と長板橋上叱咤の聲矢叫びの音法王の三軍戰勝て勢高く三類の强敵既に斃る（修行書）『カヽル時刻ニ日蓮佛敕ヲ蒙リテ此土ニ生ケルコソ時ノ不祥ナレ法王ノ宣旨背キガタケレバ經文ニ任セテ權實二敎ノイクサヲ起シ忍辱ノ鎧ヲ着テ妙敎ノ劍ヲ提ゲ一部八卷ノ肝心妙法五字ノ旗ヲ指上テ未顯眞實ノ弓ヲハリ正直捨權ノ箭ヲハゲテ大白牛車ニ打乘

ヲ權門ヲカツパト破リカシコヘヲシカケコヽヘヲシヨセ念佛眞言禪律等ノ八宗十宗ノ敵人ヲセムルニ或ハニゲ或ハヒキシリゾキ或ハ生取レシ者ハ我弟子トナル或ハセメ返シセメヲトシスレドモカタキハ多勢也法王ノ一人ハ無勢也』等と聞來つて骨鳴り肉躍り血が湧き皮が破るゝの感あるではないか。

△ト云ふも全く『是好良藥』の南無妙法蓮華經を與へて精神的國病人病を根治せんとの大慈悲心から起る本化上行のお情けである。

△ところが『分登る麓の道は多かれど同じ雲井の月を見る哉』デ孰れも元は釋尊の說かれし法門なれば皆同じだから法華が好きなら法華に行け念佛が好きなら念佛に行けト云ふやうな者が居るので（修行書）『末法ノ今ノ學者何レモ如來ノ說敎ナレバ皆得道アルベシト思ヒテ或ハ眞言或ハ念佛或ハ禪宗等ノ諸宗諸經ヲ取々ニ信ズル也如是ノ人ヲバ若人不信毀謗此經乃至其人命終入阿鼻獄ト定メ給ヘリ』と云はれたが同じといふなら牛乳も石炭酸も一つと思ふ者だ。

△そして佛敎はもと對機說法『應病與藥』だから『難波の蘆は伊勢の濱荻』デ念佛も法華も名前が變つたゞけで畢竟は同じものと思ふ故る（妙法尼鈔）『法華最第一ノ經文ヲ見ナガラ大日經ハ法華經ニ勝レタリ禪宗ハ最上ノ法也律宗コソ貴クレ念佛コソ我等ガ分ニハカナヒタレト申スハ酒ニ醉ル人ニアラズヤ』とて大酒呑んで醉狂するものに比せられ或は（秋元書）『法華經ヲ行ズル人ノ一口ハ南無妙法蓮華經一口ハ南無阿彌陀佛ナンド申ハ飯ニ糞ヲ雜ヘ沙石ヲ入タルガ如シ』とて飯の中へ沙や石を雜へたら既に喰へないのに況して糞をかけたら喰へようか畢竟肥料にするならいつそ糞の中へ飯を入れる方が近路だらう（成佛書）念佛モ法華經モ一也ト云ハン人ハ毒モ藥モ一也ト云ハン者ノ如シ』とも云はれてあるが鷄卵の代りにモルヒネを飲んだら何うだ。

△斯んな連中が他宗權門にあるはまだしも籍を實敎に置て法華信者を氣取る連中にあるから溜らない。

△出雲邊には近頃弘法にのぼせてお大師巡ぐりをしたり觀音講に這入つて札打に出かけたり黑住にはまつて苦勞をしたり天理に詣でゝ屋敷を拂つたり甚しきは綾部婆々に惚込んで住所を立退くといふ所謂『法華信者』がある。

△それからやゝもすると日蓮大上人の事を彼此批評する米の蟲が隨分都會地に居るが。

△彼等には果してどれだけの素養學問道德知識が具備して居るか（阿佛鈔）『然レドモ

大智慧ノ者ナラデハ日蓮ガ弘通ノ法門ハ分別シ難シ』とも（報恩抄）『當世牛馬ノ如ナル智者共ガ日蓮ガ法門ヲ假染ニモ毀ランハ糞狗（イヌ）ガ獅子王ヲ吠エ癡猴（サル）ガ帝釋ヲ笑ニ似タリ』とも（開目抄）『種々ノ大難出來ストモ智者ニ我義破ラレズバ用ジトナリ』等と仰有ると同時に古往今來所有學問は日蓮幼少の時より疾く既に之を知れりと（南條書）『法然善導等ガカキヲキテ候ホドノ法門ハ日蓮ラハ十七八ノ時ヨリシリテ候也』アヽ此御言葉を今日の所謂『日蓮批評』家にきかしたきものである。

△記し來つた大上人は法華經の活現體なるが故に其國家觀も其人生觀も乃至其宇宙觀も其佛陀觀も皆ともに法華經壽量品の主要たる南無妙法蓮華經の中から出て居ることを豫め知らねばならぬ。

妙法蓮華經如來壽量品第十六

自我偈

自我得佛來　所經諸劫數　無量百千萬　億載阿僧祇
常說法敎化　無數億衆生　令入於佛道　爾來無量劫
爲度衆生故　方便現涅槃　而實不滅度　常住此說法
我常住於此　以諸神通力　令顚倒衆生　雖近而不見
衆見我滅度　廣供養舍利　咸皆懷戀慕　而生渴仰心
衆生既信伏　質直意柔輭　一心欲見佛　不自惜身命
時我及衆僧　俱出靈鷲山　我時語衆生　常在此不滅
以方便力故　現有滅不滅　餘國有衆生　恭敬信樂者
我復於彼中　爲說無上法　汝等不聞此　但謂我滅度
我見諸衆生　沒在於苦海　故不爲現身　令其生渴仰

因其心戀慕　乃出爲說法
常在靈鷲山　及餘諸住處
我此土安穩　天人常充滿
寶樹多華果　衆生所遊樂
雨曼陀羅華　散佛及大衆
憂怖諸苦惱　如是悉充滿
過阿僧祇劫　不聞三寶名
則皆見我身　在此而說法
久乃見佛者　爲說佛難値
壽命無數劫　久修業所得
當斷令永盡　佛語實不虛
實在而言死　無能說虛妄
爲凡夫顚倒　實在而言滅

神通力如是　於阿僧祇劫
衆生見劫盡　大火所燒時
園林諸堂閣　種種寶莊嚴
諸天擊天鼓　常作衆伎樂
我淨土不毀　而衆見燒盡
是諸罪衆生　以惡業因緣
諸有修功德　柔和質直者
或時爲此衆　說佛壽無量
我智力如是　慧光照無量
汝等有智者　勿於此生疑
如醫善方便　爲治狂子故
我亦爲世父　救諸苦患者
以常見我故　而生憍恣心

放逸著五欲　墮於惡道中
隨應所可度　爲說種種法
得入無上道　速成就佛身

三寶禮

一心敬禮　十方佛
一心敬禮　十方法
一心敬禮　十方僧

我常知衆生　行道不行道
每自作是念　以何令衆生

自我偈訓讀

我レ佛ヲ得テ自リ來タ經タル所ノ諸ノ劫數無量百千萬億載阿僧祇ナリ常ニ法ヲ說テ無數億ノ衆生ヲ敎化シテ佛道ニ入ラ令ム爾シヨリ來タ無量劫ナリ衆生ヲ度センガ爲ノ故ニ方便シテ涅槃ヲ現ズ而モ實ニハ滅度セズ常ニ此ニ住シテ法ヲ說ク我レ常ニ此ニ住スレドモ諸ノ神通力ヲ以テ顚倒ノ衆生ヲシテ近シト雖而モ見エザラシム衆我ガ滅度ヲ見テ廣ク舍利ヲ供養シ咸ク皆ナ戀慕ヲ懷ヒテ渴仰ノ心ヲ生ズ衆生既ニ信伏シ質直ニシテ意ロ柔輭ニ一心ニ佛ヲ見タテマツラント欲シテ自ラ身命ヲ惜シマズ時ニ我レ及ビ衆僧俱ニ靈鷲山ニ出ヅ我レ時ニ衆生ニ語ル常ニ此ニ在テ滅セズ方便力ヲ以テノ故ニ滅不滅有リト現ズ餘國ニ衆生ノ恭敬シ信樂スル者ノ有レバ我レ復タ彼ノ中ニ

於テ爲ニ無上ノ法ヲ說ク汝等此レヲ聞カズシテ但ダ我レ滅度スト謂ヘリ我レ諸ノ衆生ヲ見レバ苦海ニ沒在セリ故ニ爲ニ身ヲ現ゼズシテ其レヲシテ渴仰ヲ生ゼ令ム其ノ心戀慕スルニ因テ乃チ出デテ爲ニ法ヲ說ク神通力是ノ如シ阿僧祇劫ニ於テ常ニ靈鷲山及ビ餘ノ諸ノ住處ニ在リ衆生劫盡キテ大火ニ燒カルルト見ル時モ我ガ此ノ土ハ安穩ニシテ天人常ニ充滿セリ園林諸ノ堂閣種種ノ寶ヲ以テ莊嚴シ寶樹花果多クシテ衆生ノ遊樂スル所ナリ諸天天鼓ヲ擊ツテ常ニ衆ノ伎樂ヲ作シ曼陀羅華ヲ雨シテ佛及ビ大衆ニ散ズ我ガ淨土ハ毀ブレザルニ而モ衆ハ燒ケ盡テ憂怖諸ノ苦惱是ノ如キ悉ク充滿セリト見ル是ノ諸ノ罪ミノ衆生ハ惡業ノ因緣ヲ以テ阿僧祇劫ヲ過レドモ三寶ノミ名ヲ聞カズ諸ノ有ユル功德ヲ修シ柔和質直ナル者ハ則チ皆ナ我ガ身此ニ在テ法ヲ說クト見ル或ル時ハ此ノ衆ノ爲ニ佛壽無量

ナリト説ク久クアツテ乃マシ佛ヲ見タテマツル者ニハ爲ニ佛ニハ値ヒ難シト説ク我ガ智力是ノ如シ慧光照ラスコト無量壽命無數劫久シク業ヲ修シテ得ル所ナリ汝等智有ラン者此ニ於テ疑ヲ生ズルコト勿レ當ニ斷ジテ永ク盡キ令ムベシ佛語ハ實ニシテ虛シカラズ醫ノ善キ方便ヲ以テ狂子ヲ治センガ爲ノ故ニ實ニハ在レドモ而モ死スト言フニ能ク虛妄ヲ説クモノ無キガ如ク我モ亦タ爲レ世ノ父諸ノ苦患ヲ救フ者ナリ凡夫ノ顚倒セルヲ爲テ實ニハ在レドモ而モ滅スト言フ常ニ我ヲ見ルヲ以テノ故ニ而モ憍恣ノ心ヲ生ジ放逸ニシテ五欲ニ著シ惡道ノ中ニ墮チナン我レ常ニ衆生ノ道ヲ行ジ道ヲ行ゼザルヲ知テ度ス可キ所ニ隨應ツテ爲ニ種種ノ法ヲ説ク毎ニ自ラ是ノ念ヲ作ス何ヲ以テカ衆生ヲシテ無上道ニ入リ速ニ佛身ヲ成就スルコトヲ得セ令メント

偈中字句俗解

『我』偈中に我の字が十四あるが、我とて妄我とか假我とか眞我とか大我とかいふ學理上の言葉ではなく、單に釋尊の言葉なれども曾に釋尊ばかりでなく、總ての佛の自稱なれば大上人の御義口傳にも「我者佛界也、我者釋尊、我者釋尊一切衆生父也、我者佛身也」といはれてあれば、一往は十界中の佛を指せども再往は十界一身の佛を指して我といふ、勿論十九出家三十成道の釋尊に卽して顯はるゝ久遠實成の佛をも我といふ、故に御義口傳に「久遠者ハタラカサズックロハズ本ノ儘ト云義也、無作三身ナレバ初テ不成是不働也、三十二相八十種好不具足是不繕也、本有常住佛ナレバ本ノ儘也、是ヲ久遠ト云也」といはるゝが故に、久遠實成無作三身の本覺佛をも我といふ、大上人の所謂「五百塵點乃至所顯之三身而無始之古佛」も我の一字に歸納するのである。

『涅槃』偈中に方便現涅槃而實不滅度とあるが、涅槃といふは印度語にして滅度は支那語なれば兩方を擧げたものである、涅槃經に「不生不滅ヲ大涅槃ト名ク」とあるが、意味は生死の二法に於て迷を離れたのを不生不滅といふので、生れぬ死

なぬといふでなく二法に對して迷はぬといふこと故ゑ、佛の上では生も涅槃なれば死も涅槃である、而も涅槃を滅度と譯せば御入滅に用ふる方が便宜だで、偈中にて御入滅の義に限られてある。此場合には清き死にやう悟た死にやう安心せる死にやうの意味である。

『方便』偈中に方便の字が三あるが、便宜とか合宜とかの意味にやゝ中れども、「ウソ」とは全く違ふ、嘘といふは實の無きことである、方便に就て法華論貫には、一に法用方便とて小乘權大乘等の詰らぬ法門を用ひて衆生の機根に適應するのと、二に能通方便とて小乘權大乘等の法門を用ふるのは他日實大乘に通入せしめんが爲にして、實大乘の顯はるゝのは小乘權大乘等のお蔭とするのと、三に祕妙方便とて權卽實となりて權實が同體となれば名稱こそ方便でも其體は眞實なるのと、以上の三種を揭げてあるが、法華經の上にては多く第三の祕妙方便を用ふるのである。

『阿僧祇劫』偈中に阿僧祇の字が三あるが、阿は無の義にして僧祇は數の義なれば劫は時の義である、故に阿僧祇劫は梵語にて、支那語に譯せば無數時といふ、弘決にも「阿僧祇、此ニハ無數ト云ヒ、劫ハ時也」とあるから偈中の無數劫といふも阿僧祇劫の譯語である。

『神通力』偈中に神通力の字が二あるが、神の通力といふ意味とは少く違ふ、法華新註に「神ハ是レ天然不動ノ理卽チ法身也、通ハ是レ無壅不思議ノ慧卽チ報身也、力ハ是レ幹用自在卽チ應身也」とあれば法華經の上にては法報應三身の實體と作用とを神通力といふ、新註にまた「神ヲバ不測ニ名ケ、力ヲバ幹用ニ名ク、不測ハ則チ天然ノ體深ク、幹用ハ則チ轉變ノ力大ナリ」とも、又は「神ハ內ニ在リ卽體ナリ、力ハ外ニ現レ卽用ナリ」とも說れてあるが、結局は眞理の實體から起るところの不思議なる一大作用を指して現神通力といふ。

『靈鷲山』偈中に靈鷲山の字が二あるが、普通に靈山とか靈山淨土とかいふは靈鷲山の略稱にて耆闍屈山の譯語である、新註に「靈鷲山を鷲頭とも狼跡ともいふ山の峰が鷲に似て居るとか、又は山の南に尸陀といふ林が在て鷲が屍を喰て棲む故ゑ鷲山と名くとか、又は前佛今佛が此山に居るが佛の滅後には羅漢が住む法滅すれば支佛が住む支佛が無くなれば鬼神が住む」と云はれてあるが、兎にかく佛所在の靈蹟を指して靈鷲山と云たもの、だが釋尊が法華經を說き給ふ年限は八個年にして常に此山に於てし給うたが、法華經中にても迹門の說法は此山上にて前後

二回行はれ本門の說法は遙か虛空上にて一回行はれた之を二處三會の儀式といふ。

『顚倒』偈中に顚倒の字が二あるが、顚倒とは所謂冠履顚倒とか主客顚倒とかの意味で位地を倒にすることなれば、亭主が女房の家來に成り、先生が生徒の小使に成り、お客が藝妓の食物に成り、議員が菓子箱に制止されたり、信徒が狐狸牛馬に禮拜するが如きは魂の顚倒とも信仰の顚倒ともいふ。

『舍利』偈中に供養舍利とあるが、舍利とは梵語にて設利羅の略稱で佛の火葬の骨の意味である、或は蠶の病名で充分に成長しても絲を吐かずに白く乾固つた物にも名けられ、又は白き石の名にも名けらるゝが、多くは聖者の靈骨に名くる梵語にて、凡そ三種の意義がある、一に色身全碎の舍利とて佛骨を指して云ひ、二に佛像經卷法身の舍利とて說法を指して云ひ、三に衆生身具の舍利とて佛性を指していふ。

『三寶』偈中に不聞三寶とあるが、三とは佛と法と僧との三寶である、三寶に就て三種ありて、一には釋尊を佛とし法門を法とし文殊舍利弗を僧とするは別相である、二には金佛木佛を佛とし黃卷赤軸の經卷を法とし剃髮染衣の人を僧とするは住持である、三には宇宙間の覺性を佛とし萬物の理體を法とし覺性と理體と融和一致するを僧とするは同體卽ち一體である、斯の如くに三種の三寶ありと雖も大體は同巧異曲である。

『無上』偈中に無上法と無上道と、無上の字が二あるが、無上法といふ時は法華經の眞理を指し無上道といふ時は眞理の體得を指す、卽ち一は所顯の法體にして一は能顯の行道である、所謂妙法と菩提道なれども相融和する時は一體である。

妙法蓮華經如來壽量品偈

「自我偈」俗讀

我れ成佛してより以來、其經たる所の年月は無量阿僧祇といふ久しい時間を過ごしたが、其間は常に無數億の衆生を敎化して佛道に引入ようとして居るので、敎化の爲には假りに涅槃の滅を示した、ケレども、實は滅したのでなく常に世に在つて說法して居るのである、佛は近く目睫の間に在りと雖、如來の不思議力で顚倒の徒には見えざらしむるのだ、ガ、斯も滅したと見たならば必ず戀慕の心を生じて佛の舍利なりとも供養したい氣になるだらう、既に質直に且つ柔輭になりて、身命をも惜まずに佛を見奉らうといふ信仰の心が起つたならば、其時は、靈的に衆僧とともに靈山に現はれたことになる、デ、時に衆生に語らく我れ常に世に在つて滅せずと雖も、敎化の爲には方便で以て滅不滅卽ち非滅現滅を示すから、縱しんば娑婆以外の餘國にても苟も佛を恭敬するものさへあれば、其要求に應じて妙法を說くのである、然るを汝等は單に滅したとのみ思ふは間違ひである、サラバ何故斯くするかといへば、豫て衆生は苦海に沈沒して悶へ苦んで居るから、佛は其を救ふべく態と

滅を示して佛を慕はする、之を形益といふ、ガ、其心戀慕して佛を信仰する氣になれば、佛は爲めに出でゝ醍醐の妙法を說き給ふ、斯も佛は阿僧祇來常に靈山及び餘所に在つて絕えず敎化を垂れ給ふ、何と難有いことではないか、凡そ衆生の側では、三災四劫の火に燒かれて悶へ苦むと見る時も、佛の側では、此土は安穩にして天人常に充滿し、園林諸の堂閣は種々の寶で以て莊嚴せられ、寶樹には花果多くして衆生の遊樂する所なれば、諸天は天鼓を擊つて伎樂を奏し、剩さへ曼陀羅華を降して佛及び一會の大衆の身上に散じて居るといふ、斯の如き極樂の境界は、常に眼前にありと雖、而も衆生は憂怖苦惱に充されて居ると見る、ガ、之は衆生が犯した罪の報ひで阿僧祇來曾て三寶の御名だも聞奉らずといふ、可愛相なものである、サラバ諸の功德を修して柔和質直なるものは佛の常住を認むることが出來るとともに、佛も此輩の爲には佛壽の無量なることを說るゝ、ケレども幾久しくして後に漸く佛を見奉るものゝ爲には、斯くも佛には値ひ奉ることの難き趣を說き給ふ、我が智力は是の如しで、其智慧の光明は無邊際を照せば其壽命も無數劫に亘りて限がない、ガ、之は佛が宿世に久しく修行されし効果である、汝等智あらんものは毫も疑ひを生じてはならぬぞ、若し疑ひあらば宜しく其疑ひを斷破せよや、佛語は實にして虛し

からぬぞ、譬へば名醫が自分の狂子の病を癒さんとて工夫の結果、態と死だ樣に見せかけて狂子の病を癒したやうなもので、實は死んだではなけねども、衆生敎化の爲に方便して滅を示したので、我もまたこれ世の父たる所以である、若も佛が常恆不斷に存在するならば、顚倒の凡夫は愈々五欲七情を恣にして三惡道に墮落するだらう、之を不便に思召すから、態と滅を示して佛を渴仰するの心を生せしめ給ふ、サレバ佛は實體は不生不滅無始無終なれども、大慈大悲の上からは特に生滅の形益を垂れ給ふのである。

ア、久遠實成の大牟尼如來は、每に自から是の念を作し給ふ、則ち如何なる方法を運らしてゞも吾等衆生を敎化して、阿耨菩提道に入らしめ、卽身成佛の幸福を得さしたきものである、ト、所謂無上道に入り速に佛身を成就さしたいとは佛出世の本望にして信仰の歸嚮する目的である。

諸經中法華本門中心圖

- 別圓 頓 ― 華嚴部 ― 兼、二十一日間
- 藏通 漸 ― 阿含部 ― 但、十二年間
- 祕密 方等部 ― 對、十六年間
- 不定 般若部 ― 帶、十四年間
- ― 未顯眞實
- 圓 非頓非漸 非祕密非不定 ― 法華部 ― 純圓
  - 四敎竝說 四敎竝亡 涅槃部 追說一晝 追沉一夜間
  - 純圓
    - 迹門 隨他意 方便品 三周說法
    - 八年間 ― 出世本懷
    - 本門 隨自意 壽量品 文上文底

佛敎の中心は法華經、法華經の中心は壽量品、壽量品の中心　三身と三秘

法華新註に三佛單複開合の圖が揭げてある、

之は天台大師の立方なので、三身と云も二身と云も結局同じことで、唯だ開合の差である、が、義便の方では三身中主として報身を取る、此場合には、

報身(中)
- 自受用報身(上)法身
- 他受用報身(下)應身

報身が中心と成て、上は法身の理體に契合し下は應身の作用を惹起すが、文會の方でも『我成佛已來甚大久遠』の文に適中する故、大師の立方では壽量の本佛は主として報身を取る、ケレども三身を飽迄隔歷する譯でない、そして三身の出所は長行の『如來祕密』の文である、疏九に『一身卽三身ナルヲ名テ祕トシ三身卽一身ナルヲ名テ密トス』とあつて三身の融卽が示されてある、之を日蓮大上人は無作

三身鈔に『此義ハ爾前迹門ニコレナシ故ニ二重ニ釋スル時、又昔ハ說ザル所ヲ名テ祕トシ唯佛ノミ自ラ知ヲ名テ密トストモ云ヘリ唯佛ノミ自ラ知ルノ三身ナレバ爾前迹門ノ昔ハ之ヲ顯サズ壽量品ノ時始テ之ヲ顯ス是ヲ顯本ノ體ト云フ』と仰有つた。

全體三身なるものは、眞理の實體と知覺の本性と慈悲の周遍とである。

- 法身——眞理の結晶
- 報身——知覺の結晶
- 應身——慈悲の結晶

この三身は不離不別、一にして三、三にして一、其三なる時は作用にて其一なる時は本體である、故に一卽三なるを祕と名け三卽一なるを密と名くと同時に、此義が壽量以前に說れざるを祕と名け唯だ佛の內證なるを密と名くといふ、若し之を三因佛性に配當せば、

三結果
- 法——正因佛性
- 報——了因佛性
- 應——緣因佛性

三原因

正因は個有的理性、了因は個有的覺性、緣因は個有的行性、而も此原因的三佛性が其結果に現はれた場合には法身般若解脫といふのである、若し之を三觀三諦に配當せば、

法―空觀（眞理は無形の故に）空諦
報―中觀（空假の間なる故に）中諦
應―假觀（相好は有形の故に）假諦

何故中觀中諦が報身に當るかといふに、報身は法應二身の中間に居るからである、更に之を三學三業に配當せば、

法―定（動搖せず一定の故に）
報―慧（知覺の才能ある故に）
應―戒（規律の作法なる故に）

法―意（眞理の周遍猶ほ心の如し）
報―口（知識の開閉猶ほ口の如し）
應―身（行動の自由猶ほ身の如し）

尙ほ進んで

法―理―對境
報―知―知識
應―行―行爲

理は知識力に依て發見さるゝ側なれば對境である、知は勿論理を發見する側なれば知識である、理と知とが契合すれば一種の働を起すから作用の側は行にして行爲である、或は之を天地人の三才にでも、上中下の三位にでも、智仁勇の三德にでも。主師親の三尊にでも、佛法僧の三寶にでも、鏡玉釼の三種にでも配當が出來る、

法―理、對境、空觀、空諦、正、定、意、天、上、主、法、仁、鏡
報―知、知識、中觀、中諦、了、慧、口、人、中、師、佛、智、玉
應―行、行爲、假觀、假諦、緣、戒、身、地、下、親、僧、勇、釼

大上人は三身鈔に、三身は譬へば一本の扇子のやうなもので扇の體は法身にして扇と知らるゝは報身それが使用さるゝは應身なりと論された、且つ體軀に譬へて法身は底にあれば骨の如く報身は間にあれば肉の如く應身は外にあれば皮の如しと仰有つた。

法―骨、常住（燒ても骨は殘るもの）

報――肉、無常（燒けば肉は灰になる）
應――皮、無常（埋めば皮も土になる）

法身は常住にして應身は無常なれども、報身のみ常無常に亙れど七分は無常の方である、今此平易なる譬を以てしても皮肉骨別々なる時は一身を持つことは出來ない、矢張り底には骨が頑張つて居て其周圍には肉が附着し其外面には皮が附纏うて居てこそ一身が持たれる、法報應も亦然りで、之が別々なる時は無始無終三世常住が成立たぬ、成立たぬ時は三身卽一の本覺佛とは云へない、ト云ものは法身は單理なれば常住なれど應身は單物なれば無常にして、報身のみ其間に介在して兩端を引具するので、恰も肉が骨を擁し皮を支ふやうなものである、そこで單に報身に依て三身の圓融を明すのが大師の立方なれど、之は單に理論のみの三卽一論にして未だ事實を以て證明することは出來ない、若し事實を以て證明せんとならば獨り應身のみの無常や法身のみの常住を許さず無常も常住も三身諸共でなくてはならぬ、故に應身が生滅すれば隨つて法報も生滅し法身が非生非滅なら又隨つて應報も斯くなければならぬ、そして其無常も常住も皆是れ本有實在の應用なれば勝劣無く、況して三身毫も尊卑無く圓融一致して常に無始無終だと云ふのが大上人の立方である。

かの本尊鈔に『所顯ノ三身ニシテ無始ノ古佛ナリ』と仰有つたのは、所謂五百塵點の劫數に依て顯はされたる本有無作の本佛である、之を無作三身とも久遠釋尊とも稱するが故に、三大祕法鈔にも『壽量品ニ建立スル所ノ本尊ハ五百塵點ノ當初以來此土有緣、深厚本有無作三身ノ教主釋尊是也』とも仰有つた、此無作三身は御義口傳に所謂『ハタラガズ、ツクロハズ、モトノ儘』なる本有の三身にして、其緣起は本門壽量なるが故に御義口傳にも壽量品の『如來祕密』の文を揭げて『無作三身之依文也』と仰有つた。

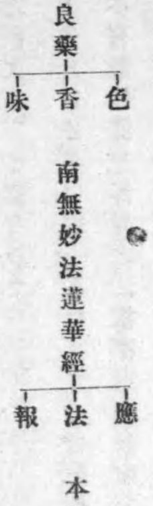
そこで、名詮自性、名は體を顯はすとせば無作三身の御名を何と稱すべきぞ、まさか南無本有無作圓融無碍之法報應三身如來では餘り長過ぎるのみならず、三身具足したる大功德、大實體、大作用を言ひ顯はすことが出來ない、止むを得ず南無妙法蓮華經と稱した、故に御義口傳に『無作三身ノ寶號ヲ南無妙法蓮華經ト云也』と仰有つた、然らば南無妙法蓮華經は無作三身の寶號なると同時に其實體なり功德なり作用なりである、壽量品に『此大良藥、色香美味、皆悉具足』と說れたるは之を總別の兩面から明したものである。

(總)此大良藥――南無妙法蓮華經（本佛）

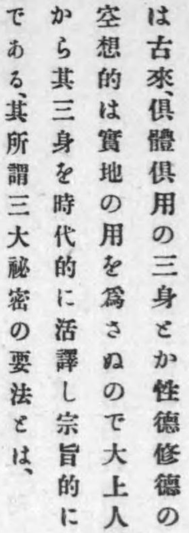
(別)色（應）香（法）味（報）

(總)皆悉具足――本佛の上に三身が具足す

此大良藥は南無妙法蓮華經なる本佛にして、色香美味は法報應なる三身である之を總別といふ。



從一出三では此大良藥を分析したものが色香味なれど、從三歸一では色香味が此大良藥に歸納する故皆悉具足といふ。



一より三三より一これは說明上の便宜なるが故に暫く體用兩門に約するケレども一三勝劣ある譯でなく體用尊卑ある譯でもない。

體門――此大良藥（本佛なる南無妙法蓮華經）

用門――色香美味（三身なる應身法身報身也）

體の本佛と用の三身とは全く無二無別、唯だ內容と外觀の差なるが故に彼此共に無始無終にして本有常住である、こゝを以て三身生滅の無常を示すも非生非滅の常住を現ずるも皆是れ本有動靜の一現象、實在海中の一波瀾である、此場合を用の三身とも體の本佛とも名くゆゑ、自然體用諸共に『ハタラカズ、ツクロハザル』本覺如來と稱し得らるゝのである。

就ては古來、俱體俱用の三身とか性德修德の三身とか色々に說れてある、ガ餘り推理的空想的は實地の用を爲さぬので大上人は主として事實的現實的を要するところから其三身を時代的に活譯し宗旨的に穩案して三大祕密の要法を揭げられたのである、其所謂三大祕密の要法とは、

(一)本門本尊　(二)本門題目　(三)本門戒壇

三大祕密要法、略して三大祕法、又は三祕と稱するがこれぞ雪中に飛ぶ佐渡の魂魄―闇夜に閃く龍口の肝膽！十和が壁か、陽春の曲か、大上人の御言葉に『日蓮當身之大事』、『去年九月十二日子丑の時に頸刎られぬ』、『之は魂魄佐渡の國に到て返年の

二月雪中に書す』、『弟子共に内々申す法門あり』、『但法華經の本門壽量品の文の底に沈めたり』等とあるのは此三祕のことである、乞ふ昔の三身を今の三祕に對抗せば

- 三身
  - 法（香）定——本門本尊
  - 報（味）慧——本門題目
  - 應（色）戒——本門戒壇
  - 三祕

田中氏の說に、色は見て分つべきもの故戒の表に現れて規正する作法あるに譬へ、香は見えずして薫を以て諸の餘臭を斥くる故定の心を一境に止めて諸の雜念なきに譬へ、味は自ら味ひて自ら知るべきもの故慧の自省自鑑して眞理を照らすに譬ふ、ト色香味を戒壇、本尊、題目に配當する意斯の如くである、凡そ本尊なるものは心の落着く境なるが故禪定にして定の德たるや諸の雜念を斥くるから香である、題目なるものは心の實相を感識するが故智慧にして慧の德たるや自知自覺の性分なれば味である、戒壇なるものは心の規律を實踐するが故戒法にして戒の德たるや清潔なれば色である、尤も戒壇と云ふ時は戒行實踐の場所に名くるも、本門には本尊を信じ題目を唱ふる當相が戒律實行なるが故に『是名持戒』と說れ、そして其所が直ちに戒法遵奉の道場なのである。

- 三祕
  - 本尊、定、香
  - 題目、慧、味
  - 戒壇、戒、色
  - 此大良藥

此大良藥を經文に是好良藥とも云へり、兎に角、其良藥には色香美味備ふるが故に皆悉具足と云ふ。

『此大良藥、色香美味皆悉具足』

- 南無妙法蓮華經
  - 香
    - 味
    - 色
  - 味
    - 香
    - 色
  - 南無妙法蓮華經

良藥とは南無妙法蓮華經にして色香味は戒壇、題目、本尊の三祕である此三祕を三業に配當せば

- 本尊——意業（果）
- 題目——口業（具足）
- 戒壇——身業（因）

意で妙法の本尊を念じ、口で妙法の題目を唱へ、身で妙法の戒律を守り、所謂三業揃うての信仰は直ちに三祕具足の修行にしてやがて三身圓備の修法である。

之を總すれば南無妙法蓮華經、之を別すれば本尊、題目、戒壇、かるが故に一の南無妙法蓮華經さへ信受念持すればそこに自然と三祕を圓具するのみならで亦た本佛悟上の因果をも獲得するのである、本尊鈔に『釋尊ノ因行果德ノ二法ハ妙法蓮華經ノ五字ニ具足ス我等此五字ヲ受持スレバ自然ニ彼ノ因果ノ功德ヲ讓リ與ヘタマフ』と仰有つたのは卽ち此意味である、且つこれを信仰の狀態に當符めなば、

本尊――盤、的
題目――糊、彈
戒壇――張、狙

浮動して止まざる紙の如き心も本尊の鐵盤に題目の糊で以て戒律のやうに張附けたなら、如何なる五慾七情の風にも動かなくなつて茲に安心が得られる、譬へば本尊は的の如く、題目は彈の如く、戒壇は狙の如きものゆゑ、戒法の狙で以て題目の彈を本尊の的に打ッつくれば茲に初めて壽量所顯の本佛を顯現するのである。

そして三祕が最も原則的に現はるゝ時は則ち三身と云はれ、其が宗旨的に建つる時は則ち三祕と云はるゝ故全く彼此同一のものである。

三身┬法身（境）本尊┐
　　├報身（智）題目┼三祕
　　└應身（行）戒壇┘

法身は境なるが故所對の本尊に對し、報身は智なるが故能詮の題目に對し、應身は行爲なるが故戒行に對す、若しそれ香花燈明を以て三身三祕に配當せんか、

法――定、香、本尊、薰香
報――慧、燈、題目、燈明
應――戒、花、戒壇、献花

香は佛の禪定の德を表彰したるもの故成るべく良きを用ふべく、燈は佛の智慧の光を讃歎したるもの故成るべく明るくすべく、花は佛の戒律の力を稱美したるもの故成るべく淨きを要する譯である、就ては佛壇は本尊の座所にして、數珠は題目の數を記する道具なれば合掌は戒律を守る作法である。

佛壇、本尊の座所、對境に囑する故に（法身）
數珠、題目の道具、知能に囑する故に（報身）

合掌、戒壇の作法、相好に囑する故に（應身）

大凡、如上の次第なるが之を要するに久遠本地の證得は三身にして而も此三身は無始無終三世常住の本覺如來である、之を滅後末法の今日に飜譯せんか則ち三祕の法門にして而も此三祕は無始無終本有常住の南無妙法蓮華經である、これを光顯することに於て釋迦牟尼佛は靈山霞中下方空界より本化大士を喚出して慇懃の附囑あり、大士拜承約の如くに出世して日蓮と名乘り久遠の本佛今時の大法これを光揚することに於て、碧血飛んで北斗傾き、鐵脚躍つて地軸震ふ、嗚呼『日蓮當身之大事』は何ぞ？

報恩鈔に『問テ云ク天台傳敎ノ弘通シ給ハザル正法アリヤ、答テ云ク有リ、求テ云ク何物ゾヤ、答テ云ク三アリ末法ノ爲ニ佛留メ置キ給フ迦葉阿難等馬鳴龍樹等天台傳敎等ノ弘通セサセ給ハザル正法也、求テ云ク其形貌如何、答テ云ク一ニハ日本乃至一閻浮提一同ニ本門ノ敎主釋尊ヲ本尊トスベシ所謂寶塔ノ內ノ釋迦多寶以外ノ諸佛並ニ上行等ノ四菩薩脇士ト成ルベシ、二ニハ本門ノ戒壇、三ニハ日本乃至漢土月氏一閻浮提ニ人每ニ有智無智ヲ嫌ハズ一同ニ他事ヲ捨テヽ南無妙法蓮華經ト唱フベシ』三大祕法鈔に『夫レ釋尊初成道ノ初ヨリ四味三敎乃至法華經ノ廣開三顯一ノ席ヲ立テ略開近顯遠ヲ說セ給ヘシ涌出品マデ祕セサセ給ヘシ實相證得ノ當初修行シ給ヘシ處ノ壽量品ノ本尊ト戒壇ト題目ノ五字也、敎主釋尊此祕法ヲバ三世ニ隱レ無ク普賢文殊等ニモ讓リ給ハズ況ヤ其以下ヲヤ乃至壽量品ニ建立スル所ノ本尊ハ五百塵點ノ當初以來此土有緣深厚本有無作三身ノ敎主釋尊是也壽量品ニ云ク如來祕密神通之力等云云、疏九ニ云ク一身卽三身ナルヲ名テ祕ト爲シ三身卽一身ナルヲ名テ密ト爲ス又昔ヨリ說ザル所ヲ名テ祕ト爲シ唯ダ佛ノミ自ラ知ルヲ名テ密ト爲ス佛三世ニ於テ等ク三身有リ諸敎ノ中ニ於テ之ヲ祕シテ傳ヘズ等云云、題目トハ二意有リ所謂正像ト末法ト也正法ニハ天親菩薩龍樹菩薩題目ヲ唱ヘサセ給シカドモ自行バカリニシテサテ止ヌ像法ニハ南岳天台亦題目計リ南無妙法蓮華經ト唱ヘ給テ自行ノ爲ニシテ廣ク他ノ爲ニ說ズ是理行ノ題目也末法ニ入テ今日蓮ガ唱フル所ノ題目ハ前代ニ異ナリ自行化他ニ亙リテ南無妙法蓮華經也名體宗用敎ノ五重玄ノ五字也、戒壇トハ王法佛法ニ寘シ佛法王法ニ合シテ王臣一同ニ本門ノ三大祕密ノ法ヲ持テ有德王覺德比丘ノ其乃往ヲ末法濁惡ノ末來ニ移サン時敕宣並ニ御敎書ヲ申下シテ靈山淨土ニ似タラン最勝ノ地ヲ尋テ戒壇ヲ建立スベキ者歟時ヲ待ツベキノミ事ノ戒法ト申ハ是也』

此大法門は馬鳴龍樹の賢哲と雖も、天台傳敎の敎傑と雖も、得て其內容の一端だも窺知することの出來ないと同時に弘通することも出來ない本化獨占の要法である、サラバ此要法の由て起る原始的無作三身に到ては毫も理解の出來ないと同時に口外することも出來ない本化獨歩の妙處である、假令天台大師が壽量品を解釋すとも唯だ文上の本門にして未だ文底の本門にあらざれば天淵霄壤到底同一の論ではない。

本門┬文上（五百塵點）本佛言、隨他意、能證
　　└文底（無始無終）本佛意、隨自意、所證

開目鈔に『法華經の本門壽量品の文の底にシヅメたり龍樹天親知つてしかも未だ拾ひ出さず但我が天台智者のみ是を懷けり』と仰有つたのは所謂壽量文底に祕藏されし本化の大法門、こゝを以て大師は『後五百歲、遠沾妙道』と云て本化大法流布の時節をしたひ、傳敎も『正像稱過已、末法太有近』と云て末法の時節が近附いたのをしたひ『代ヲ語レバ像ノ終リ末ノ初メ地ヲ尋ヌレバ唐ノ東、羯ノ西、人ヲ原ヌレバ則チ五濁ノ生、鬪諍ノ時也』と云て皆共に本化出現の大法門を羨望されて居る、……三澤鈔に『九月十二日の夜龍の口にて頸を刎られんとせし時より後ふびんなり我につきたりし者どもに眞との事を言ざりけると思て佐渡の國より弟子どもに內々申す法門あり、之は佛より後迦葉阿難龍樹天親天台妙樂傳敎義眞等の大論師大人師は知てしかも御心の中に祕せさせ給し口より外には出し給はず其故は佛制して云く我滅後末法に入らずば此大法言ふべからずとありしゆへなり』とも、開目鈔に『日蓮と云し者は去年九月十二日子丑の時に頸刎られぬ之は魂魄佐渡の國に到りて返年の二月雪中に書して有緣の弟子へ贈れば畏ろしくて怕しからず見ん人いかに戰じぬらん』等と仰有つた法門は果して何である?、『所有ノ眞應ハ彌勒ノ境界ニアラズ』彌勒でさへ本化特有の法門は得て窺知することが出來ないと云つた、況して馬鳴龍樹無着天親等の大論師、南岳天台妙樂傳敎等の大人師、焉ぞ能く本化內證の法門を解剖し得ようぞ、輔正記に『法是レ久成ノ法ナルヲ以テノ故ニ久成ノ人ニ付ス』といふ眞に所以あるかなである、

嗚呼、刀杖瓦石、悲風慘雨の五十年、伊豆の怒濤に、房州の要擊に、相州の燒打に、佐渡の深雪に、身命を賭して絕叫されし大上人の大法門は何?、劍電一閃の下笑つて捧ぐる重病救治の是好良藥！　立刀風寒き龍口の斷頭場裡靜に唱ふ南無妙法蓮華經！

これぞ之れ、無始無終三世常住の本覺佛、またこれ久遠一念之如來壽量品！。

大上人、『法蓮鈔』に曰く、

毎朝讀誦せらるゝ自我偈の功德は唯佛與佛乃能究盡なるべし夫法華經は一代聖教の骨髓なり自我偈は二十八品の魂なり三世の諸佛は壽量品を命とし十方の菩薩も自我偈を眼目とす自我偈の功德をば私に申すべからず次下に分別功德品に載せられたり此自我偈を聽聞して佛に成たる人々の數をあげて候(乃至)されば十方世界の諸佛は自我偈を師として佛に成らせ給ふ世界の人の父母の如し云々と。

大意

古人が華嚴經を讀まざれば佛の富貴なるを知らず、と云ふと雖も、蓋し華嚴經は京美人のやうで、其美人も實は極彩色の人形美であつて、生きた自然美の美人ではない、然るに法華經は古色蒼然たる神社佛閣のやうで、何となく崇高の氣が充て居る、阿含經は無茶に頭を下げて額越しに御機嫌を損じないやうに諂ひ、髯の塵を拂ひ、鼻息を窺ひ、眼色を見て、如何なる場合も御無理御尤と申上ぐる太皷持の如く、衆生の機根に隨ふ、それに比して法華經は士君子に交はるやうで、何となく心から腰を折り膝を屈せざるを得ないやうな氣がする、ガ方等經に到つては、人間の共進會の如く、借りた金を預けて銀行の破產を喰つた者が居れば、議員の選擧運動に賄賂を取遣りして監獄に這入つた者も居るし、流行の帶が買つて貰へぬとて不貞腐つて寢込む女が居れば、投機に負けて頻りに齧ぎ込む男も居れど、法華經の場席は王公大臣の會合のやうで、何となく神聖にして犯すべからざる威風が存して居る、次の般若經は洋々たる春の海を望むが如く、廣大溫和に法開會はするが人開會はしないゝガ法華經に來ると法人ともに開會するから、一の地球上に山川草木禽獸蟲魚が

仲能く共同生活するやうなものである、最後の涅槃經は丸で蟬のぬけ殼の如く、正味の御本尊は疾くに法華經へ飛來つてヲーケストラを奏つて居る、斯の如くに、法華經は一切經中の樞要なれば、其又法華經の神髄は卽ち壽量品である、故に日蓮大上人は開目鈔に『一切經の中に此壽量品ましまさずば人に神ひのなからんが如し』とも、亦本尊鈔に壽量一品を中心にして次前の涌出後半と、次後の分別前半との『一品二半ヨリ外ハ小乘教邪教未得道教覆相教ト名ク』とも仰有つたぐらゐ大切な經典である、ゲに如來出世の本懷を吐露して佛教信仰の歸着を統一されし經典なるが、故に大上人も開目鈔に『壽量品の佛を知ざる者は父統の邦に迷へる才能ある畜生なり』と仰有つたぐらゐ珍重の物、ダから華嚴宗の澄觀は私かに此義を取て華嚴經心如工畫師の文の魂とし、眞言宗の善無畏は巧みに此義を盜んで眞言宗の肝心とし、道邃和尙は偈中の常在靈鷲山の文を法界道場の一偈と名けて傳敎大師に授けたとか、弘法大師は宗祕論に偈中の大火所燒時我此土安穩等の文を號して金剛界なりと推尊したとか、其他の諸宗派にて此壽量品を寧ろ羨望するの餘り、品中の久遠實成の義を而も横領したものさへ居る、例せば眞宗の親鸞上人は建長再治の大經讃並に諸經讃の中に彌陀の久遠實成說を造つて得意がつた、蓮

如迄が太鼓叩いて之を囃立てたが元で、久遠實成阿彌陀本願寺の號を敕許らしく仕組んだといふ騷ぎ、このぐらゐに各宗の色男を騷がしたる壽量品は、天の成せる美人が浴後薄化粧して鏡の前に立つたるか、但しは芙蓉の花が白露を含んで水面に臨んだるか、いづれにしても惣方から懸想さるゝ經典は一切經中唯壽量品あるのみ、そして壽量品を末世の吾等が爲めに態と讀み易きやうに短簡輕便に縮めたものが、則ち二十五行半五百十字の自我偈なれば自我偈は卽ち壽量品の長行を縮少したもの故、美人の寫眞か、佳人の模型か、將た髓の中の水なるか、其明すところは壽量本佛の眞價値を揭げて大慈悲大功德大智慧大魂魄をサラケ出したものである、故に法說の段にては、三世益物と總結不虛とに科が分れて本佛の大慈力用を示されてある、就中現在を頌するところの『時我及衆僧、俱出靈鷲山』は如何に極惡の吾等も此身此儘に極善の如來に靈化したやうな感がする、其未來を頌する機感と常住不滅の『沒在於苦海、大火所燒時、我此土安穩、散佛及大衆』は餘りに難有くて（何事の御座ましかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ）如何に無信仰でも覺えず合掌する氣になる、次に譬說の段にては、開譬と合譬とに科が分れて本佛の大慈力用が三世に行渡つたところの『如醫善方便、我亦爲世父』は知らぬ間

に涙が落ちて慈悲の廣大なるに泣ける、が殊に本佛の三輪不思議の力で以て形聲の兩益を而も現生現滅に托して非生非滅の實在を示し給ふところは、人間の得て計ることの出來ない最も崇高にして最も雄大なる方面なので、此不思議力の存する靈格を稱して本佛といふ、そして其本佛とは果上より見られし吾等の境界である、ケレども吾等は自己を中心にするから其眞價値を認むることが出來ないのみでなく、兎角情の曇りに遮ぎられて本來の眞面目が見えない、デ依然苦海に沒在し又は大火に燒かるゝと見る故る、如實に三界（現在世界）の相を知見することが出來ない、然るに本佛を中心にするならば『惜し欲しや憎や可愛がやみぬれば今は世界が丸で我物』と成つて、宇宙本來の面目其儘を靈化するから大火所燒時の當相が直ちに我此土安穩の寂光である、斯くなると今迄狹かりし娑婆が中心と成つて十方の淨穢を包籠するほど廣くもなれば、生死に拘束されし吾身も其束縛を脱して悠遊天地に翱翔するほど大きくもなれる、此趣を雄麗典雅詩的に綴られしものが自我偈である、そして自我偈二十五行半五百十字の最初の自我の自の字と、最後の佛身の身の字とを結附けると自身と讀まれ、我の字と佛の字とを結合すると我佛と讀まれ、卽ち自我は佛身なりと讀まるゝ故に自我偈は吾等の卽身成佛を明したることになる、而も斯くなるのには一佛が五百塵點の大昔に於て、觀念修養の結果其身が久遠の本佛なることを悟られて後法界を見渡し給ふと不思議にも法界の全體其儘が一佛の如くに久遠の本佛に見えたので、吾等の身體も國土も皆共に久遠實成の本佛と顯はれ了つた、例へば先生の價値が顯はれたので生徒の價値も學校の價値も顯はるゝやうに、一佛の眞價値が顯はれたから吾等の身體も卽身成佛し國土も娑婆卽寂光と成つた、デ自我偈は久遠本佛の知見より見給ふところの吾等の戸籍謄本である。

尙ほ、此偈を自我偈と稱するは、最初に『自我得佛來』とある句から取て自我偈と稱するは勿論なれど、大上人の御義口傳に『自トハ始ナリ、身トハ終ナリ、始終自身ナリ、中ノ文字ハ受用ナリ、仍テ自我偈ハ自受用身ナリ、法界ヲ自身ト開キ法界自受用身ナレバ自我偈ニアラズト云コトナシ』とある故る、大上人は此偈五百十字の始の自我の自の字と、終の佛身の身の字と始終が自身の二字にて、其中間の五百八字は法界を自身の所有として受用する功德が明してあると仰有つた、デ此邊から自我偈と稱するのである、又之を久遠偈とも稱するが、此場合は此偈の所詮は釋尊の久遠（本地）實成を明したものなれば同じく『久遠トハ、ハタラカサズ、ツクロハズ、モトノ儘ト

云義ナリ、無作ノ三身ナレバ初テ成ゼズ是働サヾルナリ、三十二相八十種好ヲ具足セズ是繕ハザルナリ』とある故ゑ、大上人は釋尊の久遠とは働かさず繕はざる本有の儘の功德が明してあると仰有つた、デ此邊から久遠偈とも稱するのである、サラバ自我偈といへば吾等の眞價値に名附けたことになる、ガ久遠偈といへば佛陀の大功德に銘打つたことになる、自我偈と云ても久遠偈と云ても、何方でも宜しい、ケレども壽量偈と云つた方が兩方へ關聯して一層宜しからうと思ふ。

乞ひ願くは、及ず乍ら、三たび肱を折りて著述したる此自我偈俗解を一讀して、信せずばセメテ惡口なりとして給へ『信せずばせめてのことにそしれかし汚れぬ絹は洗はれもせず』因謗墮惡必由得益とは此事である、南無妙法蓮華經、合掌敬禮。

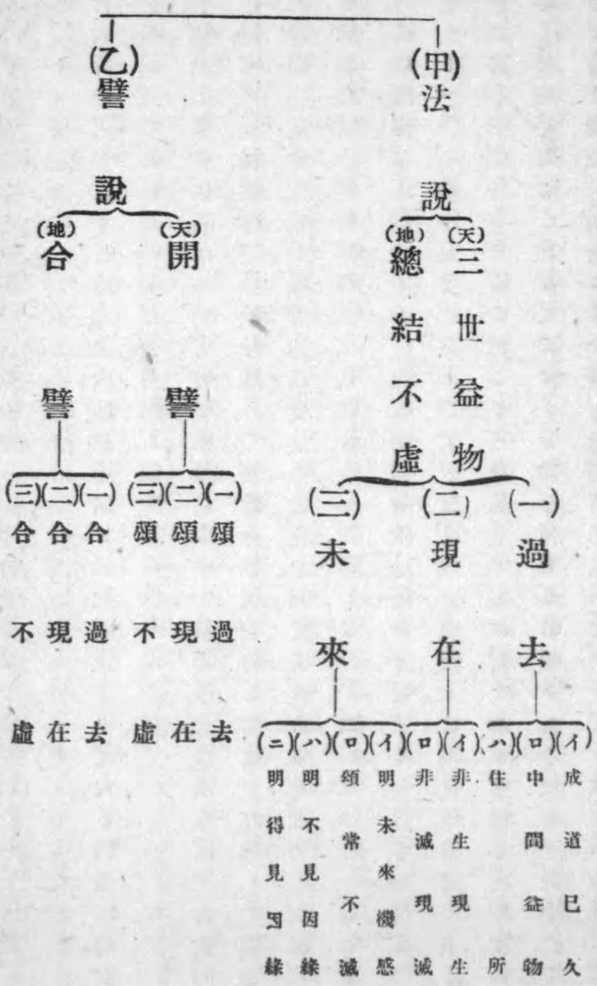
偈に就て

此偈を自我偈とか久遠偈とか稱するも皆略稱で、委しくは『如來壽量品偈』と稱すべきである、そして偈とは梵語の略稱なれば伽陀といふべく、支那語にては頌といふ、蓋し頌とは文言を美麗にして歌頌するの意である、英語にて云へば卽ち詩句又は節に中れるとでも譯すべきか(?)義疏に偈に二種ありといふ、一には首盧偈として經を數ふるに長行偈頌の別なく但三十二字を具へさへすれば一首盧と云ひ、二には結句偈として四言五言七言等の別なく必ず四句を以て一偈とするを云ふ、普通の偈は第二の分であるが、之に亦二種ありて伽陀卽ち孤起の偈と路伽陀卽ち長行を頌したものとである、そして偈を用ふるに就ては『十住毘婆沙』に十通りの意義が揭げられてある、一には國土に隨ふ天竺に散華貫華の說ありて恰も序と銘とのやうなものである、二には樂欲の不同に隨ふ散說を好むものあれば章句を好むものがある、三には生解の不同に隨ふ或は散說にて領解すれば或は章句にて悟了するものがある、四には利鈍の不同に隨ふ賢者は一度聞て悟れば愚者は再び聞て漸く知るゆゑ、五には同じ事柄を慇懃に說いたことを表す、六には後人をして信を經文に置

したい爲である、七には態と言語を換へて說けば聽者が飽を生せぬからである、八には意味の無盡なることを表して長行に其一を明せば偈頌に其二を明すといふ、九には至人に無方の用あることを示す卷舒自在にして伸縮を自由にするが故である、十には來聽者に前後あるが故に後來の者の疑を除く爲である、以上の如き理由に依て偈が用られてある、デ此自我偈も矢張り其理由にて五字本一百零二句あり、て、法說譬說と別れて、法說には三世益物と總結不虛とを頌し、譬說には開譬と合譬とを頌す、文言は短簡なれども能く長行壽量本文の意義を明し得て餘すところがない計りか、未來の益物を頌する段は長行よりも却て詳細を盡して、中にも未來の機感と常住不滅と不見の因緣と得見の因緣とが明してある所は一句一拜せざるを得ない感がする。

こゝを以て、予は及ばずながらも『令顚倒衆生、一心欲見佛、我見諸衆生、因其心戀慕、不聞三寶名、如醫善方便、行道不行道』の七句に最も腦漿を絞り、就中『大火所燒時』より『散佛及大衆』に到つて最も心血を濺ぎ、且つ『壽命無數劫』の所にて久成彌陀說を論じ『勿於此生疑』の所にて信仰の何たるを明して、イト平易通俗に解釋を試みたから、讀者乞ふ先づ此處を一讀して後ち他所に及ばれんことを希望し、併せて左の科段を一瞥せられたし。

自我偈科段圖解



本佛に就て

天台大師の天台宗と、日蓮大上人の日蓮宗との教義上より見たる、壽量本佛說の差異を略記して、特に吾が法華會員諸君の參考に供せんかな。

顯本宗の本多日生師は、法華文句を引證し來つて是等の文に依らば天台大師は舊來の諸家が法報應の三身を分離して釋尊を輕視したる諸論を打破して釋尊中心の三身卽一論を主唱し、則ち諸家は法身常住を以て壽量の佛を說明し又は應身無常を以て壽量の佛を解釋したる孰れにも贊同しないで別に三身卽一論を主張されたのは圓滿なる解決であつた、就中報身の功德を詮量するを以て壽量品の要旨なりとて『記』に義便文會といふことを云はれた、義便とは報身の智慧は上は法身の理に冥し下は應身の機に契ふて三身具足するの謂である、文會とは經文に我實成佛已來甚大久遠とある文に會ふて物を利するの謂である、故に三身中にても當品の本佛は報身を正意とすべきことを唱導せられた、ケレども大上人の其に比較せば大師は未だ報應の無始實在を明さゞるが故に、究竟の極致は却て法身爲本の舊解に如同して寧ろ破斥したところの法身常住說に傾けりと評し、而も大上人は能

く此缺陷を看破して報應の無始實在を主唱し給ふた開目鈔に『法華前後の諸大乘經に一字一句もなく法身の無始無終は說けども應身報身の顯本は說れず』と仰有つた點は大師とは大に異なりとし、且つ大上人は義便文會の報身正意を取給はざるのみでなく、無始常住として明せる性德三身說をも一轉して更に修成報應の無始實在說を主張し給たのは、本化獨步の權威なりと評し、尙又三身論より分身論に及んで法華玄義を引證し來つて是等の文に依らば大師は法華の如き分身說が諸經になきことを知りながら諸佛に分身あることを許して、時間的に有始報身の散體を取ても未だ無始應現の分身を取らず、空間的に局限の諸佛を許しても未だ無限の諸佛を分身散體とは許さぬ、然るに大上人は取要鈔に『盡十方の諸佛は我等が本師敎主釋尊の所從等なり、天月の萬水に浮ぶ是なり』等と仰有つて、盡十方三世の諸佛を悉く本師釋尊の分身散體とし給たのは、台蓮兩宗に於ける釋義の廣狹を推知すべしと評し、尙進んで村上專精氏の佛陀論を錄し來つて氏は釋迦中心を認めながら大日中心及び彌陀中心を容るゝは矛盾なりと評されしは聊か痛快である、之を要するに大師は壽量の本佛を有始の報身に定むるも、大上人は壽量の本佛を無始の報應に決し給へりと評されたが成程御尤の樣ではあるが、然し

大上人の三身卽一論は大師の其と比較せば勿論天地の差異である、ケレども所謂本尊鈔に『五百塵點、乃至所顯の三身にして無始の古佛なり』と仰有つたからは、強ち報應の無始實在ばかりを取て壽量の本佛とは決し給はぬだらう、既に五百塵點と云へば尙ほ局限あれども其局限に卽して無局限を顯せば、有始に卽して無始である、則ち五百塵點に依て顯はされたところの三身が古佛なれば、其古佛は取も直さず本佛である、本佛とは大上人の御義口傳に所謂『ハタラカサズ、ツクロハズ、モトノ儘ト云義也、無作ノ三身ナレバ初テ成セズ是働カザル也、三十二相、八十種好ヲ具足セズ是ツクロハザル也、本有常住ノ佛ナレバ本ノマヽ也』と仰有つた、本有の三身なので無始無終の佛である、則ち時間的には久遠劫來無量壽の佛なれば空間的には十方法界無邊際の佛ゆゑ、或說己身、或說他身、或示己身、或示他身の形聲の兩益を垂れ給ふところの本佛である、大上人も此本佛を以て壽量の佛なりと定め給ふた、故に日向記に『如來トハ釋尊、總テハ十方三世ノ諸佛ナリ、別シテハ本地無作ノ三身也』とか、又は『我ハ法身、佛ハ報身、來ハ應身ナリ、此三身ハ無始無終ノ古佛ニシテ自得也』等と仰有つた、シテ見ると強ち報應の無始のみを取り給はで、五百塵點、乃至所顯の無作三身を取て、壽量の佛本佛なりと定め給ふたであらう、デ予が本講演中屢次本佛と云ふのは卽ち此無作三身のことであつて、此佛は生佛一如、依正不二、十界圓具の大佛である、此大佛は卽ち所顯の三身にして勿論法、報應が懸隔したる佛でもなく、また報身を正意とする佛でもなく、況して報應のみの佛でもなき、三身卽一圓融合體したところの佛である、これ予の信仰するところの所謂本佛である、乞ふ之を諒せよや。

妙法蓮華經如來壽量品偈

自我得佛來　所經諸劫數　無量百千萬　億載阿僧祇

『我レ佛ヲ得テ自リ來カタ、經タル所ノ諸ノ劫數ハ、無量百千萬、億載阿僧祇ナリ』、成道の已に久しきを頌する一段である、得佛の佛といふを天台大師は『今正ク本地報身ノ功德ヲ詮ス、而テ報身ノ智慧ハ上ミニ冥シ、下モニ契ス、三身宛足セリ、故ニ如來壽量品ト言フ』と云れたが、其意味は佛に法、報、應の三身ある中で、報身如來は智慧の佛であるから上は理體の法身に合して開悟もできれば下は衆生の感機に契ふて應身の効用を起すこともできるので、理、智、用の三德を一身に具備して都合が宜い所から三身の中にても特に報身如來を取られたのである、劫數の劫といふには芥子劫と磐石劫との二說があつて、芥子劫といへば周圍四十里の庫に滿てる芥子粒を三年目ごとに、一粒宛取去て庫の內が空虛に成た時を一劫といふ、磐石劫といへば周圍四十里の石を三年目ごとに、一度宛天人が天降り來つて羽衣で以て摩去て石の形が磨滅した時を一劫といふ、孰れにしても永い時間を云たものである、斯の如き劫數を百千萬、億載阿僧祇も經過したといふ、億載といふを補註には『百ガ千ヲ生ジ、千ガ萬ヲ生ジ、萬ガ億ヲ生ジ、億ガ兆ヲ生ジ、兆ガ京ヲ生ジ、乃至正ガ載ヲ生ズ、載ハ地モ載ス能ハズ』と云てある、阿僧祇といふは、阿は無の義にして、僧祇は數

の義なれば、共に大數に名けたる梵語である、どにかく成佛以來の時間の非常に長いことを示されたものであるが、長行の文にては之を委しく說明するのに一の譬が擧られてある、其は三千世界を粉碎して塵にする、其塵の一を東方五百千萬億那由陀、阿僧祇の國を距てゝ置く、そして斯の塵の置れて無くなる迄としたならば彌勒よ、汝は其國の數を計算することが出來るや否や、流石の彌勒も之には如何なる計算家でも計算が出來ないと答へた、スルと釋尊は『我レ成佛シテ已來タ、復タ此レニ過ギタルコト、百千萬億那由陀、阿僧祇劫ナリ』であるぞと仰有つた、卽ち自我偈の『我レ佛ヲ得テ自リ來カタ、億載阿僧祇ナリ』の文は之であつて、最早說明する迄もなく、釋尊は十九歲で出家し三十歲で成道せる佛ではなく、實は五百塵點以前の古佛であることが判る、サリとて十九出家三十成道の釋尊を離れて別に古佛がある譯では無けねども、世人は多く佛とし云へば約三千年前に印度に現はれた釋尊とのみ思ふから、其は大なる誤解である、若し其のみが佛だと云へば如何にして吾等は成佛が出來ようか、隨つて釋尊出世の本懷も、吾等信仰の飯着も、佛敎統一の必要も無くなつて了ふ、シテ見れば印度出現の釋尊に卽して無始の古佛を顯はすといふことは非常に大切なことである、故に本門自我偈の說法がはじまるに先立つて三誡三請といふ、壯重な誡めと、懇懇な請ひとの儀式が終ると、釋尊は彌勒等一會の大衆に向つて、嚴かに『汝等諦ニ聽ケ、如來ノ秘密神通ノ力ヲ、一切世間ノ天人、及ビ阿修羅ハ、皆今ノ釋迦牟尼佛ハ、釋氏ノ宮ヲ出デ、伽耶城ヲ去ルコト遠ラズ、道場ニ坐シテ、阿耨多羅三藐三菩提ヲ得タリト謂ヘリ』と仰有つた、之は釋尊を近頃出現の聖人位ゐに想ふだらうが、それは大なる誤解である、若し誤解の儘にして置けば吾等人間は云に及ばず、天地國土の成佛は如何にして出來ようぞ、然るに其釋尊が『我レ實ニ成佛シテ已來、無量無邊、百千萬億那由陀劫ナリ』と仰有つたので、雲霧を排して日月を望んだやうに一會の疑は晴れた、その疑といふのは是迄釋尊は十九出家三十成道の佛だと思つたのに、イザ妙法を附囑といふ場合になつて、下方空中から喚出されし弟子の上行等は丸で百歲の翁のやうに、白髮老體である不思議、不思議も不思議、世の中に親が若くて子が老ゆる筈はない、老いたる上行が釋尊に對して師匠と申せば、若き釋尊も上行に對して弟子よと喚ばゝるのを見ると、恰も親が二十五歲で子が百歲の樣に見ゆるが、之は如何なる譯であらうかと、彌勒をはじめ滿坐の參詣が一樣に疑つた、然るところへ我實成佛已來、阿僧祇劫、自我得佛來、所經諸劫數億載阿僧祇と仰有つたのでハハハハ弟子が老いてるも其筈よ、師匠の釋

尊は大古以來の古佛だものと疑は晴れた、之を破近顯遠の法門といふ、其意味は釋尊を十九出家三十成道の近頃開悟の佛と思ふは誤見である、其誤見を破て五百塵點以前の古佛と思ふべしとの意味であるが、之は吾等天人修羅の妄見を破る一往の解し方なので、若、再往其實を論せば十九出家三十成道の始覺の佛を離れて別に久遠本覺の古佛がある譯ではない、之を開近顯遠の法門といふ、其意味は矢矧の橋の上に臥する一乞食を離れて、別に鷄林八道をも靡かす太閤秀吉は居ないとの意味であるが、此樣子を委しく說明したものは自我偈である、デあるから自我偈は一切經中の樞鍵である、若も一切經中に自我偈が無つせば、釋尊出世の本懷も、衆生成佛の大道も、信仰歸着の要點も、佛敎統一の權威も無くなつて了ふ、故に日蓮上人は開目鈔に『一切經の中に此壽量品ましまさずば、天に日月の、國に大王の、山河に珠の人に神ひの無らんが如し』と仰有つた、然らば自我偈は何故一切經中の魂である か、『开は法華經の序分無量義經に『種々ノ方便ヲ以テ、四十餘年ニハ、未ダ眞實ヲ顯サズ、終ニ無上菩提ヲ成ズルコトヲ得ズ』と說れてある、之に依て見ても自我偈以前の法門には絕えて本門本佛の開顯がなき故に、如何に狂ひ廻ても成佛が出來ざつたことが判るが、成佛と申しても十界擧つて成佛が出來なければ駄目だ、然らば十界とは何ぞや、則ち我等の心の働を知、情意の三に分ける其の內の情の方を十通りに分けたもので、腹の立つは地獄の心、慾の起るは餓鬼の心、愚痴の涙れるは畜生の心、鬪爭の起るは修羅の心、五常を守るは人間の心、快樂を事とするは天上の心、入相の鐘の音に浮世の夢を醒すは聲聞の心、花散り葉の飛に無常を悟るは緣覺の心、妻子可愛の念は菩薩の心、一視同仁彼此の別なきは佛陀の心、之を心の上の十界といふが、皆情の方面を分けたもので、譬へば十本の骨が一枚の紙で張られた扇のやうなもので、一心で張られた十通りの作用である、ところが爾前とて自我偈以前の法門では假ひ十界を明しても、チリチリバラバラだから紙の破れた扇と同樣で用に立たぬ、況して成佛の要めが締めてないから一層役に立たぬ、華嚴經にも十界は明せども十界の中の二乘界を如聾如啞と嫌ふて永不成佛のものと定め、女人は外面如菩薩、內心如夜叉と嫌ふて成佛を許さず地獄、餓鬼、畜生、修羅の成佛は想も寄らず、男の中でも善人ばかり成佛が出來て惡人の成佛を許さぬから、扇の骨が唯菩薩界の一本と、男の中の善人の半分と、僅か一本半の骨だが一本半の骨に紙が張れようか、況して成佛の要めが締められようか、然れば地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛陀の十通りの境界が依報正報とて有情の動物は勿論、非情の山川草木

迄も擧つて成佛が出來ざる時は所謂要めの外づれた扇なると、同時に佛の慈悲に缺目が出來て出世の目的も失せるのである、然るに自我偈に來りて十界の依正諸共に成佛が出來たので、自我偈が尊いのである、然したゞ尊いの、難有いのと云ても、藥の能書き位では當にならぬ、隣りの寶では何にもならぬ、ケレども自我偈は果上所見の事實で以て十界吾等の成佛が證明されてある、こゝを以て多寶如來も『善哉善哉、釋迦牟尼世尊、能ク平等大慧、敎菩薩法、佛所護念ノ妙法華經ヲ以テ、大衆ノ爲ニ說キタマフ、是ノ如シ、是ノ如シ、釋迦牟尼世尊ノ所說ノ如キハ皆是レ眞實ナリ』と證明し給ふた、則ち法華經以前では四十餘年、終不得成とて成佛の出來ざりし二乘も、闡提も、提婆も、龍女も、自我偈に到て眞の成佛が出來た、出來たも、出來たも、十界擧つて皆出來たので、歡喜踊躍として喜んでコロこんで寢轉んだ、之が喜ばずには居れない、と云ものは自我偈は他人の事を說明したものでなく、其が全く果上の所見で以て吾等の身上を說明したものである、それ故ゑ經文には『願ハ佛未來ノ爲ニ演說シテ、開解セシメタマヒ』とて、後世吾等の爲に自我偈を說明なされよと、彌勒等の請求である、大上人も本尊鈔に『佛ノ出世ハ靈山八年ノ諸人ノ爲ニ非ズ、正像末ノ人ノ爲ナリ、又正像二千年ノ人ノ爲ニ非ズ、末法ノ始メ、予ガ如キ者ノ爲ナリ』

とて、佛の出世は靈山當所の人や、正像年間の人の爲でなく、其實は末法當今吾等が爲めとも仰有つてある、佛の出世といひ、自我偈の法筵といふ、皆これ吾等の爲めである、吾等豈に喜ばざるを得んやであらう、シテ見ると自我得佛來とは吾等元來尊い本佛であるといふ、吾等の眞價値を本佛果上から說明したもの故ゑ、大上人は御義口傳に『自トハ九界也、我トハ佛界也、此ノ十界本有無作ノ三身ニシテ來ル佛也、此三身ハ無始無終ノ古佛ニシテ、自得也』と仰有つた、其意味は吾等の眞價値をサラケ出して吾等は尊い本佛だとの斷案、自とは九界迷中の吾等にして、我とは佛界悟上の聖者なれども、此十界は迷悟諸共に本有無作の三身如來、無始無終の古佛であるといふ、だが其古佛といふは取も直さず五百塵點以前に現はれし本佛のことである、然し五百塵點以前の佛を古佛と云ひ本佛と云つたのは、暫く五百塵點を以て古いことを表したまでなれば大上人は且立塵點とも、五百塵點、乃至所顯之三身とも仰有つた、其古佛を無始無終の本佛と云へば、佛に成レルとか、成ッタとか、成ルダラウとか、成レタとか云べきものでなく、本來尊重根本尊崇として本來根本的に吾等十界の當體が尊い佛である、然しながら之は事具三千の上からいふべきものでで、決して理具三千の上からいふべきものではない、若し理具の上からいふなら勿論、

性質としては本來尊重根本尊崇の尊い佛である、尊い佛だと聞て佛の仕事をするならば誠に結構至極である、けれど吾等の常として却て横着をするばかりでなく、動もすると煩惱卽菩提生死卽涅槃なりと聞くと果報は寢て待て牡丹餅は棚だと出かけ、起きて働かないで寢入つて仕舞ふ、大なる誤解である、果報は練つてこそ得られ、牡丹餅は小豆や餅米を造つて初て出來るもの故ゑ、自然と棚にあらう筈はない、縱し棚に在つたにしても起て手を延して取らねば自分の口へは這入らぬ、としたならば尊い佛だからとて修行も信仰も廢して寢入つたでは佛道即ち結文にある『無上道ニ入リ、速ニ佛身ヲ成就スルコトガ得』られようか、世の中に遠大の志望も懷かず、幾多の辛苦も嘗めずに立身出世が出來得るならば、其は何所かに詐欺か懲着かゞ潜んで居る、況して凡夫が佛に成るのには詐欺や懲着ではなれぬ、勿論横着搆へて寢入つたでは尙しも成れない、則ち所謂いづれの所にか天然の彌勒、自然の釋迦あらんであるから、質直意柔輭、一心欲見佛でなくば佛には成れない、然らば何故吾等凡夫の迷妄其儘が本佛だかと云ふに、开は本佛果上の所見にして吾等妄想分別の能く推度すべきところではないが本佛の智眼や慈眼から御覽になると『大火ニ燒ル、時モ此土ハ安穩ト』見ゆる故ゑ煩惱卽菩提生死卽涅槃にして

凡夫の當體直ちに本佛なのである、だから大火と安穩とは何所迄も懸隔して居るのではない、奮發努力さへすれば直ちに本佛である、元來本佛と同等の價値ある吾等なるが故に固有の價値を磨きさへすれば本佛の御光が發するのである、要するに玉を磨くと磨かざるとの差である、磨かない玉でも光る價値があるから尊い、此場合を名けて理性本具とも、理性卽の凡夫とも云ふ、サラバ玉は玉でも光らない玉を指して光り居る玉とは云へない、本佛は即ち光り居る玉の如く、功を積み德を累ねて磨き得られた、所謂提婆品に『即チ仙人ニ隨ツテ所須ヲ供給シ、果ヲ採リ、水ヲ汲ミ、薪ヲ拾ヒ、食ヲ設ケ、乃至身ヲ以テ牀座ト作シテ』本有の價値を發露したる佛なれば修得顯現とも、究竟卽の佛とも云ふ、例へば天然の美人なればとて、三百六十五日の間、只の一度も入浴しない時は、垢や脂に埋れて美人が見えぬではないか、之を理性の佛と云ふ、理性上の佛では美人の美貌を發揮したものではない、紅白粉をつけてこそ美人の美貌を現出するが如く、修養して其理性を事實上に顯したものこそ究竟の佛と云ふ、故に此佛の眼から見らるゝ吾等は尊い佛だと同時に吾等も之を『我レ佛ヲ得テ自リ來カタ、經タル所ノ、諸ノ劫數ハ、無量百千萬億載阿僧祇』を經て居る、然しそれは本佛果上の所見にして吾等の所見ではない、譬へば吾等は飢ゑた

ものである、凍えたものである、飢たものが滿腹の人を見たとて腹が膨れない、凍たものが暖さうな人を見たとて暖くはならない、妙法蓮華經は最上の御飯にして佛は此御飯をあがつて滿腹されたと同時に妙法蓮華經は最上の着物にして佛は此着物を召して立派な御姿になれた、ダから佛樣も最初からあのやうな瑞相の御方ではない、矢張り吾等と同じやうな御方、其が信仰に依て本佛と成られた、所謂提婆品の『法ノ爲ノ故ニ精勤シ、給侍セリ、情ロニ妙法ヲ存ゼルガ故ニ、身心ニ懈倦無リキ』のお陰であつた、シテ見れば吾等も自ら進で御飯をたべねばならぬ、自ら進で着物をきねばならぬ、則ち信仰に依て固有の價値を發揮せねばならぬ、サレバ吾等は元來價値ある尊い佛である、尊い佛ではあれど其尊い價値があることを吾等は知らぬのである、然るに本門の自我偈が開かれると吾等の價値が顯はれて吾等は直ちに本佛の御子であることが知れる、たゞ之を知ると知らざるとで迷悟を分つなれども、迷悟本來不二にして同一體のものである、大論に『阿鼻ノ依正ハ全ク極聖ノ自心ニ處シ、毘盧ノ身土ハ凡下ノ一念ヲ踰ヘズ』で、十界の當體は元來互具互融したるものなれば迷悟不二、邪正一如、煩惱卽菩提、生死卽涅槃とも云ふ、若も迷の煩惱を斷つて別に悟の菩提を得ようと云なら、呼吸を離れて壽命を望むやうなもので、九界の迷を滅して佛界の悟を欲せば、佛界其者も滅して了ふ、生死を離れて他に涅槃を求めようと云なら、猿を離れて肝を求むるやうなもので、生死の迷を滅して涅槃の悟を求めば、涅槃其者も滅して了ふ、之を角を矯めんとして牛を殺したともいふ、今や本門自我偈の上に顯れたる無作三身の實體を云はゞ、本佛の外に迷もなく、本佛の外に悟もなし、煩惱の外に本佛もなく、菩提の外に本佛もなし、生死も涅槃も皆共に本佛の實體であると、知るを悟と云ひ、知らぬを迷と云ふ、ダから知ると知らぬに拘らず、其實體を論せば本有無作三身卽一の本佛である、シテ見れば吾等は既に、無始無終の本佛とは親子である、故に譬喩品に『今此三界皆是我有、其中衆生、悉是吾子』とある親子も親子同じ血の通ふた眞の親子だ、ケレどもそれと氣附かぬのは眞に情けない、譬へば西國の浪人の子が、他人に誘拐されて幼少の時、關東の或大名の家に奉公した、ところが殊の外大名の御意に叶ふたので、知行も貰へば、屋敷も貰ふほど立身出世した、デ久敷振りに故郷へ行き、父の顏をも見ばやと思ふて西國へ下る、親の方でも悴の立身出世を風の便りに聞くからは一度會ふて見ようと、浪人なれども悴の面目と思ふて駕に乘り、鎗を立てさせ、伴の四五人も召連れて、東海道を互ひに行き違ふた、此時、先きに立たる鎗持共が、双方より突中つて、無禮

を謝せよと互ひに喧嘩する、やがて後ろの駕の内から主人同士の口論になつて、果ては双方刀を抜き放つて切合ふ程に、互ひに數個所の手傷を負ふて引別れた、此時、老人の武士、心私かに思ふやう、吾れ遙々と我子に會はんと、是迄來て無益の口論に打死するも前世の惡緣、ダが相手の武士を見れば、丁度我子のやうな年配、彼とても定めて親があるだらう、子を想ふ親の心は皆一つ、吾は老の身なれば縱し打勝つたとて手柄にもならじ、と相手の武士に對ひ、吾は關東に一人の悴を持つ關西の者なるが、戀しさの餘り老の身を遙々對面せんと、上る途中このありさま、定めて御身にも親達があらう、サラバ御身に打勝つたとて手柄にもならず、快よく吾を打殺して亡き後を吊ひ給へよと、頸を差出して居た、スルと件の武士も不審に想ひ、デは御老人の御名は何んとシテ御國元は何方、と問へば答ふる山びこの、在りし昔の物語りに、拔味も綏び、刀を捨てゝ、抱合ひ、私は折角訪はるゝ子の何某、貴殿は尋ぬる父上なりしか、知らぬことゝは云ながら、不孝の罪は淺からず、許してたべと手に手を執て、互ひに見交はす顏と顏、降るは涙の雨霰、親子と知れた嬉しさよ、然るに法華經の自我偈以前の法門では無始より以來吾等が直ちに本佛の親子だとは知る筈もなく、徒らに瞋恚慳貪に出會ふては、六道の長の旅路に迷込み、妄想邪見の劒を振廻はさぬ日とてはなく、勿論四十餘年の諸經には十界本佛の親子の緣を名乘らねば、經文に『而モ我等ハ眞ニ是レ佛子ナリト知ラズ』とも『長者子ノ愚痴狹劣ニシテ我言ヲ信ゼズ、是レ父ナリト信ゼザルヲ知テ』とも、又は『我等ヲ敎化シテ、一切智ノ心ヲ發サシム、而モ尋イデ廢忘シテ、知ラズ覺ラズ』とも說れてある、サラバ自我偈以外の諸經にては、轉迷開悟とか、斷迷得悟とか、又は轉凡成聖とか申して、煩惱の外に菩提を求め、凡夫の外に佛陀を尋ぬるは、澁を棄てゝ甘味を望む愚鈍の策『澁柿の、澁其儘の甘味かな』、『田の艸を、拔いて押込むこやし哉』でなくば眞の成佛も得られない、ところが四十餘年の諸經にては、田の艸を拔捨てゝ別に稻を求るからには米も獲られぬ、籔醫が子宮病を療治するのに、子宮を全部摘み出したので婦人は死んだ、子宮其物が惡いのではない、病氣が惡いのだから、子宮を其儘にして置て病だけを療治せば宜い、眼病を療治するとて眼球を抉り出した爲に男子が死んだ、眼球其物が惡いのではない、病氣が惡いのだから、眼球を其儘にして置て病だけを療治せば宜い、それのに子宮や眼球を取除けた爲に、婦人や男子が死んだ儚なさは、親子と知らず切合ふ迷ひ、斷迷とか轉迷とか、轉凡とかと煩惱を攻めて打んとすれば、却て煩惱に打れ、打つ打れつの差はあれど、共に合戰絕えざるが故る、三惡道の打死

は、とても免れぬ憐さよ。然るに本門自我偈に到ては、初て十界本佛の親子の名乘ができたので、經文に『衆聖中尊、世間之父、一切衆生、皆是吾子』とか『是諸衆生、皆是我子』とか『其中衆生悉是吾子』、『此是我子、我之所生』、『此實我子、我實其父、今吾所有、一切財物、皆是子有』等と說れて、親子の緣が深ければ、打つ刀も打たるゝ身も、共に本佛ならざるはない、既に本佛と親子であるからには、戰ふことも爭ふことも、共に必要がない、元來無始無終の本佛である、之を自我得佛來所經諸劫數、億載阿僧祇といふ、であるから、若も本佛と親子の關係あることを知らぬ時は、不忠不孝なるのみでなく更に親の系統を知らざる不知恩の畜生であらう、こゝを以て荆溪大師は『一代教ノ中未ダ曾テ遠ヲ顯サズ、父母ノ壽知ズンバアルベカラズ、若シ父壽ノ遠ヲ知ザレバ、復タ父統ノ邦ニ迷フ徒ニ才能ト謂フ、全ク人子ニ非ズ』と云て、壽量品の本佛を知らざるものは父統の國に迷ふた才能ある畜生と云はれてある。

ケルン譯、『われ初めて成佛して以來、不可思議、百千無量劫にして能く量るべからず』

常說法教化　無數億衆生　令入於佛道　爾來無量劫

『常ニ法ヲ說テ、無數億ノ衆生ヲ教化シテ、佛道ニ入ラシム、爾シヨリ來カタ無量劫ナリ』、之は益物を頌すといふ、新註には此句に附文と元意の兩點ありとて、附文の方で云へば一切衆生の機緣さへ成熟すれば此土彼土の別なく常に說法しつゝありと云ひ、元意の方で云へば風聲濤響も如來の說法なりと云ふ、大體、自我偈に顯はれし本佛とは諸法實相を當體としたる十界皆成の大佛であるから地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩佛陀の十通りの所作が皆本佛の說法である、啻に十界の正報として感覺力のある有情物が說法するばかりでなく、依報として感覺力のなき非情物までが說法をする、則ち禽獸虫魚の生物は勿論、天地山川草木瓦石迄が說法をする、そして此說法は時間的には無量劫の久しきに亙り、空間的には無邊際に到て爾來無量劫として常恆不斷に說法しつゝある之を本佛の說法の有樣と云ふ、蘇東坡の所謂、溪聲廣長舌も此邊を形容したやうに見ゆれども、壽量の本旨とは大に違ふて居る、そして、此說法は何の爲めにするかと云に無數億の衆生を教化して佛道に入らしむる爲めである、則ち衆生成佛の爲めと云ふは取も直さず、十界の正報の成佛の爲である、而も仔細に檢せば正報ばかりでなく、更に十界の依報の成佛の爲である、要するに無數億衆生、令入於佛道の句は有情非情の兩方を教導して一佛乘の果報を得せしめようといふ本佛の慈悲である、成程、生物ならば如何程微細の物

と雖も多少の感覺力があるから成佛も出來ようが、草木瓦石の如き無感覺の植物鑛物がどうして成佛をするか、草木は切ても苦痛を感せぬ人間は少し切ても苦痛を感ずる、石瓦は惡口しても立腹せぬ、人間は陰で惡口してさへ立腹する、非情には心がない、有情には心がある、心のあると、心のないとは天地の差である、サラバ如何に狂ふても非情が有情の如くに成佛が出來よう筈はない、ケレども哲學の類推法から論じても、宇宙間に存在する萬物には一切心ありて活動すと說く、則ち吾等に心あれば吾等と同じく彼等にも心ありと類推して、一切の人類に及ぼして人皆心ありといひ、更に擴張して、一切の動物に及ぼして、空飛ぶ鳥や野を驅ける獸にも心ありと斷定する、そして植物鑛物に及ばざるものは吾等と趣きを異にする點が多いからだと雖も、若も植物には神經系統なきが故に心なしと云はゞ、下等動物にも心なきものが居ではないか、成程植物には自發的の運動なきが故に心なきやうに見ゆれども、日光に對して花瓣を開き枝葉を延すが如きは心ある證據ではないか、斯くも仔細に動植二物を檢する時は此二物全く異なるものではない、二物殆ど同じものとせば一方に心ありと類推し得たのに他方に心なしと斷定すべき理由はない、既に動植二物の如き有機體に悉く心ありと類推し得べしとせば之を金石の如き無機體に應用し得られざる理由はないのみでなく、是等有機物は常に無機物を吸收して自分の生命を支へて居れば、此に心ありて彼に心なしと云ふことは出來ない、試みに一粒の糀を田に蒔かば、やがて數斗の米となる、更に之を雌雄一對の鼠に與へなば、終に心ある無數の生物に化するではないか、と哲理で論じて居るを見ても非情とて必ず心がないとは云れぬ、苟も心があれば有情の如くに成佛が出來る筈である、こゝを以て大上人は本尊鈔に『不審シテ曰ク、非情ニ十如是ヲ具スレバ草木ニ心有テ有情ノ如ニ成佛ヲ爲スベシ如何、答テ曰ク一念三千ハ非情ノ上ノ色心ノ二法十如是是レナリ、然ト雖モ木畫ノ二像ニ於テハ外典內典共ニ之ヲ許シテ本尊ト爲ス、其義ニ於テハ天台一家ヨリ出タリ草木ノ上ニ色心ノ因果ヲ置カズンバ木畫ノ二像ヲ本尊ニ恃ミ奉ルコト無益ナリ、疑テ曰ク、草木國土之上ノ十如是ノ因果ノ二法ハ何レノ文ニ出ルヤ、答テ曰ク止觀第五ニ云ク國土世間亦十種ノ法ヲ具ス、所以ニ惡國土、相、性、體、力、等ト』とて、非情の草木瓦石にも有情の如くに心ありて成佛をすべしと仰有つた、金剛論にも『一草、一木、一礫、一塵、各ノ一佛性アリ各ノ一因果アリテ緣了ヲ具足ス』、と云れて一微塵の中にも佛性がありて成佛をすべしと云ひ、大師は一色一香無非中道と云れて一色一香等の非情も同じく中道

實相の佛性を具へて居ればこそ成佛をするゲレども涅槃經の闡提有佛性とか、又は一切衆生悉有佛性とかの文の如きは、衆生に皆三因五佛性を具すと云ふと雖も單に理窟上の道理を說たまでゞ所謂、未顯本覺の理體を指しての理佛であつて唯是れ理法上の談である、故に本門顯はれ了つた曉の本佛果上の所見なる事實上の實際を明したものではない、縱ひ華嚴經の如く心佛及衆生、是三無差別と云ふとも法華經以外の諸經にては眞の十界互具、百界千如、一念三千の法門を談せざれば眞の成佛は出來ない、で大上人も開目鈔に『然りと雖も、未だ發迹顯本せざれば實の一念三千も顯はれず、二乘作佛も定らず、水中の月を觀が如く、根無し草の波上に浮るに似たり、本門に到て始成正覺を破れば四敎の果を破る、四敎の果を破れば四敎の因破れぬ、爾前迹門の十界の因果を打破つて本門の十界の因果を說顯はす、此卽ち本因本果の法門なり九界も無始の佛界に具し佛界も無始の九界に備つて眞の十界互具、百界千如、一念三千なるべし』とて法華經の自我偈に到て眞の十界互具、一念三千が顯はれた故ゑ實の成佛が出來たと仰有つた、シテ見れば爾前四十餘年間では未だ眞の一念三千の法門が顯れて居ないから實の成佛は出來ない、出來ない理由は眞の一念三千が顯れぬからだ、然らば一念三千とは如何なる法門なのか、

乞ふ少しく說明をしよう、开は大師の止觀第五に『夫レ一心ニ十法界ヲ具シ、一法界ニ又タ十法界ヲ具スレバ百法界ナリ、一界ニ三十種ノ世間ヲ具スレバ百法界ニ卽チ三千種ノ世間ヲ具ス、此三千一念ノ心ニ在リ、若シ心無ンバ而已、介爾ニモ心有レバ卽チ三千ヲ具セリ』等と云れてあるが、一念三千の組織を云はゞ、吾等の一番最初に起る心を無沒無記とて、善とも惡とも定らぬもので之を第八識と云ふ、此八識の中に萬物が潛在しても居れば亦此八識が萬法の總體にも成て居るので總在一念とも云はるゝが、之が動搖して一切の境界に向ふと雖、尙未だ境界の善惡を分別せざる時の心を第七識と云ふ、此七識が更に動搖して境界に善惡をつけ喜ぶべきに喜び怒るべきに怒り泣くべきに泣て、善惡の業を結ぶ、時の心を第六識と云ふ、此六識が善か惡かの働に依て來世に於ける善惡の果報を招くので、例へば最初の一念は湛々たる水の如く、次に其が動搖して一切の境界に向ふのは猶ほ水の風に吹れて動けども未だ波とも泡とも見分けざるが如く、其が又動搖して善惡と別るるのは猶ほ波と成て岸へ推寄せ泡と成て立上るが如くである、然し波でも泡でも一の水の所作なるばかりでなく、波も泡も一の水の性質を失せないが如く、心の全體が善の極樂とも惡の地獄ともなる『極樂も地獄もおのが身にありて鬼も佛も

心から來る』曾て尾州の藩士、織田信茂、參勤の途次に白隱禪師を訪うて、地獄極樂の有無を尋ねた、スルと白隱は聽き終て、大喝一聲、汝は何者ぞといふ、信茂、聲に應じて武士でござると云ふ、白隱亦問ふ、ナニ武士とな、武士も色々ある、山伏ならば法螺を吹く筈、野伏士ならば野や原に生ゆる筈、それとも饌節ならば豪所向きに宜い、察するところ御身は君の大祿を居食ひする、所謂食ひ潰しか、又は穀潰しだらう、といへば信茂大に怒り、己れッ、と云ひざま鞘を拂ひし三尺の秋水、眞向に切り下げんとするに白隱驚いて逃げ廻り、ヤレ畏ろしやな、コ、コ、これがヂ、地獄それ見えたかな地獄がと、此一言に活ける敎訓を受けた信茂、冷汗背に流れ刀を收めて低頭其罪を謝せば、白隱は平然としてそこが極樂だ、と云つたとか、地獄とて地下にあらじ極樂とても、天上にあらず、唯一心の働きに依て六道の惡とも四聖の善とも乃至十界の正報とも依報とも禽獸蟲魚、天地山川とも、春花秋月、風雲雷雨ともなるのである、故に總在一念の此心に十界を具備して居ることになる、サラバ十界の內にて吾等人間ならば人間の一界に他の十界を具有して居れば、十界で百界を具有する計算である、そして其一界ごとに相、性、體、力、作、因、緣、果、報、本末究竟等の十如なるものを兼具して居れば十界に百如を兼具し、百界に千如を兼具する計算である、此百界千如を更に衆生世間、五陰世間、國土世間といふ三つの世界に配當せば三千といふ數量が得られる、然らば此三千の由つて起る根源は唯吾等の一念である、之を『一念三千』の法門といふ、シテ見ると末廣がつた三千の諸法は固と僅かの一心が動搖して諸法と成たものだから、有情非情の差別なく苟も宇宙間の萬物は皆吾等最初の一心にして、一心は三千諸法の總體である、則ち吾等の身體も地球も皆最初一念の變動なれば、荆溪も『當ニ知ルベシ身土ハ一念ノ三千ナリ、故ニ成道ノ時、此本理ニ稱フテ、一身一念法界ニ遍シ』と云れてある、それ斯の如くなれば有情は勿論非情とても佛性を有して成佛の出來ぬ理由はない、今や此理由が事實の上に表明されし法門が、卽ち自我偈なれば本門の自我偈に到て眞の十界互具、一念三千が顯はれ、之が顯はれたで實の成佛が出來たのである、卽ち合入於佛道が出來たと同時に本佛たる吾等の眞價値が顯はれて日夜の行動が『常ニ法ヲ說テ、無數億ノ衆生ヲ敎化シテ』居るのである、否、吾等有情ばかりでなく非情の草木瓦石迄が爾來無量劫の永の間常に說法しつゝあるのである、然らば町村自治の實行、社會の改良、國家の發展、國力の充實、國威の宣揚、國權の擴張、公共の精神、慈善の行爲等、皆是れ本佛の活說法にしてやがて寂光淨土を築く所以であらう。

爲度衆生故　方便現涅槃　而實不滅度　常住此說法

『衆生ヲ度センガ爲ノ故ニ方便シテ涅槃ヲ現ズ而モ實ニハ滅度セズ常ニ此ニ住シテ法ヲ說ク』、常住を頌するといふ、涅槃は梵語で、滅度は漢語で、兩方を擧げたのだが、大經では不生不滅を大涅槃と云とあるが、之は生れぬ死なぬと云ことではなく生死の二法に於て迷妄を離れたとの意味なので、此意味から云へば佛の上では滅も生も皆涅槃である、ケレども涅槃を滅度と飜譯するゆゑ入滅に用ふる方が便宜だから、此句でも臨終の事に用ひられてある、新註には、常住とは前の長行にては『我レ常ニ此娑婆世界ニ在テ、說法敎化ス』との文に當れりといふ、此意味からいふと壽量の本佛は常に娑婆に在て說法敎導するので、決して方便土とか實報土とかに居る譯ではない、御義口傳にも『常住トハ法華經ノ行者ノ住處也、此トハ娑婆世界也、山谷曠野ヲ指テ此ト說キ給フ、說法トハ一切衆生ノ語言ノ音聲、本有ノ自受用智ノ說法也』と仰有つた、サラバ吾等の住居する場所は本佛所在の座席にして、吾等の言語は勿論、禽獸蟲魚の音聲は本佛說法の御聲である、然るに吾等の多くは此世界を厭世視し悲觀視して『遁るとも身に添ふ憂さは免れ得じ縱しや芳野も世の中の山』デ、世の中は苦痛である、如何に奮鬪しても慾望のある間は苦痛である、如何に努力したところが人生の苦痛を全廢することは出來ない、と愚痴を滾すけれども實は此世界は勿體ないほど常在靈鷲山、我此土安穩、衆生所遊樂たる聖園のガーデンである、一大樂都のパラダイスである、本佛は常に此寂光土にましまして日夜吾等を哀愍し救護し給ふと雖も、雖近而不見の吾等は信仰的盲目の故に其御委を見奉ることを得しない、卽ち憶想妄見に囚れて居る、吾等は放逸にして五欲に貪着しては將に狂ひ死に死せんとして居るのである、本佛の慈悲としては到底是等の大苦を見逸す譯にゆかぬ、そこで『衆生ヲ度センガ爲ノ故ニ方便シテ涅槃ヲ現ズ』デ、態々方便して涅槃を示すのである、ガ然し吾等は本佛の滅度を衆生敎化の爲の方便だとは氣附かぬ、方便を方便と知つたなら聽て本佛の御心に如同するのであらう、ケレども方便を方便としないで矢張り方便を眞實とするから本佛の滅度を眞に滅度する者と見る、大誤解である、昔し親の言に逆ふ不孝の子が居た、親が臨終の際に、子に遺言するには、私が死んだら水葬にして呉れよ、と云ふ者は土葬とか火葬とかを望むなら却て水に流すだらう、と思て斯く遺言をした、スルと子が思ふのに、生前には萬事親の意に逆うて不孝をしたがせめて死後なりとも親の言を守るべし、とて親の死骸を菰に包んで水葬に附したとか、之は親の言を用ひた樣なれど、

親の方便の意味を悟らぬから矢張り親不孝の子であらう、方便を方便と悟たならば親の意に如同する親孝行の子であらう（方便の事に付て次下に三段なかゝぐ）吾等は本佛が衆生教化の爲に方便して涅槃を示し給ふを眞の滅度と心得るから矢張り親不孝の子である、そして其方便現涅槃は勿論、爲度衆生故は本佛慈悲の大なる發露である、デあるから方便して涅槃を現ずるのも常に茲に住して法を說くのも、靜動諸共に大慈悲の所作と心得ねばならぬ、然らば常住此說法とは如何なる狀態をいふのか、开は天地自然の有樣を道破したので、春花の開落も秋月の虧盈も、蚊虻の飛も禽獸の駈も、其他風雲雷雨の變動も、皆共に本佛常住の說法である、水田の蛙も幽谷の鶯も、共に本佛常住の說法と聞く時は些の苦痛も煩悶も消え失せて、此世からなる寂光の都である、吾等は此都に遊樂しながら何故苦むだらうか、悶へるだらうか、而も本佛常住にして說法し給ふの一語は特に嬉き感が起るのであらう、則ち此身體、此家庭、此國家、此社會、此人類に對して何とも云へない溫味を覺ゆるのは『常住此說法』の一句である、何故に本佛は此不淨なる身體、此不潔なる家庭、此不堅固なる國家、此不健全なる社會、此不善なる人類をも見捨給はずに晝夜間斷なく慈愍敎化の大法を說き下さるだらうか、想ふて茲に到れば、感激涙を呑で泣ざるを得ないのである、

然しながら當今の人は佛と申せば法を師として學んだ人位に考へ、又は今から約三千年前に印度に生れ八十歳にして死せる一聖人と思ふて、單に基督と肩を竝べる位の人としか考へて居らぬ、從つて堂塔だの、佛壇だのに安置して、最も狹き意味極て小き範圍に限りて崇むるに過ぎぬ、ガ之は甚だ淺薄なる觀察であつて、雖近而不見の妄見である、今こゝにいふところの本佛と申すは本來唯一不生不滅永遠常住にして身體と、壽命と、慈悲と、活動とが廣大無邊全く測り極むる事の出來得ざる大功德聚の本體である、而も久遠元初の昔から生きて此所に現れ死して彼所に隱れて、常に天地法界を救護して止ざる大實在者の尊號である、之を久遠實成の本師釋迦牟尼佛とも稱するが、此佛は妙法蓮華經を服用なされた本佛である、サラバ吾等も妙法蓮華經といふ最上の御飯、竝に最上の着物を信仰の力でたべもし着もしたならば、腹が太くも軀が暖くも成て直に久遠實成の釋尊たる本佛となれるだらう、本佛となれば壽命は無始無終にして活動は無量無邊なのである、無始無終なるが故に常恆不斷に存在して非生非滅である、無量無邊なるが故に現生現滅である、實體が非生非滅ならば作用は現生現滅だ、現生現滅が動作ならば非生非滅は本體だ、身體があれば運動が伴ふ、運動の起るのは身體があるからだ、掬ひあげた一杓の

水でさへ、何時始つて何時終るだらうか、此所に一杓の水と成ては居るが、咲く花には露と宿り、散る花には涙と濡れ、出る月には霜と冴え、入る月には雫と落ち、翻ては六花の雪、飛では彈丸の霰、凍ては鏡の氷、動ては玉の波、熱湯と沸き、蒸汽と昇り、電氣と通じ、震力と搖ぐも實は無始無終である、無始無終にして常に有始有終の如く、有始有終の如くにして實は無始無終である、本佛は無始無終にして非生非滅である、非生非滅にして働きは有始有終の如く現生現滅して常に法を說き給ふ、吾等も丁度此水の如くに無始無終の實體から常に有始有終の動作を起すが、有始有終の其儘に壽命は無始無終にして、活動は無量無邊である、無量無邊なのは取も直さず有始有終の働を示すからであらう、これ之を『而モ實ニハ滅度セズ方便シテ涅槃ヲ現ズ』といふ、何故に然るか『衆生ヲ度センガ爲ノ故ニ』方便現涅槃するのである。

花と散り紅葉流るゝ山川も人を渡さん爲めとこそ聞け、

暫しこそ影をも隱せ鷲の山高根の月は今もすむなり、

我常住於此　以諸神通力　令顚倒衆生　雖近而不見

『我レ常ニ此ニ住スレドモ、諸ノ神通力ヲ以テ、顚倒ノ衆生ヲシテ、近ト雖モ而モ見エザラシム』、新註には、我常住於此の句に附文と元意とあり、附文の方で云へば此は靈山を指し、元意の方で云へば此は自心を指すといふ、靈鷲山を指して此と云ふは解し易きも、自心を指して此と云ふに到ては、少しく說明を要する、大體に於て自分の心程不思議のものはない、迷悟も邪正も天地法界も皆心の現象である、ケレども心の實體なるものは迷悟不二、邪正一如であるから生死も無く起滅も無き不生不滅の大涅槃である、此大涅槃が心の實體であるから本佛は常に此實體の上に住して居る、然らば我常住於此とは則ち此心の實體に住する本佛の居場所を示した妙句である、本佛が己心に住するといふ證文は、大上人の所謂本尊鈔に『我等ガ己心ノ釋尊、五百塵點、乃至所顯ノ三身ニシテ無始ノ古佛ナリ』と仰有つてある、そして此心の實體は心其物の實體なるが故に、迷の心にも悟の心にも必ず其心の實體なるものが喰附て居る、サラバ怒つた時も泣いた時も笑つた時も、其心の奥底には必ず本佛が常に控へて居給ふのである、其故に生死するも起滅するも、苦むも樂むも皆是れ法性湛然たる本佛常住の懷より、無明の緣に誘はれて迷の九界に流れでた所作なるが故、氣がついて元に還れば煩惱卽菩提、生死卽涅槃の本佛と云はるゝのである、昔し莊周といふ翁が、夏の日に風透きの好い所で晝寢した、スルと一羽の蝶と成て春の花に戯れて狂ひ遊ぶは面白けれど、小鳥に追はれ、冬の寒さに閉ぢら

れて、來る年も行く年も苦むと百年の永の間、餘り喉が渇くので澤邊の水を飲んとする機會に、不圖、目が醒めた、目が醒めて見ると蝶に成つたでもなく、矢張り元の莊周であつて、百年の永きを經たでもなく、僅半日の間の夢であつた、吾等も全く其如く煩惱生死の根源を尋ぬれば本佛常住の懷より隨緣々起の眠氣が差して、無明の夢を見る内に胡蝶と成て、三界六道の巷を飛廻り、三途八難の苦を受けて居のである、故に大上人も十如是鈔に『一生の内に限たる事なれば臨終の時に到て、諸のみへつる夢もさめて、うつゝになりぬるが如く、只今迄みつる所の生死妄想の邪思ひがめの理はあとかたもなくなりて、本覺のうつゝの覺にかへりて法界をみれば、皆寂光の極樂にて日來賤しとおもひし我此身が三身即一の本覺の如來にてあるべきなり』と仰有つた、が苟も其根源に立還つて見れば本佛は遠きに居る譯でなく、最も近き吾等が心の實體上に居る、ケレども吾等は雖近而不見とて近きに居ると雖も其本體を見屆け得ないのである、丁度或所に眞宗の信者が居つた、彌陀如來は西方十萬億土に居らるゝなら行つて會ふと思て、一葉の小舟に乘つて西方指して漕ぎ出した、一萬里程も行きたと思ふ頃、不圖、顧みたら自分の背中に彌陀如來が笑つて居たといふ位で、十萬億土の遠きに居る譯でなく、最も近き自分の背中に喰ひ

附いて居ることを知らぬは、無明の迷雲に法性の光明が蔽はれた結果である、サラバ無明の迷雲を拂へば法性の光明が見屆けられる譯で、修行も亦必要を感ずる次第である、何故修行が必要かと云へば、元來吾等は顚倒の衆生である、顚倒とは常、樂、我、淨でないものに於て常、樂、我、淨の四の間違つた見解を起して、深く之に染着し又、苦、空、無常、無我の小乘の見解を起して果上の常、樂、我、淨の四の德を信せないもの之を稱して四顚八倒の迷といふ、其所謂四顚倒といふのは、一には淨顚倒とて、身體を綺麗な物と思ふて好男子だの美人だのと愛着の心を起すのは身の顚倒である、二には樂顚倒とて、領納することを結構なことゝ思ふて有が上にも尙ほ欲くて蓄へ又は盜む等は受の顚倒である、三には常顚倒とて、諸法は始終推移つて變化するものなのに毫も變化しないものと思ふは心の顚倒である、四には我顚倒とて、萬物には何にか主宰するものがあるやうに思ふは法の顚倒である、以上の四顚倒を破するに、身は不淨の器にして製糞器だと思ふて愛着心を斷たしめ、受は仕返しをせねばならぬから畢竟苦の種だと思ふて欲求心を斷たしめ、心は念々生滅すれば無常だと思ふて常住心を斷たしめ、法は主宰のなきものと思ふて自我心を斷たしむ、之は小乘の四顚倒を破する四念處觀なれど、吾等はすべて是等の顚倒の心を起して

日々夜々に顛倒をこと〻するので、學校の先生が生徒から窘められては叩き出され、一家の亭主が女房の臀に敷れるはまだしも、家來と成て虚榮心を迎へ贅澤費用を負擔せざれば追出され、下女さへも主人から小言いふ權利なく倒まに機嫌を取ねば手荷物を掻漚つて出てゆかるゝ世の中、石が流れて木の葉が沈む今の有樣、七十の禿頭が孫のやうな女を携へて浮れ歩き、白髪染の婆さんが手當り次第に男を摘み喰ひするは冠履顛倒の骨頂、態々金を使ふて藝妓の肱鐵砲を喰ふが如き馬鹿者は魂の顛倒した揚句、眼が見えないのである、其故に近きに居給ふ本佛を見出すことの出來ないのは無理からぬ、ケレども信仰の力でなら其顛倒を破して本佛を見出すことが出來得る、其信仰が取も直さず修行である、信仰の修行に依て忽ち無明の夢を醒まして本覺の佛陀に還ることが出來得るのである、以上は此といふ字を自心と說く上からの說明だが若も此といふ字を世界に約して娑婆とするならば、長行の我常在此娑婆世界の文と同樣の意味にて、壽量の本佛は常に娑婆に在つて衆生を敎化し給ふ、ケレどもそれと氣附かぬは氣附かぬ方の罪で、本佛の關する處ではない、と云いたい、なれど氣附かぬも矢張り本佛慈悲の然らしむるところである、義決に『若シ盲者ノ喩ニ依ラバ、但シ衆生ノ自業ニ任ジテ佛ノ神力ニ預ラズ、

然ニ佛、衆生ニ應同シテ色身世ニ住ス、若シ神力ニ非ンバ顛倒ノ衆生、豈ニ之ヲ見ザラン、彼ノ過ヲ生ズルヲ護テ通ヲ以テ見ザラシム』といふ、此說に依れば顛倒の吾等をして本佛を見ざらしむるのも矢張り本佛の慈悲力である、想ふて茲に到れば、意見に順ふ子も逆ふ子も、親の目からは等しく慈悲の涙の濺がるゝ故、神力を以て見えざらしむるのは可愛さ餘て鞭打つ親の慈悲にも過ぎた『憎いとて叩きはせぬぞ雪の竹』、本佛の大慈悲である、此慈悲の行動よりして常に娑婆にましますも態と神力を以て見ざらしむべく、生死の巷に徘徊し給のである、なんと難有い譯ではないか、雖近とは新註に『若シ元意ニ約セバ則チ一心ノ本佛ト雖モ見ズ知ラズ』といふ、前述の如く一心上の本佛とは卽、心の上の實體を指して云たものであらう。

ケルン譯、『心亂れたる人は幻想の爲にそこに住せる我を見ず』、

衆見我滅度　廣供養舍利　咸皆懷戀慕　而生渴仰心

『衆我ガ滅度ヲ見テ廣ク舍利ヲ供養シ、咸ク皆戀慕ヲ懷イテ而モ渴仰ノ心ヲ生ズ』、

吾等凡夫は佛の滅度せりと聞て漸く佛を戀慕するの心を起し佛を渴仰する量見になり得るのである、若も佛が永く世の中に存在せば凡夫の慣ひとして戀慕渴仰の心が生じない、のみでなく却て氣儘放埒に流れて親の難有味を知らぬやうに、狎

れては物を粗末にするのが吾等の恒である、故に長行の文に『若シ佛久ク世ニ住セバ、薄德ノ人ハ善根ヲ種エズ、貧窮下賤ニシテ、五欲ニ貪着シ、憶想妄見ノ網ノ中ニ入リヌ』と云ひ、又は『若シ如來常ニ在テ滅セズト見バ、便チ憍恣ヲ起シテ厭怠ヲ懷キ、難遭ノ想ヒ、恭敬ノ心ヲ生ズルコト能ハズ』とも云れてあるが、則ち佛が滅度せざれば狎れ馴れしく成て佛を崇むることを得しない、却て佛を馬鹿にするやうに成る、所謂『佛の顏も三度とやら』故、非滅現滅とて實は滅度するに非ざれども假りに滅度を示すので、初めて佛の尊重なることに氣附くとすれば佛の滅度は形益とて形を以て衆生を教化し給ふ活ける說法である、文中の『廣供養舍利』の舍利に就ては種々の意義がある、一には色身全碎の舍利とて、佛の肉體を指して云ひ、二には佛像經卷法身の舍利とて、佛の說法を指して云ひ、三には衆生身具の舍利とて、凡夫所有の佛性を指して云ふ、是等の意味からいへば堂塔を立て佛像を築きて信仰を捧ぐるが如きは舍利を供養する儀になれば、廣く佛敎を弘通して日夜傳道に從事し、又は之を援助するが如きは取も直さず廣供養舍利の儀である、斯の如くに舍利を供養する樣に成れるのは、則ち佛が滅度を示されたる形益の功德である、例せば親の死んだに依て戀慕の心を生じて、石塔や塔婆を立つるが如くに佛の滅度を見て戀慕渴仰の餘り、佛像堂塔を建てゝ舍利を供養恭敬するのである、故に若も佛が永く世の中に存在せば、吾等は佛を厭怠するやうに成ると同時に憍恣放逸に流れて我儘氣儘憶想妄見を增して、安穩遊樂の世の中を却て破壞するやうに成る、デ新註に『滅ヲ唱ヘザレバ、則チ二惡生ジテ滅セズ、二善損ジテ生ゼズ』と云て、佛の滅度すること無んば則ち未生已生の二惡は永く斷絕せざると共に未生已生の二善も損失すると云ふ、サラバ佛の滅度ハ衆生をして菩提心を發さしむる形益である、昔し叡山十五代の座主、延昌大僧正が、亡き母の墓に參じて『草葉の陰なる母上樣、魂ひ尙ほお座すなら、何卒此所に來臨し、不孝の兒なる千代鶴が、心籠めての回向の功德を、御受納賜はれや、想ひ起せば二十年の其昔し、吾身の落度に依り、父上から勘當を受け、お別れ申した其時が、今生の別れとは存ぜず、故郷を後に兒共の旅、衣手寒くいで行きしに、幸ひ佛緣深くてや、叡山に登りて歲月永き其間、父母戀しの心を抑へ、千辛萬苦の學問修業、志願成就の曉きは、一時も早く立還り、お詫申して對面せんと、急ぎ故郷に來て見れば、棲にし家さへ蹟止めず、漸く里の噂に聞けば、母上には此兒を心に案じ、それが病の元と成り、儚なく最後を遂げられて、此山里に艸茫々と、香花手向くる人も無き、苔蒸す石に隱れ給ひ、見るも哀れな御有樣、ヲ―千代鶴

かと、只の一言聞くならば、吾身に取ては寶より、嬉敷ものゝ叶はぬのみか、父上には老先き近き身を以て、吾兒を尋ねて日本廻國、嘸や衣食にこと缺で、云に云はれぬ艱難辛苦、飢と寒さは身に逼り、廻り會はざる其内に、冥途の客と成り給ひしか、生死の程も旅の空、風の便りも無き世の中に、吾程親に仇なす者も候ふまじく、許させ給へ。と、今は一山の座主とまで立身出世の大僧正も、母の墓に詣でゝ泣きしとか、在りし昔は左程まで、親を想はぬ身なりとも、亡くての後は一すらに、親の慕はるゝ世の中に、チ、と啼く音の蕓の蟲も、母その森の古事も、想ひ合はして御佛の、滅度を慕ふ心こそ、やがて菩提に入相の鐘。

春の野にあさる雉子の聲聞けば我父ぞかし我母ぞかし、

風騒ぎ村雲迷ふ夕邊にも忘るゝ間なく忘すられぬ母、

衆生既信伏　質直意柔輭　一心欲見佛　不自惜身命

『衆生既ニ信伏シ、質直ニシテ意ロ柔輭ニ、一心ニ佛ヲ見奉ント欲シテ自ラ身命ヲ惜マズ』、吾等衆生が佛を戀慕渴仰する心が發つて、既に佛に信仰を捧げ佛に歸伏する量見に成たならば、心得も行動も、共に質直にして柔輭でなければならぬ、勿論信伏とて、信仰歸伏するの量見は吾等衆生が此身此儘の成佛を遂げんが爲である、一心欲見佛とは卽ち卽身成佛を期待する言葉にして、吾等の迷妄を離れすに佛果を發見するの云である、サヲバ苟も一心に佛果を發見せんとならば、誰にても發見し得らるゝのが卽身成佛の價値あるところ『植ゑて見よ花の育たぬ里は無し』花の育たぬのは、花の罪でなく、花を植ゑない罪なので『心からこそ身は卑しけれ』、デあるから憶想妄見に囚はるゝのも、放逸にして五欲に貪着するのも、吾等の働きなれば我此土安穩の境界に入るのも、速成就佛身の域に遠するのも、吾等の働きである、前述の如く、凡夫の恆として手寄る親が在れば、その愛心に甘えて不孝の限りを盡すが、親が亡くなると日頃の恩が身に泌みて、來る其時は、早や冷たい石塔となつて徒らに悔悟の涙を濺ぐばかりで所謂『樹靜カナラント欲テ風止マズ、子孝セント欲シテ親待タズ』なれば、佛が世の中に存在する間は衆生は如何に五欲を恣にするとも、本佛の慈悲の御手が蒐るとして本佛の廣大なる慈悲に狎れて、其尊き教法を或は疑ひ或は嘲り、其深き訓戒も或は守らず或は怠りて一生空しく過すのである、ケレども佛が入滅されて見ると、其微妙の姿が急に懐かしく、今更のやうに戀しくなつて、強情我慢の鉾尖も鈍ぶく、憶想妄見の勝氣も寛んで、自然と信伏の態を盡し、柔輭の意を籠めて、渴する者の水を望むが如く、飢たる者の食を欲するが如く、

何うかしてなりとも佛を見奉りたいと、身命を賭して戀慕の情を寄せ奉るやうになる、之を一心欲見佛不自惜身命と云はれた、が何うかして佛を見奉りたいといふ考の起つた時が、則ち吾等が心から自覺した時なので、長行に心遂醒悟と說れて、毒氣に中つた發狂ひの子が、信仰の動機に觸れて忽ち本心に立還つた時である、何うか本心に早く立還りたいものである、今の世の多くの人は悉く名聞利慾、而も貪々邪々惡覺の妄想に驅られ、世の一切の事柄を自己中心主義に訴へて、苟も利益と見れば少々の病氣を押しても交際場裡へ推參し、若し損がゆくと見れば親戚朋友でも遠慮なく玄關拂ひを喰はし、其の他、人事の總てを悉く得手勝手の個人主義から割出すゆゑ、今の世に眞面目の人間を强ふるのは、恰も木に緣て魚を求むる樣で、出來ない相談である、デ世の中は丁度、鷄肉を切賣する俎の下に、やがて自分の身を割るゝとも知らで、互ひに餌を爭うて居る鷄のやうなもので、イヤ生存競爭とか、何とか、云つて騷ぎ廻て生活上の勝負を爭うて居が、其實は活地獄の推合であつて、所謂かの成金にしたところが、今日の成金は明日の成金でなく、只自分が上手に他人を仆して惡運强くも一攫千金の夢を見たゞけのことで、決して永く當になるものでない、何時また他人から仆されて、家を破り身を亡ぼし、妻子離散の悲境に陷いるやも知れない、トしたなら成金とても、肱を枕に鼻唄を歌ふが如き安樂にあらで、明ても暮ても、生命を縮める程の苦心慘澹に息づいて居るまでゞ、差引すれば素寒貧の予よりも苦が多いだらう、また、かの所謂投機なぞに手を出すものを見るに、矢張り御同樣で、一度之に手を出せば勝つて愈々止められず、負けて尙更ら止められず、淫婦の墮落と一般で、額に穴があいて、鼻でも墮なければ生涯止められぬとは、發狂ひでなくば出來ない藝當、仲には蚤や蚊のやうに穢らはしい人間の生血を吸うて『成功』だなんて、威張て居るのは、雪隱蟲が高上りしたも同樣、鼻持もならぬ發狂ひの沙汰である、と斯う考へて見ると、今の世の多の人は、狂氣して居るものばかりで、何時こそ本心に立還つて眞面目になれるものやら、想うて玆に到れば、天地暗憺として人道亡びたり矣であらう、相願くば本門壽量の本佛を信仰して、早く本心に立還らしたいといふのが、大上人の主義である、宗義鈔に『宗祖ニ約セバ一閻浮提ニ妙經ノ題目ヲ弘宣スルヲ廣供養舍利ト名ク、折伏ヲ以テ衆生ノ信心ヲ擊發シ降伏セシムルヲ信伏ト名ク、權ヲ捨テヽ實ニ歸スルヲ質直トス、下機ニ隨順スルヲ柔輭トス、但信口唱ヲ一心欲見佛トス、大難ヲ忍ビ三類ヲ怖レザルヲ不自惜身命トス』と、サラバ妙法弘通の化導式は、一心欲見佛の所作にして此の所作を果さんには勿論

懸命である故に献身的に佛を見奉るものを眞の信仰者と云ふべきである、身を終るまで身命を本佛に捧げて本佛を慕ひ奉らねば本佛を見出すことは出來ない、石と金とを力一杯に打合すので火が出る、我が身命を本佛に捧げたる刹那、我が身命は直ちに本佛の身命と轉じて一擧一動が悉く本佛の淨用となるのである、大體、吾等の身命は色と金とに糞詰つた揚句、生甲斐もなく一身の置所にさへ差閊へ、ヂリとて死神にまで見放されて死ぬにも死ねぬといふ、死損ひの五體揃うた亡者的やくざ身命である、斯んなやくざ身命でも本佛の御役に立つて價値ある身命に靈化する、ならば、無上の面目光榮と思ねばならぬ、ダから此身命を本佛に捧げ終れば卽ち不自惜身命の第一歩を踏出すと同時に、また迷妄の吾等が直ちに自覺して本佛の本心に立還たのである、文中の一心とは、眞心とも淨心とも云て、腹一杯の力を注いで更に一分の間隙もなく心の誠が行渡て歪も撓もせぬ精神、火が燒うが水が漂さうが、斯くせねばならぬと決定した以上は、毫も動かない確乎不拔の信念をいふので、此場合二心あることを許さぬ、人と人との間に於ける尋常の場合ですら二心があつては何事も成就しない、況して人が佛に成らうといふ大切の場合、何うして曖昧の二心を許されようぞ、大上人も『心に二つましまして信心だも弱く候はゞ

峰の石の谷へ轉び空の雨の大地に落ると思召せ、大阿鼻地獄疑ひあるべからず』と仰有つた、文中の見佛とは、觀念智慧の勝れたものは隨時隨處に本佛の妙相を見奉るとも云はれ、或は信念修養の勝れたものは臨終の時に本佛の妙相を見奉るとも云はれど、今は一段進んで信仰の當座直ちに本佛を自覺するの云であらう、大上人は一心欲見佛の句を釋して、一心を見れば佛なり、無作の三身の佛果を成就せむことは恐くは天台傳敎にも越え、龍樹迦葉にも勝れたり、と仰有つた、則ち見佛とは我身の外に本佛を手本として我身の上に本佛を見出すことである、斯く我身の上に本佛を見出して我身の上に無作三身の佛果を成就するのは、本化の一重立超えたる見佛の解釋である、昔し鏡を知らない者が、不圖鏡屋の店先に立つた、スルと折角探して居る父が居るので、オヤ父上が、ヤレ懷かしや、と悅んで鏡を持還つたといふことである、鏡に映つた姿は全く我姿であるけれども父の姿だと思ふ、サラバ我身の外に本佛を手本にして我身の上に本佛を見出すことが肝要である、といふものは吾等は本佛の血肉を別けたる家督相續者なるが故に、やがて本佛と成り得らるゝのである、成り得らるゝのは信仰が必ず基礎となるからである。

入る月を慕ふ心の誠あらば再び照す影はみてまし、

時我及衆僧　俱出靈鷲山

『時ニ我レ及ビ衆僧、俱ニ靈鷲山ニ出ヅ』、新註ニ、靈鷲山とは耆闍崛山のことで、耆闍崛山をこゝに靈鷲山と云ひ、又鷲頭とも狠跡とも云ふと、山の峰が鷲に似て居るとか、又は山の南に尸陀といふ林があつて鷲が屍を喰つて其山に棲む故ゑ鷲山と名くとか、或は前佛今佛が皆此山に居るが、佛の滅後には羅漢が住む、法滅すれば支佛が住む支佛か無くなれば鬼神が住む、故に呼んで靈鷲山と名くとも云れてある、が兎に角、佛所在の靈蹟を靈鷲山と云つた者である、苟も本佛を我身の上に見出さんと欲して献身的に無二の信仰を捧るならば、我れ及び衆僧と共に本佛所在の靈場に現るゝといふ、大師は、此文を指して、靈山一會儼然未散の文なりとて釋尊靈山に在て法華開講の當時一會の大衆が星の如くに儼然と列坐したる有様を書た者と云はれた、更に大上人は、御義口傳に『時トハ感應末法ノ時ナリ我トハ釋尊、及トハ菩薩、聖衆ヲ衆僧ト說レタリ、俱トハ十界也、靈鷲山トハ寂光土也、時ニ我モ及モ衆僧モ俱ニ靈鷲山ニ出ルナリ、祕スベシ祕スベシ、本門事ノ一念三千ノ明文也、御本尊ハ此文ヲ顯シ出シタマフ也』と、サレバ十界本尊の出所は全く此文に依憑し給ふか、又曰く『時トハ本時娑婆世界ノ時ナリ、下ハ十界宛然ノ曼陀羅ヲ顯ハス文ナリ、

其故ハ時トハ末法第五時ノ時也、我トハ釋尊、及トハ菩薩、衆僧トハ二乘、俱トハ六道也、出トハ靈山淨土ニ利出スル也、靈山トハ御本尊ナリ、今日蓮等ノ類ヒ南無妙法蓮華經ト唱ヒ奉ル者ノ住所ヲ說ク也』と仰有つた、此活釋に依れば、我といふ佛も及といふ菩薩も衆僧といふ二乘も俱といふ六道も迷悟の差別なく生佛の異目なく、打て混じて輪圓具足の大曼陀羅の中に現れたる微妙の御姿を時我及衆僧、俱出靈鷲山といふ、則ち十界の大本尊は此文に依憑して描寫されしものゆゑ、本尊は直に靈山であつて、吾等は十界具足の此靈山に住在して居る、住在して居ると氣附くのは全く信仰の賜ものである、サレバ信仰の力なくんば如何に靈山に住在するとも、靈山を靈山と氣附かぬのであらう、難有い哉、吾等も信仰の犧牲と成て一心に本佛を見奉らんと欲せば、忽ち靈山に住在して本尊と崇めらるゝのである、嗚呼貴ぶべきかな、本尊開示の俱出靈鷲山の明文、看む人よ、願くは、一心に合掌して此文を信讀せよや、凡そ佛敎の目的が眞の成佛を遂ぐるにありとすれば、眞の成佛とは卽ち所謂俱出靈山の外はないのである、信仰の力に依て自ら卽身成佛を得るの外はないのである、新註には『我ハ佛、及ハ法、衆僧ハ文ノ如シ、此レ乃チ三寶常住ノ義、亦是レ自心ノ一體三寶ニシテ、已身ノ靈鷲山ニ住スル也』といふ、此說に依れば我とは佛

寶にして、及とは所説の法寶をいふ、衆僧は文の如く和合僧なれば、此句は佛、法、僧の三寶を説示したる明文であつて、而も此三寶は常住一體の三寶、即ち同體の三寶なるが故に皆吾等凡夫の一身に潜在するものである（三寶ニ付テハ次下ニ委説ス）三寶とは文の如くに三個の珍寶とすべきもの故る、矢張り尊崇する本尊のことにして、内容は即ち本佛と、本法と、和合僧とである、試みに大上人の主義より別して一體三寶の旨を明さば、久成無作の本佛と、因果具足の妙法と、一念三千の菩薩とが、而も一體不二にして毫も差異なきを一體三寶と云のである、故に佛を擧れば三千世間の總體悉く本佛の色心ならざるはなく、法を擧れば十界の諸法皆妙法ならざるはなく、僧を擧れば身土色心唯一和合の僧海ならざるはなし、而も此三つが互ひに相離れず、相隔てずして吾等迷情の一念に潜在して居る、そして、此三寶が本門壽量の所詮であつても、それが單に机上の空論ならば何の利益もないけれど、實は之が成佛得道の要旨でもあり、觀心證道の實義でもあるから尊いのである、其故に大上人は、此一體三寶の妙旨を述られて、或は法華經の悟といひ、或は壽量の觀心といひ、或は生死一大事の血脈といひ、或は日蓮が弟子且那の肝要とも仰有つた、則ち久成の釋尊と、法華經と、吾等との三は全體不思議の一法にして本來無差別の妙敎だといふのが、本門肝心の大本尊である、依て此形相や儀式を説示して時我及衆僧、倶出靈鷲山と宣し給うたといふ、そして此本尊は何所に於て建設さるゝかと云へば、大上人は日向記に『本有ノ靈山トハ此娑婆世界也、中ニモ日本國也、法華經ノ本國土妙ハ娑婆世界也、本門壽量品ノ未曾有ノ大曼陀羅建立ノ在所也』とも、又本尊鈔にも『一閻浮提第一ノ本尊ヲ此國ニ立ツベシ』とも仰有つた、此等の文に依ると、末法に於ける靈山淨土は此娑婆世界であつて、就中山水秀靈の日本國である、本門の大本尊は獨り此日本國に於て先づ建立せらるゝといふのである、ガ如何にも慶賀すべきことではあるまいか、本多師は『衆見我滅度より倶出靈鷲山まで此等の文に兩意あり、在世の出現を感じたるに約して釋するのと、滅後の行人が佛陀を見奉るを取るのと二意あるが、更に滅後の中にも觀智を以て證見するものは現に儼然未散の尊容を拜すといふ、經に深心信解、則爲見佛、常在耆闍崛山、共大菩薩、諸聲聞衆、圍繞説法と説き、又天台智者の定中に見奉れりと稱するものゝ如き是なり、又若し信念の機即ち本化の示敎に在りては信成就の行人は臨終を期して同居の淨土に入りて面奉し得るを取る、即ち聖判に唱へて唱へ死なばといふもの是也』と云はるれど、予は滅後に於ける不自惜身命的信仰上の所見を取りたいと思ふのである。

我時語衆生　常在此不滅　以方便力故　現有滅不滅

『我レ時ニ衆生ニ語ル、常ニ此ニ在テ滅セズ、方便力ヲ以テノ故ニ、滅不滅有リト現ズ』、在此とは、娑婆靈山を指し、又は已心を指していふ、而も之は本佛の非滅現滅を頌したる文にして、本佛は常に滅度せざれども隨緣應機の上からは、本心を失つたる者の爲めに態と滅度を示して本佛を戀慕渴仰するの心を發さしめ給ふ、而も本心を失はざる者の爲には何時も靈山に在りと說ひて、倍々信仰の念を深からしめ給ふ、サラバ其滅度を示すのも其常在を說くのも共に衆生敎化の爲めである、大上人は御義口傳に『常住トハ法華經ノ行者ノ住處也、此トハ娑婆世界也、山谷曠野ヲ指テ此ト說キタマフ』と云て、前文の常住此說法の句を釋し給うたが、今の常在此不滅の句も之と同意義に見て宜しからう、果して同意義とすれば常在此不滅とは、久成の本佛は常に吾等の娑婆世界に存在して毫も滅度せざる義なるべし、之れ非生現生の形益にして假ひ五欲に貪着すと雖も未だ三乘の善根を失はずして大小の機感ある不失心者の爲めに垂るゝ本佛の慈悲である、ケレども五欲に貪着して過去に種たる三乘の善根を失うて全く大小の機感なき失心者の爲めには非滅現滅の形益を示して、佛を戀慕渴仰せしむるのである、こゝを以て其滅度を現ずるのも、其常在を示すのも共に本佛の大慈悲力である、これを以方便力故といふ、然らば何故滅度を示せば失心者が戀慕の心を發すかといふに、之を長行に說いて『父ノ背喪セリト聞テ心大ニ憂惱シテ是ノ念ヲ作サク若シ父在サバ我等ヲ慈愍シテ能ク救護セラレン今ハ我ヲ捨テヽ遠ク他國ニ喪シヌ自ラ惟ミレバ孤露ニシテ復恃怙ナシ常ニ悲感ヲ懷テ心遂ニ醒悟セリ』といふ、之れは本心を失つた兒が父の死んだと聞て驚きの結果、漸く吾に還つて想ふのに、父が世に生きて御座る時には始終私共を可愛がつて呉れたが今は哀しや旅の空で亡くなられた、アヽこれからは、誰を手寄りに暮さうか、想へばあはれ父無し兒、親無き不便の者である、何故父は死んだらうか、急病頓死が知れ居るなら、何とか仕樣もありつらむ、アヽ父戀し、父懷しや、魂ひ返へす返魂香、名香の効めがあるならば、煙になりと御姿を靡かしてたべよ、今一度、生ける御姿拜ましてたべと、父に會ひたき一念、胸に逼つては御飯もむかず、明ても暮ても父戀し、父懷しの一念で、不圖、元の本心に立還つたといふ、これが則ち佛の方便を以て滅度を示されたる非滅現滅の功德である、本多師は『本師釋尊の本體、其眞實を語れば無始實在にして常住不滅也、但化導の方便に就て應身の滅を現じ法身の不滅を現ずるのみ』と云はるれど、予は單に三身の中にて區分する

のは當を得ないと思ふ、如何となれば若し單に法身不滅應身現滅を以て本門の釋尊を語るならば、餘經と比較して何等の差別があらう、法身常住應身無常は諸經の常談、何ぞ取立てゝ誇るに足らんやである、故に予は三身共に非生現生非滅現滅を論じたいものと思ふのである。

鷲の山常にすむてふ峰の月假りに顯はれ假りに隱れて、
鷲の山月は入ぬと見る人は暗きに迷ふ心なりけり、
鷲の山隔つる雲や深からん常にすむなる月を見ぬかな、
鷲の山如何に澄ける月なれば入ての後も世を照すらん、
闇の夜も晝をも別かず鷲の山何時も長閑に有明の月、
此世にて入ぬと見えし月なれど鷲の山には澄とこそ聞、
鷲の山曇る心の無りせば誰も見るべき有明のつき、
浮世には憂ひの雲の繁ければ人の心に月ぞ隱くるゝ、
末の世は雲の遙に隔つとも照さゞらめや山の端の月、

餘國有衆生　恭敬信樂者　我復於彼中　爲說無上法
汝等不聞此　但謂我滅度

『餘國ニ、衆生ノ恭敬シ、信樂スル者有レバ、我レ復タ彼ノ中ニ於テ、爲ニ無上ノ法ヲ說ク汝等此ヲ聞カズシテ、但ダ我レ滅度スト謂モヘリ』、新註に、餘國を方便有餘土なりといふ、サレバ次上の在此の字は實報土を指すに對してこれは界外の方便土を指して餘國といふ、若も大上人の釋に依れは餘國とは彌陀藥師等の所在の場所を指したものである、とにかく娑婆以外の餘國靈山以外の餘所に於ても本佛を恭敬し信樂して戀慕渴仰を極むるものさへ居れば、其要求に應じて彌陀とも藥師とも分身散體して妙法を說給ふといふ、丁度磁石の鐵を吸ふがやうに、苟も妙法を聞くべき機緣さへあれば本佛は之に應同して妙法を說給ふのである、それが爲には此所に御姿を沒して彼所に御姿を現はすのは猶ほ此部屋を出でゝ彼部屋に入るやうなぐあひに、本佛の御姿が衆生の機緣に應へて此所彼所に出沒往來して無窮の化導を垂れ給ふ、然るを人天凡夫の迷眼では單に滅度せりとのみ見るは、大なる誤見であらう、文中の爲說無上法とは、大上人の敎旨に依れば假ひ彌陀藥師等と成て諸經を說くとも、其が直ちに無上の妙法を說くことになるのである、其機緣に應じて二乘三乘の諸經を說くのは全く法華經に歸入せしむる前提に過ぎないから經文に『於一佛乘、分別說三』と說れたので、之を從一出多の法門といふ、而も佛出

世の本懐が成佛得脱にありて一佛乘を說くのが目的であるから經文に『但以一佛乘故、爲衆生說法、無有餘乘、若二若三』とも又は『十方佛土中、唯有一乘法』とも說れたので之を從多歸一の法門といふ、此の如くに從一出多と從多歸一との道理が判つたなら、諸經即法華と開顯の旨意が解る筈である、此意味よりすれば假ひ彼土に於て諸の權經を說くとも實は無上醍醐の法華經を說くことになる、之を爲說無上法といふ、此理由を解しないで諸經を單に諸經とのみ思ふは所謂『汝等不聞此』の輩である。

我見諸衆生　沒在於苦海　故不爲現身　令其生渴仰

『我レ諸ノ衆生ヲ見レバ、苦海ニ沒在セリ、故ニ爲ニ身ヲ現ゼズシテ、其ヲシテ渴仰ヲ生ゼシム』、之は機感を頭したる句である、吾等衆生はそれでは喰へぬとか、これでは着れぬとか、どうしたら住へるだらうとか、總て衣食住の爲めに煩悶憂惱のみして毫も佛道を修行するの念を起さぬ、眞に苦みの大海原に流れこみ、沖へ沖へと漂ひながらも、生きもせず死にもせぬ、アブアブの身の何故淺瀨に向ふ量見にならぬだらうか『我レ諸ノ衆生ヲ見レバ苦海ニ沒在』して、生死の狂瀾怒濤に渦卷れ、いくら生れかはり死にがはつても矢張り、依然として煩悶憂惱の大海中に沈沒する、吾等の恆である、然しながら其苦の底を極むれば、やがて何時かは其苦に堪へなくて、一時も早く其苦を脱れようといふ氣望が起るに違ひない、氣望が起るのは取も直さず如來の救濟を叫ぶ動機ともなるので、謂はゞ苦海に沈沒するのは却て得脱を樂ふ種である、例へば、歐洲の戰爭にても、獨逸から一番慘めな目に逢たのは白耳義である、白耳義の受たところの慘酷の程度は非常なものだ、ガ然し獨逸の考では敵國に對して慘酷を極むれば、戰爭は如何にも苦痛なものだと自覺して、捕虜になるとか、降參するとか、罰金を差出すとか、媾和を持込むとかして、案外早く戰爭の埒があくだらう、其故に敵國に對して慘酷を極むるのは味方が優勢になる一大要素である、と云ふが如く苦海に沈沒するのは、却て如來に手寄る動機を造るのである、そして今回の戰爭にて、歐洲の各方面では物質からは到底幸福は得られぬと自覺する、と同時に銃を以ても貫くことの出來ない劍を以ても刺すことの出來ない點に幸福を得ねばならぬと自覺した、即ち如何に金を持た人でも、位地の高い人でも、頭の勝れた人でも、下層の者よりかヨリ多く苦みを受て居るから、物質的方面では到底安心は得られぬと氣附く、と同時に眞の安心は精神的方面に得るより外なきことに氣附いた如く、衣食住の中では到底幸福安心は得られぬと氣附く、と同時

に眞の幸福安心は靈的本佛の救濟に待たざるを得ないと自覺した、此自覺が取も直さず機感の動いたのである、此機感が動けば本佛は直ちに之に應同して非生現生の形益を垂れ給ふが、縱んば此機感が動かないで今尙ほ衣食住の物質に耽溺して空しく生死海に沈沒するにしても、本佛の大慈悲力は止むことなく、此輩の爲にはこと更に身を隱して非滅現滅の形益を示し給ふ、之をこれ故不爲現身といふ、それ故に故不爲現身の底意には自然と令其生渴仰たらしめたいといふ本佛の大慈悲力が籠つて居る、恰も頑是なき兒共の惡戲をして屢次危險に陷いるのを母親が見かねて『お止しなさい』と熱心に云ひ聞かすも、兒共は少しも聽入れない『それでは母アちやんは知りませんよ』と云つて態と身を隱せば、やがて母親の居ないのに氣附て『母アちやん母アちやん』と、泣きつゝ母の在りかを搜すやうなもの、デ本佛は每に此母親のやうに吾等衆生を愍念救護し給ふと雖も、吾等は徒らに衣食住に戲れつゝ三惡道に陷いらんとして居る、此場合本佛は態と身を隱して姿を露はさゞれば、やがて苦難に堪へかねて救ひの御手に縋らんとする心が起る、之を機感といふ、此機感さへ起れば本佛は再び微妙の御姿を顯はして苦海の吾等を救ひ給ふ、之を爲に身を現せずして其をして渴仰を生せしむといふ、サテ、前の一心

欲見佛の見の字と、今の我見諸衆生の見の字とは、自我偈の中の殆ど白眉にして見佛の見は、吾等が本佛を戀慕する信仰の心である、我見の見は本佛が吾等を救ひ下さる慈悲の力である、この兩方の見の字――即ち慈眼で以て常恆不斷に吾等を見給ふといふ心と、吾等が本佛を見奉りたいといふ心と、心と心と意氣が投合した具合は、丁度兒は母の懷ろに抱かれようとし、母は兒を抱かうとする、其情の結合つた處之を感應道交といふ、吾等が本佛に手寄らうとする感と、本佛が吾等を救はうとする應と、此感と此應とが交叉したる感應道交は、見佛の見の字と、我見の見の字との結合である、故に兩方の見の字は信念の感と、護念の應との道交する處に即身成佛があるといふ、今此の一行の上にて云へば吾等が本佛に對して渴仰を生ずる心は機感にして、本佛が吾等を見給ふ心は應同である、衆生がアヽと感ずるから本佛もヲヽと應ずる此一刹那の間に、機感と應同とが融和して即身成佛するのである。

因其心戀慕　乃出爲說法

『其心戀慕スルニ因テ、乃チ出デヽ、爲ニ法ヲ說ク』、戀慕の二字は矢張り機感にして、說法の二字は同じく應同である、此感と此應とが融和したところに即身成佛がある、ケレども其應の起る原因は其感に依れば、感は應を招く根源である、然らば機

感は如何にして起るかといふに戀慕の心が應同を求むる基礎となる、然り、戀慕の心が信仰の母と成てやがて佛果を感得する故ゑ、大上人も『飢て食をねがひ、渇して水を慕ふが如く、戀て人を見たきが如く、法華經には信心をいたさせ給へ』とか、又は『それ信心と申すは別にはこれなく候、妻の夫を惜むが如く、夫の妻に命を捨るが如く、南無妙法蓮華經と唱へ奉るを信心とは申候也』とも仰有つた、令其生渇仰、因其心戀慕、然り渇仰戀慕と云ても普通にいふところの所謂男女相戀ふるの結果互に擁して自殺を遂げ戀塚を建つるといふが如き穢らはしき嘔吐を催すやうなでなく靈的方面に向つて清らけき心の欲求なれば最も清潔にして且つ最も神聖なる本心慾であるから、渇仰戀慕である、此渇仰此戀慕の極度に達した時は既に本佛の懐ろに抱れて安らかに眠た時である、吾等は一時も早く本佛の懐ろに安眠して生死の苦海を脱却したきは山々なれど、宿業の然しむるところか、戀慕渇仰の心が生じないで矢張ッ、九輪界に愚圖々々して居る情けないものであらう、或人が手飼の狗に向つて、汝は畜生に生れて、打れ、叩れ、縛られ、蹴られて、苦痛と想へば人間になる氣はないかと問へば、狗は答て成れるものなら、一時も早く人間に成たうございると云ふ、然らば、人の屎からでる穢らはしい糞を喰ふことを止めよ、と云へば、糞を喰ふことを止めると眼が見えなくなるゆゑこれだけは止める譯にゆかぬと云つたとか、吾等も丁度その通りで、成れるものなら一時も早く我此土安穩の境界に、入りたく、則ち足を洗うて正業に就きたい、なれどサリとて今迄の泥水稼業を全廢する氣にはなれぬ、例へばなまぬるい湯に這入てるやうなもので、早く出たくも、出ると風引くやうで、出る氣にも成れず、ジャと云て、何時迄も這入てると、溫もる筈のものが追々冷却するばかりだ、ケレども出る氣にもなれぬとは情けなき不心得ではあるまいか、苟も親子相愛し男女相思ふ切ない心を佛道に移して、本佛を戀慕するならば、ヲヽと應へて本佛はこゝに示現して救ひの御手を垂れ給ふ、何故其氣にはなれぬだらうか、何時迄も狗の境界に居て糞を喰べたいのか知らん、文中の因其心戀慕を俗解すれば東坡の句に『風雨不來曾不怨、今夜月色想如何、工夫若讓思君半、成佛可先老釋迦』といふがある、暴雨猛雨の晩ならおいでがないのは無理とは思はぬ、ケレど、今夜のやうな冴えた月夜になせおいでが無いのかしらんと、雨にも風にも將た月夜なら尚しも想出されて忘るゝ間なく、郎君を思ふ切ない心、其心の半分なりとも佛になりたいといふ方へ廻らしたなら、お釈迦様よりも眞先きに成佛がでけたらうといふ、こゝを以て妙音菩薩は法華經を戀慕して、態々淨光莊嚴國

より來れば、普賢菩薩は法華經を戀慕して、遙々寶威德上王國より來つた、皆是れ法華經を戀慕された證據である、ダから吾等も其心戀慕渴仰するならば、本佛はこゝに出でゝ爲めに法を說き給ふのである。

神通力如是　於阿僧祇劫　常在靈鷲山　及餘諸住處

『神通力ハ是ノ如シ、阿僧祇劫ニ於テ、常ニ靈鷲山及ビ餘ノ諸ノ住處ニ在リ』、之は本佛の常住不滅の邊を頌したる句である、則ち本佛は大神通力を以て阿僧祇劫の間常に娑婆靈山の寂光土、或は隨緣應機の方便土等にましまして、永劫不滅に慈悲の御手を垂れ給のである、文中の神通力とは、長行の所謂神通之力にて、大師の釋に依れば、神は天然不動の理にして法身佛のことである、通は無窒不思議の慧にして報身佛のことである、力は幹用自在にして應身佛のことである、即ち法、報、應の三身佛が無造作にして、而も無始無終靈妙不思議なるが故に神通力といふ、本佛は即ち此三身を兼具したる三身圓滿の古佛なれば、其一擧手一投足には法、報、應の三身が附廻つて居る、サレバ神通力とは、いへば三身卽一なる本佛の行動知覺と云ても宜しい、今此神通力を放ちて過去、現在、未來の三世に亙りて無窮の慈悲を垂るべく永劫不滅に存在し給ふが、常に存在するばかりでなく、日月星宿となり、風雲雷雨となり、山川草木となり、禽獸蟲魚となり、將た彌陀藥師となりて隨緣應機、分身散體して物を利益し給ふ、之を常に靈鷲山及び餘の諸の住處に在りといふ、然し前に餘國と云ひ、今亦、及餘諸住處と云ふは、本地の娑婆を中心としての餘國餘處なれば西方の安養淨土や、東方の淨琉璃世界等を指して餘國餘處といふ、此餘國餘處にても機緣さへあれば本佛は假りに彌陀と現はれ藥師と名乘り出でゝ衆生を敎化し給ふ、例へば天上一輪の月が水の緣さへあれば海水、溪水、濁水、清水、將た糞水の別もなく苟も水あれば必ずそこに影を宿すが如く、緣さへあれば本佛は分身散體して彌陀とも藥師とも成り給ふ、之を餘の諸の住處に在りとも、餘國に衆生の恭敬し信樂するもの有れば、とも說れたのである、故に若も本店の本佛を振捨てゝ出店の假り佛を信ずるものあらば、汗は大なる迷信である、水中の月影を眞の月と思ふと同時に天上の實月を假の月と思ふ愚者ではあるまいか、サラバ彌陀藥師等を救ひの主と仰ぎて本尊とするものは、正しき信仰者とは云へない、のみでなく不徹底極まる妄信である、その正信とは卽ち此土有緣深厚の敎主久遠の本佛に歸依するものゝ云である、そして此本佛は吾等を救ひ得さすべき神通力、慈悲力ましまして阿僧祇劫來、常に靈鷲山に在て無上醍醐の法華經を說き給ふ、ケレども衆生の機緣未だ整はざ

る場合には餘所の國土に現はれて、假りに彌陀とも藥師とも成り給ふ、之を『神通力如是、於阿僧祇劫、常在靈鷲山、及餘諸住處』の法門といふ。

衆生見劫盡　大火所燒時　我此土安穩　天人常充滿

『衆生ハ劫盡キテ、大火ニ燒ルヽト見ル時モ、我ガ此土ハ安穩ニシテ、天人常ニ充滿セリ』、此文は自我偈中の骨子であるから、及ばずながら充分に解釋を試みて、讀者に衷心より本佛を戀慕渴仰する信仰を求めんかな、先づ始めに我此土安穩といふ意味を解し、次に大火所燒時の意味を明さんか、大體に於て佛敎にては此世界は今は斯くあるも何時かは必ず劫火に燒盡されて無くなる時節があるといふ、横山博士の地球の過去及び未來にいふ『氣水の吸收によりて寥々たる一場の荒野と變ずるか、又は陸地の磨滅により海洋の氾濫を被るか、或は太陽の冷結により闇黑界となるか、又これに先立て太陽と衝突してその燃料に供さるゝか、此の四厄の中その一は到底免る能はざるべし』と、然るに吾等の住める此世界が安穩であると申すのである、ガ眼前に見る此世界は果して安穩であらうか、吾等には生、老、病、死、怨憎會苦、愛別離苦、求不得苦、五盛陰苦の四苦八苦が充滿して日夜吾等を煩悶憂惱して一日も安穩なることはない、然るに吾等が此土は安穩なりとは抑も如何、想ふに世の中には苦痛の伴はぬ快樂が無れば、快樂の隨はぬ苦痛も無い『苦は樂の種、樂は苦の元』といふが、之は精神を物質の上にばかり馳せて眼、耳、鼻、舌、身、意の六根の中へ色、聲、香、味、觸、法の六塵を押込めて、果ては堅く執着して放さないから何時も不足を感じて『思ふ事、一つ叶へば又二つ三つ四つ五つゝ六つかしの世や』デ、始終不滿を懷くのである、トいふのも限ある能力と生命とで以て、限りなき物質慾ばかりを追うて彼も欲し此も欲しの星だらけに望むから、何時迄經つてもモー之で宜いとの滿足は得られない、のみでなく、常に煩悶憂惱して身を終るまで煩惱道、業道、苦道の三道を脫することを得しない、ところが吾等の精神を眼前の物慾以上に置て、久遠實成の本佛に戀慕渴仰の心を捧げ献身的に歸依し奉つて、正しき信仰の中に自身を托したならば、觸向對面見るもの聞くもの悉く吾等を喜悅せしめ滿足せしむるのである、此境界に到るのを卽ち我此土安穩といふ、サラバ此安穩の驛に到る汽車は妙法蓮華經といふ列車なるが、此列車に乘るには是非とも信仰の切符が必要である、そして其切符の發賣所は卽ち自我偈なるが故に、誰れにても安穩の驛に到らんと思はゞ、先づ自我偈の發賣所にて信仰の切符を求むべし、ダが假ひ妙法五字の列車に乘るとも、途中にて信仰の切符を取落し、又は下車したなら、無効になる

ばかりでなく目的の安穩驛に達することは出來ない、然らば正しき信仰は安穩の門戸を開く唯一の鍵である、此鍵の力で以て開けたる安穩の境界を本地の娑婆とも、常寂光土とも、眞の極樂淨土ともいふ、乞ひ願くは、日一日も早く此境界に達して卽身成佛を得たいものである、ケレども信仰して然る後に漸く成佛するといふ、間隙のある譯でなく、信仰の發つた當相直ちに成佛するので、恰も無花果の花と實と同時なるが如く、藤吉郎と秀吉と一體なるが如くに信仰の當時、忽ち卽身成佛なので、燈師も『一日相續スレバ一日ノ佛、乃至千萬年相續スレバ則チ千萬年ノ佛ナリ』と云はれた、勿論信仰は其人の性質の賢愚や、年齡の長幼や、身分の貴賤や、財產の貧富に依るものでなく、いくら若くても八歳の龍女が成佛し、いくら馬鹿でも鈍物の槃特が成佛した、かの釋尊のお弟子の中で第一の智者とまで稱されし舍利弗でさへ『汝舍利弗、尙於此經、以信得入、況餘聲聞』と說れて、汝舍利弗よ、必ず量見違ひをするな、汝が成佛の出來たのは汝が知識の力ではなく、全く汝が信仰の力で出來たのぢや『信ヲ以テ入ルコトヲ得タリ、己ガ智分ニハアラズ』とて、流石の知識も成佛の段に到ては三文の價値もないぞと說れた、またかの釋尊のお弟子の中で馬鹿の大將と云はれし槃特は、我名だも忘れるので、名札を背に負うて居つた、諺にも名荷を食ふと覺えが惡くなるといふ、名を荷ふと書いてある、槃特のやうに物忘れするだらうと思つて、宿屋の亭主が金滿家のお客に名荷を澤山食はせたら、金側時計でも忘れて行くかと思たら、宿賃を忘れて行つたとか、其所謂槃特でさへ、信仰の力で普明如來となれた、シテ見れば唯正しき信仰の一念こそ大切なるが故に、我此土安穩の實義は要するに信仰の二字に依て得らるゝのである、次に大火所燒時とは、御義口傳に釋して『實義ニハ煩惱ノ大火ナリ』と仰有つた、其煩惱は卽ち吾等が日夜に製造する貪、瞋、痴の三大火である、ガ宗義鈔には『成、住、壞、空の四劫には火、水、風の三災あり生、老、病、死の四劫には貪、瞋、痴の三災あり治、亂、盛、衰の四劫には飢、疾、兵の三災あり春、夏、秋、冬の四劫には寒、熱、濕の三災あり』等と明されてある、然し之は衆生の所見なれば勿論苦痛であるに相違なきも、吾等若し正しき信仰の眼で見るならば榮、枯、盛、衰も生、老、病、死もたゞこれ法性海上の一波瀾、皆是れ靈妙鏡裡の一片影にして、之れあるが爲に、人生の意義も豐富になる、かの葉の茂り花の開くと共に葉の落ち花の散るに隨つて一年の榮枯はあれど、此榮枯の一年を十、百、千、萬と重ぬれば則ち十、百、千、萬の長年月となる、又植ゑられし樹は榮枯の一年を經る度に十、百、千、萬の丈尺に育つゆゑ榮、枯、盛、衰も全く本地果上の妙用である、若も吾等の日常に

起居動靜の働きが無つせば吾等の日常は無味乾燥、眞に荒凉たるものであらう、然らば生、老、病、死は本果佛上の動作である、之れあるが爲めに久遠の本地も彩色せられ、本佛の威德も光顯せらるゝのである。

乞ふ、進んで大火所燒時と我此土安穩との關係を更に說明せば、固より大火所燒と見るのは煩惱であつて、此土安穩と見るのは菩提である、こゝを以て法華經にも

『三界ハ安キコト無シ猶ホ火宅ノ如シ衆苦充滿シテ甚ダ怖畏スベシ常ニ生老病死ノ憂患有リ是ノ如キ等ノ火熾然トシテ息マズ』と說れてある、則ち吾等の見る眼前の世界は丁度苦の監獄であつて、生前も死後も到底苦を脫するとは出來ない、ガ仲には心得違ひして金さへあれば生前の生活にも死後の相續にも安穩だと思ふ人もあれど、サリとて巨萬の財產家が枕を高くして安眠した噂も聞かねば、富豪の子息が必ず親讓りの遺產を殖やした話も聞かぬ、成程、金があれば安穩だらう、金さへあれば義理も缺がない、金さへあれば自由も得られる、自動車にも乘れる、芝居も觀られ、大きな家にも住まれ、立派な着物も着られ、美味しい馳走も食べられる、ダから一生懸命に金を溜めるに若くはない、ガ然し金が溜れば溜まる程却て不自由ではあるまいか、不安穩ではあるまいか、銀行へ預けても危ない、人に貸しても險呑、家に置けば盜人が這入る、藏つて置けば虫が附く、持て歩けば邪魔に成る、措て行く氣にも成れぬ、と斯うなると人が皆泥棒に見え、窓打つ風にも足音にも氣を配つて心配だらけ、殊に子でもない人は行末が案じられ、病氣でもした時は一層金の始末に困る、としたならば金さへあれば安穩とは云へない、ケレども世の中には義理も人情も耻も顧みないで、無理無體に金を溜めて、而も自分は一生涯其金の御恩にも預らないで、死後空しく放蕩子息に湯水の如くに使はるゝ子孝行者も居れば、生命に代へて溜めた金を徒らに他人の持物にさるゝ慈善家も居る、ナレども御本人は爪の上で火を點すやうにして、食はず着ずに溜めた金を、罪なき獄中に投じて有財餓鬼と云はれようが、更に御頓着なく、唯金の番人たるを無上の快樂とするお心善しも居つて、色々樣々なれど、要するに唯自分の金を自分で番をしながら日夜恐怖病に襲はれ、人を見れば泥棒と思はるゝが如きは畢竟不安穩の極であらう、或所に一人の吝嗇阿爺が居た、着物も着ず、食物も食ないで、金を溜める、每晩勘定して喜んで居た、梅雨も過ぎて、土用に成たから、折角溜めた金に若し黴でも生やしては大變だと、人知れず二階へ上つて人が來ては善くないと梯子を引揚げて、戸棚から取出した行李の蓋を開けば一圓、五圓、十圓の紙幣凡そ千圓ばかし、獨りにつこと笑て、片

隅から丁寧に並べて一枚、二枚、風に吹飛されては大變と、一一重りを置て並べて來た七枚、八枚、九枚ヲヤ十圓札が九枚とは情けない、九枚で泣くのは皿屋敷のお菊だ、アヽ愉快だな、此邊へも並べませうか一枚、二枚、十九枚、二十枚と段々に後へ下つて來た、二階に居ることを忘れて了つた、笑ひながら追々後へ下つた塗端、あつといふ間もなく、下の板間へ眞つ逆樣、ウムと呻つたのが此世の名殘り、紙幣を握つて死んだといふ、シテ見ると、金を溜めるのが愉快だの、安穩だのとは、決して云へない、仲にはまた畑在ての芋種、命有ての物種で、命が一番大切だ、とにかく壽命さへあれば何よりも結構、死んだとて花も咲ねば實もならぬ、縱し死でも命のあるやうにと、守札を軀中へ貼附けたとて、起居の邪魔にこそなれ、命の延ぶる譯でもない、ケレども命を太切にせねばならぬと、門口へ七五三繩の十尋ろも張廻はして、柊の一荷も挾み、鰯の頭を一貫目も添へて、唐辛の一石も吊下げたにしても、それで息災延命する筈もなく、小人閑居して不善の結果、眞蒼白な顏して、藥罐抱いて病院通ひも餘り名譽の業でもなければ、サリとて不正な借金に糞詰つた揚句の果に、海川か瀧壺か、檐端か、木の枝か、鐵道の線路か、短銃か、劇藥か、又物かの御厄介になるのも太した面目でもない、ガ世の中の一切の事柄は皆此生命と聯絡して、初めて價値がありとて一寸

した事にでも、萬歳と叫び、何にでも壽の字を記るす、が全體壽といふ字はイノチナガシで、命の絶えない意味である、夭死することを短命とは云へど、短壽とは云はぬ、そこで命は限りあるイノチ、壽は限りなきイノチ、吾等は常に此長命を希うて百二十五歳迄も生きたく『何時もお達者で』とか『御長命で』とか、いくら長命を望んだとて、隈侯果して百二十五歳迄生存するかどうか、假りに百二十五歳は三百歳迄生きて、竹内樣から抗議申込れても、其間には必ずや病氣、怪我、災難等がある、之がないにしても初老、中老、古老の關を越えざるを得ない、眼が霞む、耳が遠く、齒が散り、肉が痩せ、骨が立つて、腰が曲るはまだしも、夜が明たか、日が暮たか、辨別つかなくなつて糞小便の中に轉ろがらねばならぬ、ト斯う考へて見ると、命があつたとて愉快でもなければ、安穩でもあるまい、之を要するに、吾等衆生が世の中に欲するものは生命と財産なりといふと雖も、其財産も、其生命も、詮じ來れば不安穩の爆彈であらう、まして吾等の境界は丁度柿の樹の枯枝の眞先に下つた熟柿のやうなもので、何時轉げ落て、何所へ這入るか判らぬ、假令財産があつても、生命があつても、何時死んで、何所へ落着くやら、死ぬ時も落着く所も解らぬとしたなら是程心細くて不安穩なことはあるまい、イヤ眞に不安穩であらう、顧みて吾等の生涯を見ると、生れた時

は夜が明けて旅立を始めるやうなもの、三十歳の中年は途中の晝飯なれば、六十歳からは日暮れのやうで、一歩一歩と日は西山に傾く、雨は降る、風は吹く、腹は減る、況して旅金は盡きて、宿るべき旅館もないとしたならば、如何にも不安穩である、然らば本佛の住し給ふ世界は如何なる所かと云へば、同じく法華經に『如來ハ已ニ三界ノ火宅ヲ離レ寂然トシテ閑居シ林野ニ安處ス』と說れて、煩悶憂惱を脫し、三災四劫を出たる、眞の靈山、事の寂光であるから、幾ら金を積まうと、溜めようと、決して不安の念に驅らるゝことなく、いくら永生きしようとも、少しも心配のかゝることもなく、平々坦々として大道を歩むやうに、氣に障ることなく、恐ろしと思ふこともなき境界にて、所謂我此土安穩である然るに火宅と見たり、閑居と見たり、又は大火所燒と見たり、此土安穩と見たりして大に異つて見るのは、それは觀者の見方なので、煩惱の眼で見れば火宅とも、大火とも見ゆる、けれど若し菩提の眼で見れば閑居とも、安穩とも見ゆるのである、一水四見といふことがあつて、同一の水でも魚は住家と見れば、天は甘露と見るが如く、一方で大火に燒かるゝと見るとも、他方では此土を安穩と見る、一方で此土安穩と見る時も、他方では大火所燒と見るだらう、之は觀者の眼鏡が違ふから隨つて品物の色合ひが異つて見ゆる、ケレども其大火的煩惱と、其安穩的菩提とは、一體不二にして全く異體同心のものである、大體凡夫には煩惱道、業道、苦道の三道なる迷あり、佛陀には法身、般若、解脫の三德なる悟あり、而も此三道と此三德とは元々眞如悔中の一物なので、眞如の理中に居る時は誠に仲を能くして、眞の兄弟なれども、一念無明の惡友に誘はれて眞如の理中を迷ひ出ると、三德が變じて三道となる、ガ一念信仰の善友に導かれて眞如の理中に悟り入れば、三道が忽ち三德となるので、三德も三道も性德の上にては善惡迷悟の別は無れども、修德の上に割據する時は煩惱菩提の差が附く、ケレども修德の上の煩惱菩提とても、性德の上の善惡迷悟なれば、實體を檢する時は矢張り同族の兄弟で、同じ血の通うた性德修德なるが故に、修德を其儘にして性德、性德を其儘にして修德、修性差なく性修別なきが法華經の利益なれば、之を煩惱卽菩提といふ、昔し支那の或國に才能秀でし武士があつた、が佞人の讒言に逢うて、地領も沒收せられて、其身は遠く島流しになつた、此時女房の何某は、恰も姙娠中であつた、ガ所を立のいて方々へ隱れ廻はり、果ては片田舍の賤ゲ伏屋に宿つて、無事に兒を產んだ、產れた兒は玉の如き男の兒なので、若し世にあるならば、一國擧つて若君の御誕生と喜ぶものを、淺間しや知る人もなき片田舍、逃げ隱れて居る獨り身に、兒が產れたとあつては、世間の

手前、捜し出されて憂目に逢も知れず、ジャと云て育つる譯にもゆかず、ハテ、何うしたものかと思案の末、闇にまぎれて路端に、捨てねばならぬ此兒の運命、天道樣も御照覽あれ、心を鬼に兒を捨つるのは、能々のこと、ト或大名のお通りを幸ひに、拾ふ神あらば、育つもしようと、物の小陰で見てあれば、お目にかゝつて拾ひ上げられ、仕合はせものよ無事なれと、合はす兩手も涙に振ふ、然るに其大名は不思議にも、かの流人を預り居る島の大名なりせば、拾ひ兒を流人に示して、何んとか此兒に名を就けよと、名附を命じければ、辭退に及ばず名を附て、且つ懷中より一卷の卷物を取出し『之は我家の寶物なれど、我身流人とて今は無用ゆゑ、名附けの印しに此兒に讓れば、成長の後此書を讀で天下の名將と成れ』と、其兒に手渡したが、其後流人の身に罪なきこと顯はれて、赦免を蒙り本國へ還り、妻に會うて產みし兒の、女子か男子か聞質だせば、卵に張鼻の男子ときゝ、サテ其成行を尋ねければ、實は斯樣斯く斯くと、聞ては早く我兒に會ひたく、折柄大名より、其兒を送り返され、能々見れば紛ふかたなき、我兒なりせば、手に手を執て嬉し涙に咽びけりとか、初め拾ひ兒と思た時も、後で產みの兒と思た時も、矢張り我兒にて、我兒に變りは無けねども、知ると知らざるは皆我心からである、斯の如くに吾等衆生は、もと眞如の都に住して、一國の武士釋尊と同じ血統のものなれど、忽然無明の佞人に妨げられて、三界六道の流人となり五陰、十二入の島々を廻れども正、了、緣の佛性といふ兒がある、兒を持つながら四苦八苦に鎖されて煩惱、業苦の三道、其儘が法身、般若、解脫の三德とは知らず、煩惱卽菩提と知つたなら、他人がましく之を讀めと、斷迷開悟、離苦得樂の卷物は讓らざりしものを、今にして想へば、大火と安穩と、大に異つてると思つた想ひは、矢張り誤解であつた、デ本佛の知見よりすれば『衆生ガ劫盡キテ大火ニ燒ルヽト見ル時モ』其見方、其儘『我ガ此土ハ安穩ニシテ天人常ニ充滿ス』と見給ふ、ゲレども吾等の妄見よりすれば假ひ我此土安穩でも、其見方を違ひて大火所燒時と見るのである、そこが大なる誤見である、其誤見を、其儘に本佛の正知見に如同するのには勿論、學問や知識や才覺や分別では出來得ない、大上人も阿佛房鈔に『此より外の才覺無益なり』と、仰有つた、唯々正しき信仰の一點にて安穩の境界に入ることを勸告されて、御義口傳にも『三世諸佛ノ智慧ヲ買ハ信ノ一字也』とも、また四信五品鈔には『信ヲ以テ慧ニ代フ信ノ一字ヲ詮トナス』とも、題目鈔にも『假ひ解なきも信心あらん者は鈍根も正見のもの也、假ひさとりあれども信心なき者は誹謗闡提のもの也、鈍根第一の須梨槃特は智慧もなく悟もなし只一念の信ありて、普明如來とな

り給ふ』とも、尙ほ波木井鈔には『返々も、各々の信心によるべし』等と仰有つた、然らば學問、道德、知識、才能も信仰の前には三文の價値もなく、唯信仰のみ能く煩惱を其儘に菩提化して、火宅を閑居に變じ、大火を直ちに安穩化せしむるのである、昔し支那に元啓と云ものが居た、其父を元吾と云ひ、其母を何某と云ふ、母は姑を憎んで父に讒言をした、父も母に引されて我親なる姑を山奥に捨ようとするから、十三歳の元啓頻りに父を諫むれども聽かず、遂に畚を造り、一方を悴に持たせ、一方は自分に擔ひで、山奥に捨てた、捨て了つて還らんとする時、父か云のには『其畚を持還つて何かせん、それをも捨つべし』と、悴の云には『イヤとよ、父上も年寄つたなら、此畚に載して、山奥へ捨ねばならぬから持還ります』と、此時、父の元吾、悴の言葉を聞て我親を捨つるは不孝なりと、初めて氣附いたとか、姑と共に畚を捨つるのは煩惱は煩惱ぎりで片附く、然し煩惱を捨てずに元啓が畚を持還つた爲に父を悔悟せしめて孝行化したのは、煩惱を以て菩提を誨へ大火を以て安穩化したのだ、ガ之も要するところ元啓誠意の發露としたなら、如何に信仰心の效力の强きかゞ判る、吾等も元啓を眞似て正しき信仰に依り、早く一日も早く三界火宅、大火所燒の煩惱を其儘に寂然閑居、此土安穩の菩提たらしめたいものである。

園林諸堂閣　種種寶莊嚴
諸天擊天鼓　常作衆伎樂
寶樹多華果　衆生所遊樂
雨曼陀羅華　散佛及大衆

『園林諸ノ堂閣ハ、種々ノ寶ヲモッテ莊嚴セリ、寶樹華果多クシテ、衆生ノ遊樂スル所諸天ハ天鼓ヲ擊テ、常ニ衆ノ伎樂ヲ作シ、曼陀羅華ヲ雨シテ、佛及ビ大衆ニ散ズ』、前述の我此土安穩や、次下の我淨土不毀等は全く住本顯本の證文にして、本佛所在の本籍地を揭げたことになる、ガ其に就て、其國土は實報土なりや、將た寂光土なりや、學問上、古來隨分議論のあるところだ、ケレども若し場所が靈山だとすれば實報土でもなく、寂光土でもなく、凡聖雜居の同居土なりといふべし、眞記は六ケ敷論じて居る『靈山は同居土であるのに何故界外の實報土と云かの問に答て、同居土ならば經文に何故常在と云のか、次に界外ならば靈山にあらずと見んかの問に答て、靈山に卽して界外の實報土を明せり』と云ひ、また私記に『豈ニ伽耶ヲ離レテ別ニ常寂ヲ求メンヤト云モ、彼ニ準ジテ知ヌベシ』とも云て居る、が更に新註にては、他受用の土は他報身所居の土なるが故に實報土と名づけ、自受用の土は自報身所居の土なるが故に寂光土と稱すべし、トいふのも他報身は勝應身にして機の感見に從ふが、自報身は理法身にして自の智慧につくと云て、仲々面倒な議論をして居

る、ガ然し、今は專門的議論をする場合でなく、但だ通俗的解釋を試みて吾が法華會員に信仰心の煥發を促せば足りるのであるから、成るべく議論は避けて平易なる事柄で以て文字上のみを解釋せんかな、抑も吾等の見る眼前の世界ですら山、林、原、野、高樓、茅屋、等は皆種々の寶で以て裝飾せられてある、若し錢を寶だといふなら世の中のあらゆる物といふ物は悉く寶であらう、鑛石の內に含まれたる金銀、銅、鐵は勿論、今まで廢てられしアエン、石粉の屑、空罐の破れ、ホヤの片破れ、古鐵の塵等、皆寶である、錢に化して價ひ高く賣買の出來得るものは之ればかりでなく塵、埃、糞、小便、桑木の皮、小麥の莖、天井の煤、座の下の砂までが悉く寶である、トシたならば園林諸の堂閣は種々の寶で以て莊嚴されて居る、のみならで路傍の草、瓦上の苔迄が花咲き實を結ぶので盆栽に仕立られて寶となれば大木、小草、梅、櫻、牡丹、芍藥、菊の花、黴に生へたる菌までも寶なりせば世の中は、寶樹花果多くして衆生の遊樂するところであつて、而も種々の寶で以て立派に裝飾せられて居る、シカのみならず松籟、竹韻、鶯歌、蟬吟、浪の音、風の聲、襖の囁き、戸の唸り迄が自然に天鼓を擊て雷鳴、雨響、常に諸の伎樂を奏して居れば、九重の雲深き御殿の御庭にも、田舍の賤ヶ伏屋の塵捨場にも、紅葉が散れば、木葉も、散る、花が飛べば、實も飛ぶ、春花の飜るところ、秋葉の落るところ、王公大臣の眼にも觸れば、匹夫乞食の身にも中る、ゲに世の中は、曼陀羅花をふらして佛及び吾等に散じて居るではないか、況して本佛の見給ふ本地寂光の世界は、七寶を以て飾立たる堂閣が巍然として五色の雲表に聳え、鳳凰の屋根には鴛鴦の瓦、黃金の柱には金剛の敷石、瑠璃の桁には瑪瑙の桷、珊瑚の棟には琥珀の梁、眞珠の檐端には金銀の彫物、玉の欄干、寶の手摺、翻々たる瑤珞、旒々たる幢幡、常樂我淨の風にそよめく、折柄、虛空より四種の花降りて、曼陀羅花、曼珠沙花は芳野の櫻か、高尾の紅葉か、嵐にパッと散る如く、赤もあれば白もあり、大あり小ありて、佛の身上は申に及ばず、一會の大衆にふり掛る、折も折とて聞ゆる音樂、ピアノもあればバイオリン、吉備の雅樂は、簫篳篥、笛に太鼓に琵琶さへも、雜る琴の音、鐘の響散ること知らぬ無憂樹の花、優曇花咲きて珍らしき、天の羽衣飜へし、外面菩薩の天人共の、歌舞や舞踏や手躍りに、娛樂遊戲し給ふ寂光淨土の境界、之を我此土安穩、天人常充滿、園林諸堂閣、種々寶莊嚴、寶樹多花果、衆生所遊樂、諸天擊天鼓、常作衆伎樂、雨曼陀羅花、散佛及大衆と說れたのである、ガ此境界に達するには信仰の二字が最も必要である、信仰は實に吾等の總ての穢物を洗ひ淸むる故ゑ、大上人も『又南無妙法蓮華經と唱へ退轉なく修行して、最後臨終の時を待て御覽せよ、妙覺の山に走り登て四方をきつ

と見るならば、あら面白や法界は寂光土にして、瑠璃を以て地とし、金の繩を以て八の道を界へ、天より四種の花ふり、虛空に音樂聞えて、諸佛菩薩は常樂我淨の風にそよめき、娛樂快樂し給ぞや、我等も其數に列りて、遊戯し樂むべき事はや近づけり、信心弱くしてはかゝる目出度所に行くべからず」と仰有つた、則ち信仰に依て初めて此境界に到る、が若し信仰が無つせば、世が矢張り火宅に見へて「それ見たか、常が大事じや大朔日」と怖れ、人を見れば泥棒に見ゆるが、苟も信仰があれば「此世をば、吾世とぞ思ふ望月」と氣樂に「元日や、神代ながらの初日影」と洒落、同時に「白露の己が姿を其儘に紅葉に置けば紅ゐの玉」で、卽身成佛が得られる、それも他動的でなくて自動的に自身の力で自身を浮べ「飛込だ、力で浮かぶ蛙哉」デ、毬を壁に向つて投げるさへ、力を籠めて投ねば此方へ跳返つては來ない、トしたならば猛列なる信仰で進まぬ限りは、何等の反應がないのみでなく、動もすると轉り易き吾心の持前、淫祠に走り邪敎に迷ふから、我不愛身命的、不自惜身命的信仰の糊で、以て吾心を正法の鐵盤に貼附けなば、動きも迷も得しない、斯うなると「やがて死ぬ、景色は見えず蟬の聲」須臾の生を樂みて、頌を炎帝に奉り、歌を松吹く風に和して奏ずる、蟬の聲さへ諸天天鼓の音に聞え「欄干に、上るや菊の影法師」別に富貴を樂はねど、晩秋淸芽を吐き、霜を冒して芳姿衰へざる、一枝の菊でさへ寶樹花果の姿に見ゆ、ア、ア此世からなる佛の境界、何故吾等は信仰の念が發らぬだらうか、因みに文中の「天人」とは天上を飛行する神女、身光り頭に花鬘を着け、羽衣をきたる天女にして「曼陀羅」とは、之に曼陀羅花、摩訶曼陀羅花、曼珠沙花、摩訶曼珠沙花の四種がある、摩訶とは大の意味であつて、曼陀羅は白花にして、曼珠沙は赤花である、赤古來本尊のことを曼陀羅と稱して、輪圓具足とも功德集とも義譯して居る、今更に我此土安穩の文より散佛及大衆の句に到る十通りの文句に就て、少しく說明せば、我此土安穩は表面は究竟の德智卽ち德識にして裏面は不安穩に對するから地獄界を表す、天人常充滿は表面は菩薩の願滿卽ち希望にして裏面は不滿に對するから餓鬼界を表す、園林諸堂閣は衆生を動作せしむ卽ち才力にして禽獸の所在地なれば畜生界を表す、種々寶莊嚴は隨宜の粧飾卽ち手段にして依報壯麗なれば修羅界を表す、寶樹多花果は花果の識別卽ち常識にして修因感果の効ある人間界を表す、衆生所遊樂は遊戯の禪樂卽快感にして快樂を事とする天上界を表す、諸天擊天鼓は怠慢を戒む卽ち精勵にして無常に對するから聲聞界を表す、常作衆伎樂は威儀を整ふ卽ち規律にして因緣を考ふるから緣覺界を表す、雨曼陀羅花は白花の故

る潔白を示すと同時に花の原因は果の結果を含む菩薩界を表す、散佛及大衆は究竟の極地卽ち慈悲の圓滿なれば佛界を表す、それ此十句を十界に配當してさへ尙ほ斯の如き意義を含む、況して專門學上の論議、本迹兩門の見解、敎相、觀心の判釋等に到ては汗牛充棟も啻ならぬ程、描かれたる十句、或は常、樂、我、淨の四德に攝し、或は十波羅密に配し、又は長行の諸文に對照するなぞ種々の解釋ありと雖、予の拙なき筆にては到底書きあらはすことが出來ない、のみならず、却て尊意を瀆冒するの虞もあり、且つ通俗を主とする場合故る、敢て之れ以上に筆を進むることが出來ない、ガ要するに時我及衆僧以下、散佛及大衆以上の文句は偈中の一大要領にして、眞言宗でさへ之を以て金剛界を說くものとして、弘法大師は宗祕論に『三災大劫ノ末ニモ靈山ニハ佛常ニ在ス天人悉ク安穩ナリ號テ金剛界ト曰フ』と云へり、また法界道場の一偈と名けて支那の道邃和尙は之を日本の傳敎大師に授たりとも云はれ、大日經疏には法華の最深祕處なりとも云はれてある、其他諸宗にても、是等の文を色々に推尊高評して居る位ゐ、イトも珍重すべき要文である、これ予の開筵ごとに會員とゝもに訓讀する所以である。ケルン譯、『無量百千億劫の間、我が決定心は是の如く、又我は靈鷲山を去て他の住所に行きし事なし、衆生此土を見て其燒けつつありと想ふ時も我が佛土は天人を以て充滿せり、彼等は多くの樂具億千の園宮殿寶華を以て裝飾し、許多の珍寶と華實充滿せる寶樹とを以て嚴飾せり、諸天は諸の伎樂を奏し曼陀羅華を雨して我及法を求むる聲聞大聖の上に散ず』

我淨土不毀　而衆見燒盡　憂怖諸苦惱　如是悉充滿

『我ガ淨土ハ毀レザルニ、而モ衆ハ燒盡キテ、憂怖諸ノ苦惱是ノ如ク悉ク充滿セリト見ル』、然り、本佛所在の寂光淨土は三災を離れ、四劫を出たる常住の極樂にして、其本佛は無始無終の故に過去にも滅せず未來にも生せざる久遠劫來の大牟尼世尊である、大上人の本尊鈔に所謂『今本時ノ娑婆世界ハ三災ヲ離レ、四劫ヲ出タル常住ノ淨土ナリ、佛既ニ過去ニモ滅セズ、未來ニモ生セズ、所化以テ同體ナリ』とあるは卽ち此意味である、啻に本佛其物のみが不生不滅でなく、其國土も亦た三災四劫を脫した淨土である、しかのみならず、本佛の寵兒たる吾等も、亦た吾等の住所も、共に不生不滅常住安穩である、故に『所化以同體、此卽已心三千具足、三種世間也』と仰有つた、然るに吾等凡夫はそれ自身を自身に詰らぬものとし、世の中を憂き痛らひ猛火に包まれて居ると見るのは、眞に可愛相ではあるまいか、何故早く盲目を決膜して、綺羅燦然たる光明界に遊飛せざるや、雪隱の蛆蟲でさへ、糞の中に育つれ

どやがて蛹にかへり蝶に化して臭い所を脱け出でゝ花に止るではないか、況して萬物の靈長ともあらうものが、何故何時迄も穢ない所に愚圖々々して居るのか、それも佛に成る種がないなら兎も角、立派な佛性を具へて所化の輩も能化の佛と同體と云れてあるのに、何時迄憂怖苦惱の夢を見て居るのだらう、大體、法華經にては法界の萬有は總て無作三身、常住不滅の功德體で、其本佛は吾等凡夫と一體であるといふ敎に依て悲觀の怖るべき生死煩惱がなくなつて、樂觀の喜ぶべき涅槃菩提が得られる、ト云つて煩惱其物が無くなるのでなく、煩惱其物に對する怖れが無く成て、安穩の境界に立到るのである、故に煩惱、業、苦の三道の盜人を放さず殺さず上手に生捕つて吟味すれば、其奥には法身、般若、解脱の三德が潛んで居る『泥棒を捉へて見れば我兒なり』だ、然るに法華以前にては三道の盜人を叩き殺して了つて、別に三德の在り家を搜さうとするから佛性の玉が遂に見附からなかつた、ガ今では見附かつた、その見附かるには信仰が最も必用である、信仰の條件には勿論厚薄の差があれど、丁度稻に早稻と中稻と遲稻との別があつても皆一年の內に收穫するが如く、信仰者に上中下の三根はあつても一生の內にて卽身成佛が出來るが、斯くするには則ち信仰の力に依て生死長夜を照す妙法の蠟燭を燃せば、無明煩惱の

常闇も何方へ行くやら痕かたもなくなつて、明るくなる、されど、一度信仰するとも退轉するやうでは、元の土器となるから、途中で信仰を休まないやうにせねばならぬ、百年の闇室に一燈を點せば闇忽ち消滅すと雖も、其燈が消えなば再び元の闇になる故ゑ、燈の消えないやうに用心せねばならぬ、ジヤと云て闇が自らお暇申すと挨拶するのではなく、闇其儘が明となるのである、故に煩惱卽菩提は本佛を戀慕渴仰する信仰の力である、かの起き上り小法師といふ人形は張子にして、腹は空虛で、顏は白く、髮は黑く、軀は赤し、此人形はどのやうに轉ばしても横には寢ないで必ず起き上る、といふのも尻に土を入れて重りが附てある故だ、信仰者も猶ほ此人形の如くに瞋恚あつて軀が赤く、貪慾あつて髮黑く、愚痴あつて顏白く、智慧なくて腹空しけれど、妄想の張子なれば轉びさうでも、轉ばぬのは信仰の重りが附て居る故だ、則ち地獄、餓鬼、畜生の三惡道へ轉ばぬのは信仰の力があるからだ、大風や地震にも滅多に倒れないのは鐘樓ばかりだといふ、トいふものは眞中に重い鐘が吊られて樓の中心と成つて居るから倒れない、ガ吾等には多く此重りが附て居ないから、經濟上で例へても、少し儲かると直ぐ飛上る程喜び、少し損すると忽ち逆上る程悲み、順境には得意がり、逆境には失意がるのは全く心の奥底にどつしりしたところの

重りが附て居ない爲めである、信仰とは卽ち心の重りである故に、提婆品にも『淨心ニ信敬シテ、疑惑ヲ生ゼザル者ハ、地獄、餓鬼、畜生ニ墮チズシテ』と示されて、信仰心の力は吾等をして三惡道に墮落せしめざるのみでなく、更に進んで『十方ノ佛前ニ生ゼシメン、所生ノ處ニハ、常ニ此經ヲ聞カン』とまで說れてある、是則ち信仰の重りは如何に三惡道の大風や地震に出會うても打倒れることも轉び落ることもなく、却て諸の憂怖苦惱を靈化せしめて我淨土不毀の安樂界に到らしむる大なる力である。

是諸罪衆生　以惡業因緣　過阿僧祇劫　不聞三寶名

『是ノ諸ノ罪ノ衆生ハ、惡業ノ因緣ヲ以テ、阿僧祇劫ヲ過レドモ、三寶ノミ名ヲ聞ズ』、聖德太子の憲法の中に『厚く三寶に歸依すべし』とあれど、眞に三寶を敬して供養する者は現代甚だ稀であらう、啻に稀であるばかりでなく、動もすると破法破佛の罪を犯して『佛敎は何んだ、厭世自殺の兇器ではないか、坊主は世の中の穀潰し、無用の長物、天下の遊民ではないか』といふ風で、仲々歸依どころか罵詈惡口して在來の堂宇でも打毀はし、借家に組立てゝ家賃を取り、取つた家賃で藝者買ひするとか、賭博の資本にするとか、サもなくば寺附きの田畑でも、勝手に誤摩化して、議員選擧の賄賂に使ひ、違犯の廉で監獄へ送られるとか、又は住職を窘めて、日備同樣に漕ぎ使つた、果ては叩き出すとか、なんとかお話にならぬ不歸依の有樣、宜なる哉、此諸の罪多き衆生は過去世の因緣甚だ惡しゝと見えて、無始已來阿僧祇劫を過れども未だ曾て三寶の御名を聞かず、縱し御名だけは聞くとも歸依して厚く之を信仰することを得しないのは抑も如何なる因緣だらうか、因緣といふものは善惡共に喰附いて廻る、昔し江戸深川八幡の大祭に、數萬の群衆が一時に永代橋を渡らうとした爲め、俄に橋が落ちて男女の死傷者が澤山に出來た、此時久留米の武士が一人、不思議にも死の運命から脫れた、といふものは、丁度四年前に、三分の金子が調はぬ爲めに兩國橋より身投げせんとする婦人の一命を助けたことがあつた、それより以來、その婦人は朝暮報恩の時機が到るのを待つて居たところ、ガ今日群衆の中で不圖、恩人に出會うたので、厚く前年の禮を述べ、且つ何は兎もあれと吾家に案內して連れ還たのが、武士一人生き殘つた不思議の因緣、陰德あれば陽報もある世の中に、三寶を恭敬信仰することの出來るのも、宿世の因緣である、化城喩品には今日佛に會うて法華經を聞くことが出來たのは三千塵點の大昔、大通如來の當時に在て、十六王子の法華復講の聽聞衆の一人であつた因緣で、今番再び佛に會うて

法華經を聞くことが出來たと說れてある、然らば三寶の御名だも聞かぬのは、罪が造つた惡業の因緣、況して之を恭敬信仰することの出來得ざるのは過去世の因緣が惡いからである、ト斯う考へて見るなら、法華會員諸君が熱心に聽講せらるゝのも、宿世の善因緣の然らしむるところで、或は大通當時の聽法者の仲間であつたかも知れない、ところでかの三寶に歸依することを『三歸依』とも『三歸戒』とも云ふ、題目鈔には『三歸ばかりを持つ人、大魚の難をまぬがる』と云れてある位、デ三寶に歸依する功德の深大なることは今更說くまでもない、ガ次手に三寶の名義、及び種類を略記せば、三寶は勿論、佛、法、僧の三つにして佛とは、智者とも覺者とも云て煩惱、業、苦、の繫縛がサラリと解けて悟り開けた大悟徹底者のことである、法とは事物の道理を修行の法則手本にすることである、僧とは和合衆とて世の榮華を捨てゝ共に佛道を修行するものである、此三寶に就て別相、住持、同體の三通りがある、卽釋迦多寶等の諸佛を佛寶とし、諸佛の所說の法門を法寶とし、文殊、普賢、觀音、舍利弗等を指して僧寶とするは別相である、次に金像、木像、鑄像、石像、繪像等の佛像を佛とし、黃卷、赤軸、紙墨、文字等の經典を法とし、剃髮、染衣の凡僧を僧とするは住持である、次に宇宙間の萬物諸法に存有する覺性を佛とし、其理體を法とし、そして覺性と理體と一致和合する氣味を僧とするは同體である、斯の如くに三寶に就て三種ありと雖も、而も此三通りが互ひに相關聯して離れない、例へば空氣に依て生活し、生活に依て運動するやうに、別相の三寶の形を世に遺したものが住持である、住持の三寶の德に依て同體の三寶の實を顯はすのであるから、運動の出來るのは生活の効である、生活の効は全く空氣の手柄なるが如く、同體の尊いのは住持の功なれど住持の功は別相の手柄である、故に三種ありと雖も而も不離一體の三寶である、とにかくも斯の如き三寶を恭敬信仰するものはやがて、其信仰者の人格を向上せしむる所以である、況して厚く此三寶に歸依して三歸戒を持つに於ては煩惱生死の大魚の難を免れ菩提涅槃の安穩樂を得らるゝをやである。

諸有修功德　柔和質直者　則皆見我身　在此而說法

『諸ノ有ユル功德ヲ修シ、柔和質直ナル者ハ、則チ皆我身此ニ在テ、法ヲ說クト見ル』、

前では不見因緣として、憂怖苦惱の罪多き衆生は假ひ本佛が吾等の眼前にましますとも、三寶の御名だも聞かず、況して微妙の御姿を見奉ることの出來得ざる因緣を示したが、こゝでは得見因緣として慈善公共の念厚く、三寶歸依の心深きものは日夜本佛の警咳に接して說法を拜聽することが出來得る因緣を明すのである、文中の

諸有修功德を新註に『卽チ緣了ノ二因具足セル者ヲ指ス』といへり、いはゆる緣因とは修行の網に縋つて菩提の目的地に到ること、了因とは智慧の光を放つて煩惱の闇室を照らすこと、則ち大師の所謂『斷、證』二道のやうなもので、緣了の二因はもと一性にして、緣因の修行の裏面に斷惑が潛み、了因の智慧の裏面に證理が含れてある、例へば縋るといへば放ないこと、照すといへば明かると云に同じく、菩提に進むのは煩惱を拂ひ、煩惱を照らすのは菩提に入るのである、ジヤと云つて餘敎のやうに斷惑と證理と別々にするのではなく、斷惑卽證理、證理卽斷惑、此道理は前で既に再參說明したから玆では略する、ガとにかくもあらゆる功德を修し、所謂功を積み德を累ぬれば、其心隨つて柔和質直になつて、卽身成佛が得られる、文中の柔和質直とは、傍註に柔和は空假のいづれにも片寄らない中道實相の大眞理を發見すること、質直も同じく二邊に片寄らざる量見をいふと記されてある、ガ何事でも然うであらう、或所に媒介人があつて、若き男女の結婚を取持つた、スルト三々九度の席上で、新婦が新郎の顏を見ると肝心の鼻がないので忽ち狂歌を一つ『世の中に名所古蹟は多けれど、ハナの無きのはつまらざりけり』と、今度は新郎が新婦の頭を見ると必要な髮がないので『世の中に宮や社ろは多けれど、カミの居らぬはつまらざりけり』、愈々媒介人の番になると、流石は媒介人ほどあつて『世の中に聟と嫁とは多けれど懷ろ見れば＝ハナ、カミもなし』とやつた、之は空假卽ち有無の兩端を引具して中道一實の中庸をとり占めた話であるが、何事でも其中心を捉へさへすれば大なる過失はない、若し單に空假、善惡の一方のみを抓まうとすると物が極端に辷りて、コロリと轉ぶ、塗箸で以て里芋のコロ煮を挾まうとするには、瓢簞鯰で仲々思ふやうに挾めぬ、ケレども里芋の中心を突きさすならば手易く捉へられる、デ吾等の心の中心を捉へることに於て柔和質直者といふ、斯の如き柔和質直者の資格あるものは、爭でか煙の如き彌陀に參じ、夢の如き藥師に走り、弘法に轉び、地藏に詣で、黑住にかゝつて苦勞し、天理にのぼせて屋敷を拂ふが如きことが出來ようか、卽ち有無の一方に片寄り空假のいづれかに固着が出來ようか、斯の如き妄信者にあらずして柔和質直で、諸のあらゆる善根功德を修する正信者の爲には、則ち本佛こゝに現はれて醍醐微妙の法を說きたまふのである。

或時爲此衆　說佛壽無量　久乃見佛者　爲說佛難値
我智力如是　慧光照無量　壽命無數劫　久修業所得

『或時ハ此衆ノ爲ニ、佛壽ハ無量ナリト說ク、久クアツテ、乃シ佛ヲ見タテマツル者

ニハ、爲ニ佛ニハ値ヒ難シト說ク、我ガ智力是ノ如シ、慧光照スコト無量ニ、壽命ハ無數劫、久ク業ヲ修シテ得ル所ナリ、こゝも矢張り、得見因緣を示した段である、ガ句に就て略解せば、或時爲此衆を新註には『亦タ初地初住ナリ』といふ、之は別敎にては十地の中の初歡喜地の位ゐ、圓敎にては十住の中の初發心住の位ゐに當る衆生といふこと、結局は本佛を信仰する量見になつた位地の人を指す、久乃見佛者、爲說佛難値をば『即チ五濁ノ重キ者ヲ指ス』といふ、大上人の所謂『三五の塵點を經る』といふが如く、五濁煩惱の重きものは當所に即身是佛を見ないで未來も未來も、盡未來際に於てやつと本佛を見奉るのである、故に『久クアツテ乃シ佛ヲ見タテマツル者』と說れた、則ち一心欲見佛の信仰心が起らない限りは當所に本來固有の本佛に出會ふことが出來ない、其を『爲ニ佛ニハ値ヒ難シト說ク』と示されたのである、我智力如是慧光照無量をば宗義鈔にては實智權智と云れてある、が玄義にては照理の智と鑑機の智とに配當して、而も『照理卽鑑機、鑑機卽照理』と明されて、實智は中道實相を照らす方の智識にして、權智は衆生敎化の方に用ふる隨宜の才智なりといふ、此意味から云へば智力と慧光と內容は同じけれど、外見は暫く別にして實智は所謂佛智とも如來智とも佛知見ともいふ照理の側であるが、權智は餅屋に餅の効能を說き酒屋に酒の難有味を說く隨宜の方便なる鑑機の側である、更に會義は久修業所得に就て面白い說を立てゝ居る、曰く『久修業所得トハ正シク此品所詮ノ如來壽量ハ是レ修得ニ約シテ性得ニ約セザルコトヲ顯ハス、性得ハ無始無終ニシテ生佛體同ジ、修得ハ有始無終ニシテ佛々道同ナリ、唯ダ其レ始アリ故ニ過去ノ實成ニ久アリ近アリ、唯ダ其レ終リ無シ、故ニ盡未來時常住不滅ナリ』と、なる程、修行に依て得る佛ならば有始無終だが、性具に依て得る佛ならば無始無終だとは、一寸聞ゆるやうだが、然し、壽量品の如來も修行に依て得る佛にして性具に依て得る佛ではないから、矢張り有始の如來だと云ふに到ては、全然首肯が出來ない、トいふものは五百塵點といふ有始に即して本覺無始を顯はしたのが壽量品の佛であるから、彌陀藥師等とは大に違ふのである、以上は專門的に字句を解釋したが、若し通俗的に略說するならば前述の如くに吾等は惡業煩惱多きが故に阿僧祇劫の永の間曾て三寶の御名だも聞くことを得しない、眞に可憐なものである、然りと雖も本佛の大慈悲としては、之を坐視傍觀するに忍びない、デ如何やうにしてなりと罪の子を救ひ上げんと思召す、なれど緣無き衆生は度し難しで、吾等の方に救はれようといふ希望と因緣とが無くば駄目なので、此句が露はれた譯であ

る、故に此句も次上と同じく、得見因緣を明すといふ、則ち諸有修功德とて、慈悲善根の功を積み柔和質直とて柔順和合、質朴率直の精神で我執妄執の念を捨てゝ實在の本佛に拜面すべく信仰心を起したならば、則皆見我身とて其本佛に面奉し得られると同時に、或時爲此衆とて本佛の方にても此輩の爲に親しく壽量品を說き給ふ（壽量品ノ何タルコトハ別項ニアリ一讀スベシ）故に說佛壽無量といふ、然し罪根深重にして一生入妙覺の大果を得ることの出來ないものゝ爲には、久乃見佛者とて次生か又は未來際かで一度は本佛を見奉るのである故ゑ、本佛には容易に會奉ることは出來ない、所謂『此經難持』とは此意味である、故に爲說佛難値といふ、我智力如是とは苟も見奉りたいといふ衆生の機感が起りさへすれば、本佛は眞如力、慈悲力を發して救ひ下さる、文に智力と云たのは暫く說法敎化に約して云たので、實は慈悲と眞如との兩力が含れてある、慧光照無量とは本佛の智光が能く衆生の迷闇を破つて、佛知見を開かしむることである、壽命無數劫とは本佛の壽命は前文に所謂『我レ佛ヲ得テ自リ來カタ經タル所ノ諸ノ劫數ハ無量百千萬億載阿僧祇ナリ』とか、又は長行に『然善男子、我實成佛已來、無量無邊、百千萬億、那由他劫』とか、或は『然我實成佛已來、久遠若斯』等と說れてあるやうに、無始無終的であるが、此長壽を得たのは全く久修業所得とて、因中の有ゆる修行の功に報うて得られたので、長行でも『我本行菩薩道、所成壽命』といふ、則ち修德の功に依て性德の壽を得給うたのである、傍註に果壽が既に久しいから因行も亦久しいとて、長行では果壽を本壽命妙とし、因行を本因妙と註して居るが、至極御尤で、果實の大なるを見ては花の壯なることが知れ、花の大なるを見ては果實の壯なることが知られる、則ち修行の久しきものは證果の高きが獲られ、果上の大なるものは必ず因中の長きに依る、ジャと云つて法華經に顯はるゝ因果は永く隔歷したものでなく、果中因あり因中果ありて、因果同時のものなるが故に、大上人は本尊鈔に『釋尊ノ因行果德ノ二法ハ妙法蓮華經ノ五字ニ具足ス、我等此五字ヲ受持スレバ自然ニ彼ノ因果ノ功德ヲ讓リ與ヒタマフ』と仰有つた、此主義より云へば妙法五字を信仰さへすれば、因行も果壽も卽ち修業も壽命も併せ獲らるゝのである、因みに文中の慧光照無量壽命無數劫の句に就て、彌陀の久遠佛なることを主張するものが居る『無量壽命』彌陀を無量壽如來といふ時は久遠佛にして其久遠佛たることは法華經壽量品偈に明かだといふと雖も、开は大なる間違ひである、抑も久遠實成といふは一切經中にても法華經壽量品の然我實成佛已來久遠若斯の文より外には一句もないのである、阿彌陀佛が無量壽如

來だと云たとて大師の判釋の如くに、有量を無量に塗直したゞけのことである、新註第六に、四句を作つて、一には有量、二には無量、三には亦有量亦無量、四には非有量非無量といふ、有量は無常にして、無量は常住なり、亦有量亦無量は亦常亦無常にして、非有量非無量は非常非無常なり、之を委しく冠註に說明して、更に四句を作つて居る則ち、一に實は有量なれども無量といふ、阿彌陀佛の壽命が實には有量なれども而も無量壽とい悲華經及び觀音勢至授記經に阿彌陀佛般涅槃の後に觀世音菩薩成佛すべしと說が故に、二に實は無量なれども而も有量といふ金光明壽量品に如來の壽は山斤海滴地塵空界も比すべきことあるなしと則ち佛壽は常住不滅ならんも共に壽量と云が故に、三に無量なるが故に無量といふ大經月喩品にたゞ佛のみ佛を見る其壽無量なりと之なり、四に有量を有量といふ今の釋迦の八十にして滅を唱へ給ふが如し、と以上は大師の四通りの判釋であるが、之に依て見るといくら久遠實成の彌陀なりと威張ても、其實は有量有始の如來であらう、それのに久遠實成の彌陀と云つたのは、親鸞晩年の說にして建長六年再治の淨土和讃に於て始めて公言して『彌陀成佛のこのかたは、今に十劫と說きたれど、塵點久遠劫よりも、久しき佛と見えたまふ』、『久遠實成阿彌陀佛、五濁の凡愚を愍みて、釋迦牟尼佛と示してぞ、迦耶城には應現する』と云つた、前は雙觀大經讃にして、後は諸經讃である、ところが大經の現文には彌陀の塵點久遠を說てもなければ、又諸經の中にも釋尊を以て久成彌陀の示現と爲すの明文もなし、況して『敎行信證』の本典にすら尙言はざるところの久成彌陀說は、唯親鸞の獨創にして、實は日蓮弘敎の鋭鋒に反抗せんが爲めの一時の奸策である、故に眞宗の學僧前田某も『佛敎古今變一班』の中に此事を述て、久成彌陀論は對日蓮策なりと、言明して居る、そして之は啻に親鸞ばかりでなく、蓮如迄が『こゝに彌陀如來と申すは、三世十方の諸佛の本師本佛なれば、久遠實成の古佛なり』と云つて居る、勿論、之は親鸞の肩を持ち、腰を擁した愚策に過ぎない、ガ彌陀を以て久遠實成の如來なりといふは、法華經壽量品の實成久遠の文を無斷借用したものか、但しは實成久遠の文が欲しくて內々橫領したものか、此二つの內の孰れかであらう、左もなくば五劫思惟、十劫正覺といふ金箔づきの有量佛になんとて、無量佛なる月桂冠が與へられようぞ、縱しんば阿彌陀如來を無量壽佛と云ふとも、其無量は所謂有量に鍍したものにて、贋造僞造の無量壽佛である、況して久遠實成の釋尊は却て彌陀の垂迹示現なりと云に到ては、本店の主人を下して支店長に貶し、支店長を上して本店の主人に請じたるか、但しは家來が

且那に成り、且那が家來に成つたるか、言語同斷沙汰の限りで、開いたる口が塞がらぬ、ケレども或は云ふであらう、壽量品は一往釋尊の久成に約すと雖も、諸佛本來同道なれば、釋尊一佛の久成は取も直さず一切諸佛の久成である、何ぞ獨り彌陀の久成を許さずと云ふか、且つ經文には明かに『諸佛如來、法皆如是』とあり、此一句眞に諸佛所說の壽量品なることを示したる文ではないかと、此の如きは天が既に高いのに何故地が卑いだらうと云に同じ、此壽量品に釋尊の久成を明す所以は、釋尊の唯一本佛なることを顯はす爲である、釋尊の唯一本佛を顯はす所以は、三世十方一切の諸佛は方便權迹なることを顯はす爲である、こゝを以て萬一諸佛の中に一佛でも方便權迹に屬せざるものあらば、釋尊の久成は名けて無始無終と云ふことは出來ない、かるがゆゑに諸佛如來、法皆如是の一句は方便權迹の同例なることを證したる警句である、猶ほ池月は萬影なりと雖も、天月は唯一なるが如く、壽量品は唯一釋尊の天月を明すのである、サラバ釋尊を差措て彌陀の久成を說が如きは全く池月を指して直ちに天月なりと云に同じ、況して釋尊を彌陀の垂迹示現なりと云は天月をば池月の反影なりと云に同じ、誰か之を信ずるものぞ、且つ彼の大經の彌陀は其因壽を論ずれば僅に具足五劫の思惟にして、其果壽を論ずれば唯十劫始成の正覺である、其間に不可思議劫を談ずるとも五劫と十劫との中間の劫數なれば限量有數の劫數ゆゑ、法華經の無始久遠なるには比較も出來得ざるもの、ダから五劫と云ても十劫と云ても、不可思議劫と云ても、吾が久遠實成には似るべくもなき限量有數、始成正覺の佛である、唯久しきの所以を以て久成を誇るならば、彌陀は確に十劫の久成なれば名こそ久成でも實は始成である、故に法華の無始久成には夢にだも及ばぬのである、それとも彌陀の久成を主張するならば、其久成は理成なりや、事成なりや、若し理成の久遠ならば法身の久遠ゆゑ、何ぞ彌陀一佛に限らんや、若し事成の久遠ならば十劫始成を破したる久遠でなくてはならぬ、ガ大經何れの所にか、十劫以前彌陀の本覺あることを說ける明文ありや、悲華經の二に『往昔、恆河沙、阿僧祇ノ前ニ此佛世界ヲ刪提嵐ト名ケ、佛ヲ寶藏ト曰フ、乃至 彼ノ佛無諍念王ニ記別ヲ授與セリ云々』、寶藏如來『轉輪王ヲ讚テ言ク、善哉善哉、大王今ハ所願甚深乃至 第二恆河沙等、阿僧祇劫ニ入ル是ノ時世界轉ジテ安樂ト名ク、汝時ニ作佛シテ無量壽如來ト號ス』等と明されて、彌陀の近成始覺なることが說れてある、然るに久遠實成、無始本覺の彌陀であるなんぞとは、全く專賣侵害、商標贋僞したる揑造說にして、視聽以後の窮策に出たる法華模倣說なれば、取に足らざる春宵一刻の夢

語なれども、次手に一筆を加へて吾が法華會員の參考に供し、併せて彼徒の反駁の材料に資して置く。

ケルン譯、『我が智慧の偉大なる力は、此の如く限量なく、我が壽命の際限も、亦限りなき年數の如く頗る長し』、

汝等有智者　勿於此生疑　當斷令永盡　佛語實不虛

『汝等智有ン者、此ニ於テ疑ヲ生ズルコト勿レ、當ニ斷ジテ永ク盡サシムベシ、佛語ハ實ニシテ虛シカラズ』、之は皆實不虛を頒すとて、如來は縱し爾前諸經、迹門等を說きしも、皆法華一佛乘に引入れんが爲めの手段なりせば、開權顯實、開迹顯本の上にては、眞實不虛の法門なることを頒したる一段である、汝等有智者とは、爾前諸經、迹門等を捨てゝ偏へに本門本地の本佛を信仰するものを指す、本多師は執近執迹の情謂を去つて、顯本の妙旨を信受するは果上の妙智に同化する者なれば、此信念忽ち果地の妙智に合し、信智一體を成す故に執近執迹の妄想を拋却して、一意無始の淨用を渴仰する者を稱歎して有智者と云ひ、又壽量顯本の妙旨を信奉すれば卽ち自ら大智の至極に合するものなれば之を有智者と云ふと示された、ガ予も同意見にて本佛を戀慕渴仰する信仰心は其儘直ちに果上本佛の眞智に同化するから、信仰心のあるものを名けて有智者といふ、既に有智者たる信仰者なれば、毛頭本地の本佛に對しては疑惑の念を發してはならぬ、文中の生疑とは、啻に本佛に對して疑念を起すばかりでなく、爾前諸經迹門等に傾くのも一種の疑惑なれば、況して淫祠邪敎に走り、又は走らんまでも此も善し彼も惡しからずとして、所謂雜炊的信仰もとも大なる疑惑である、サラバ此種の疑惑を斷盡せざれば、眞の意義ある信仰者卽ち有智者とは云はれない、故に嚴しく當斷令永盡と戒しめ、次で本佛の敎敕の虛妄ならざることを勸めて佛語實不虛と說き則ち嚴戒と勸信とを竝べ示して、『當ニ斷ジテ永ク盡サシムベシ佛語ハ實ニシテ虛シカラズ』と仰有つたものである、之を要するに此一段は所謂本佛の御聲に依て顯はされだところの御言葉を堅く厚く深く大に信じて毫も疑はざる時は、所謂有智者と靈化して凡夫卽佛、卽身成佛の域に達するといふことを力說されたのである、サラバ卽身成佛は本佛の御言葉を毫も疑はないで能く信仰したるものに對する靈的報酬である、而も其信仰を永久に持續するといふことは頗る容易ではない、大師も『受るは易く、持つは難し、成佛は持つにあり』と云れた如くに、受るは易すけれど、持つは難し、紙でも掌に載せただけでは風に吹飛ばさるゝゆゑ、堅く握て持つべきである、親讓りの財產を、子が

受くるは易すけれど末永く持つことは六ケ敷い、吾等の信仰も其通りで、時々起つても之を永久に持續するといふことは困難なので、經文には此經難持と說れてある、吾等の信仰は一時は熱烈であつても、暫く經つと其熱度が冷却する、之を名けて藥鑵的信仰といふ、ガ啻に信仰界計りでなく、日本人の癖としては何事にも急熱急冷なので、例へば出兵とか、戰爭とかと云ふ場合には、次郎も太郎も皆其方へのみ傾注するが、其も一時的にて未だ七十五日經たざる間に、早く熱度を冷却して一願だもしないといふ、所謂持久的精神に乏しきが故に、施設經營未だ十年經たない內に、少々の損でもすると直ぐに廢止するから、何事も成功し得ない、況して信仰の一事に到ては意識の背景なき迷信妄信計りだから『苦しい時の神頼み』で、少々苦痛なことでも頓發すると、跣參り、千度參りが始まるといふ、丸で浮草の水に漂ふが如く、大風に灰を撒くやうな信仰者のあるに乘じて、之を飯の種にすべく、山師が來りて正體の怪しい、狐か、狸か、牛馬の骨か、を擔ぎ出してサも勿體らしく吹聽すると、噂を聞た一人が本人の直談よりも確かな如くに請合ひ、現に自分が御利益に與つたやうに吹聽すると、其を聞たものが更に輪をかけて他に傳れば、他より又他に廻贈する途中で、頭を拵へ、鰭を附け、尾を添へて、全然無根の虛僞を眞面目に語りもし、聞もする位の信仰者、左もなくば懷手をして世渡りがしたいといふ、慾の深い信仰、どうも近頃は不景氣で困るから、何か一番、寢て居て喰へる程の金儲けを授けて下さい、其代り儲つた以上は金の燈籠に石の鳥居を献じて、雨風厭はず日參するといふ、が不景氣で困るなら、何故、困らないやうに起て働かない、第一寢て居て喰度いとは、殺されない豚の如き願望だ、若し儲つた以上といふ者に限て、儲つた後に約束を守つた例がない、雨風の日參がどれ程の恩返しなのか、其手間で天秤棒でも擔いで眞面目に働くが宜い、態々暇を潰して日參するのに御利益がないと、神佛を相手に訴訟でも起す位の信仰者、或は明日は議員選擧の當日故ゑ、首尾能く最高點で當選するやうに、實は油斷なく運動は致して居るが、若し落選でもすると養子の身分なので、家內に對し親爺親類の手前相濟みませぬ、それに案外の運動費もかゝつて居るから、何卒願望成就なさしめ給へ、と頼むが汝元來議員になつて、どれだけの事が出來ると思ふか、身分知らず奴、頼むなら運動費を出した方へ頼め、大體人民の爲でなく運動の爲に出ようとすれば、運動費の多い方が勝て、少い方が負けるに極つて居る、幸に當選すれば他よりも贈賄が多かつた證據、若し落選したら少かつた證據、是程明かな競爭沙汰を、神佛の方へ持て來るやうな奴には、御利益として明日は屹度、

落選の光榮と賄賂行使、選擧違犯で監獄に這入る名譽とを授けられる信仰者、或は目下の人間に向つてさへ憚る惚氣を神佛の御前にサラケ出して、夫婦になさしめ給へとか、或は眼前ではペコペコ頭を下げて、影では舌を出す程の不正直で以て商賣繁昌するやうにとか、或は淫賣婦にうつゝをぬかして、家庫が傾くとも、家内安全ならしめ給へとか、或は身持放埒で以て息災延命ならしめ給へとか、或は兵隊檢査の關に免れるやうとか、或は投機賭博に勝てるやうとか、或は圍ひ女が浮氣しないやうとか、或は金出して求めた花柳病が癒るやうとか、又は白銅一つ惜氣ながら出した癖に、寄附連名の建札には一金百圓と筆太く書て呉れといふ位の信仰者はあるとも、正しき御教を正直且つ熱烈に信仰する者は、鉦や太鼓で探しても見つからない今日の信仰界である、況して本佛に對する信仰を永久に持續するといふ眞の信仰者は、殆ど千中無一である、詰らぬ話だが、次手に句中の『疑』の一字に就て一言せば色々ある、敬遠主義とか、無決定主義とか、八方美人主義とか、御都合主義とか、二股主義とか、お追從主義とか、不隨順主義とか、不徹底主義とか、皆之れ疑の一字から割出されたのである、苟も成佛の大事を遂げようといふ佛門に於ては大の禁物である、或所に一人の旅僧が路に迷うて四辻に立つて居と、遙か後の方から一人の

娘が來るので、旅僧は之に路を聞うと想て、モシおねいさん、何村へ行くには何方の路を行たら宜いでせう、ト聞くと娘は不圖立留つて、右手の方を指して此路を眞直ぐにお出でなさい、左樣か、おねいさんは何方へ行きなさるのか、妾も矢張り其村へ參ります、デは一緒に行きませう、何うか、お先へ、イヤ和尚さんの先に行くは勿體ない、和尚樣どうか、お先に、と互ひに讓り合つて誰も先に立ない、蓋し旅僧の考では、娘を狐の化物だと想へば先に立てば後から何かするだらうと疑ひ、娘の考でも旅僧を狸の化物だと思ふから先に立てば後から何かするだらうと疑ふ、どころから、デは並んで歩きませうと、狹い路を二人並んで歩きつゝ互ひに語り合ふ、ナンと、おねいさん妙なことを云やうだが、お前さん燒鼠が大好物でせう、イヤそんな物は見たこともありませぬ、ガ和尚樣それでは、和尚樣は馬の糞の牡丹餅がお好きでせうな、イヤそんな物を喰たことはない、ト云ふから愈々狸に相違ないと思つて、ナンと和尚樣、モ少し行くと平生休みつけの茶屋があります、そこで一休みしては如何です、茶屋には何かありますかな、ハイ大きな狗があります、デは其所で一休みしませうヨ、蓋し娘の考では和尚を狗の前に誘ひ出して狸の本性を顯はしてやらう、と巧めば旅僧の方でも娘を狗の居る所に差出して狐の本音を吐してやらう、と思か

ら一緒に茶屋で腰を卸して一休みした、スルと腰掛の前に大きな狗が口を開けて、尾を振て、物欲しげな風をして居た、茲に於て狗の裁判を受けて、初めて旅僧も娘も化物にあらで本統の人間であつたことが判つた、デ今迄の疑の雲が明かに晴れたとかいふ、世の中に平和の曙光が見えないのは、畢竟此種の疑の雲がかゝるからであらう、國家に、家庭に、君臣父子、夫婦、昆弟、知己朋友の間にも疑の一字が存するならば、得て平和を望むことは出來ない、デいつかは是非とも、狗の裁判に與らねばなるまい。

如醫善方便　爲治狂子故　實在而言死　無能說虛妄

『醫ノ善キ方便ヲモツテ、狂子ヲ治センガ爲ノ故ニ、實ニハ在レドモ、而モ死スト言フニ、能ク虛妄ヲ說モノ無キガ如ク』、之は開譬を頌する一段である、文中の方便を以てとは過去、現在、未來の三世に通ずと雖も爲治狂子の句を現在のことにする故る、醫善方便を過去のことゝすべしと、新註は云へり、俗に『ウソを方便』なぞと云のとは丸で違ふ、こゝの方便といふは本佛の慈悲の懷ろから湧出でたる一時の手段であるから、方便と云ても事實である、方便に就て法華論貫に法用方便と、能通方便と、祕妙方便との三個の解釋を掲げて居る、そして法用といふのは小乘、權大乘等の詰らぬ法門を用ひて衆生の機根に適應する方便である、能通といふのは小乘、權大乘の法門を用ふるのは他日實大乘に通入せしめんが爲めにして實大乘の顯はるゝのは小乘、權大乘等の手柄に歸する方便である、次に祕妙といふのは小乘、權大乘の法門が其儘直ちに實大乘に善化して權實同體となる方便である、かるがゆゑに法華經方便品といふが如きは、卽ち祕妙の上から名けた方便なれば、名稱こそ方便なれど實體は眞實品である、サラバ眞實品と云ても宜しいけれど、眞實品と云よりも昔しの名前を籍りて矢張り方便品と云つた方が一層趣きがある、と同時に方便卽眞實なることを表示したことになる、今茲で醫善方便といふも其意義の方便なるが故に、俗にいふ虛妄の方便とは天地の差がある、サテ此一段は本佛の御慈悲の廣大なることを譬に寄せて御示しになつたので、長行に良醫治子の譬があるのを再び茲に略示されたものである、或所に學問技術共に秀た、のみならで非常に慈悲深い、一人の醫學博士が居ました、而も此博士には澤山の小供がありまして、或日、父親の留守中に遊戯の折り、何も知らずに誤つて毒藥を飲んだ、サー、胸が苦しくなつて來た、煩悶懊惱、空を摑み、地に宛轉して騷ぎて居る、仲には少し正氣の兒もあつたが、苦しさに正氣を失つた兒が多數であつた、丁度、宜いぐあひに父親が還て來た

ので、父の博士は此有樣を見て大に驚き、直ぐに『此大良藥、色香美味、皆悉具足』として、色も香も味も揃つた良藥を調合して與へました、正氣の兒は直に飲んだから病が癒つたが、多くの正氣を失つた發狂ひの兒は、一度毒藥に懲りて居るから、仲々之を飲まぬ、毒病が倍々重くなるばかりで、藥を服ませなければ、一命は助からぬ、父親の慈悲心から調合した、此良藥、飲さへすれば毒病は癒るのだが、そこが所謂『或失本心』發狂ひであるから致方がない、自ら倍々苦痛を重ね、最早や死ぬばかりで『此子可愍』實に可愛相なものである、と云て、此儘に棄置く譯にもゆかず、色々勸めても服藥せぬから、之を服藥させる手段方法として、亦又、他出した、私は要事が急に出來たのでこれから他國へ行ねばならぬ、ガ『是好良藥、今留在此』此良藥をこゝに置て措くから、留守の間に是非之を飲んで呉れよ、スレバ『卽便服之、病盡除愈』毒病は必ず全快すだらう、と申附けて外出した、兒共はまだ氣が附かぬ、父親は時機を見計らつて、使者を留守宅へ遣はして『あなた方の阿父さんは、旅の空で死にました』と告げさせた『實在而言死』とて實際は、死亡したのではないケレど、假りにそう告げさせて、兒共の心を驚かし、正氣に歸らせようとの方便、之を『如醫善方便、爲治狂子故』といふ、兒共はこの青天の霹靂とでも評すべき、父親の訃音に接して、

且つ驚き且つ悲みて『若父在者、慈愍我等、能見救護、今者捨我、遠喪他國、自惟孤露、無復恃怙』と、想ひ回せば父上が此世に在りし其時は、我等を憐みアヽしてコウせよと、慈悲深かりし父上も、今は哀しや旅の空、還らぬ旅に赴かれ、再びお目にかゝるのは、彼の世ならでは叶ふまじ、ト思へばあはれ夜嵐の、木の葉吹捲く音凄し、チヽと泣く夜のこほろぎも、親を慕ふ兒鴉も、更けゆく夜半に聲落ちて、雲いと暗き大空に、星も涙に曇る時、いづくの鐘ぞ霜に冴え、流石につらき浮世なら、在りし昔を夢に見て、うつゝに還る草の床、置くや想ひの露しげく、擔端にくゆす線香の、靡く煙は父上の、お座す姿と寄添へば、あはれ吾兒よ心して、遺せしつとの藥をば、飲で惠みの便りなき、身をば守れよいとし兒等、天に働き地に泣いて『心遂醒悟』と氣が附て、やつと本心に還つた、デ縱し癒らん迄もせめて、此藥を飲だら追善供養、父も安心するならん、ト『卽取服之』デ飲しかば『毒病皆癒』と全快した、此樣子を噂に聞いた父親は、心盡くしの甲斐あつたと、喜び勇んで歸宅したといふ、譬の筋路父の博士とは誰あらう、卽ち本佛釋迦牟尼如來にして、是好良藥とは妙法蓮華經のことである、毒藥を飲むとは淫祠邪敎に歸依すること、本心を失ふとは本佛を信仰しないで、弘法に轉がり、天理に逆上せ、黑住に移り、耶蘇に鞍替する等である、サラバ斯の如き毒藥を

飲んで本心を失つたものを狂子と云ふ、狂子と云へば今の世は、狂子が頗る多い、政權を爭奪して天下の大宰相たる總理大臣も、學問に中毒した飯喰字引の大博士も、拍手の手品で賽錢を釣る神職も、經文の切賣で布施を集める僧侶も、自用車と藥價廉とを廣告に遣つて門前市をなす醫者も、勳章は喰ひたし命は惜しゝの軍人も、一夜夢見る成金は云に及ばず、凸凹男も、お多福女も、禿頭も、青二才も、誰も彼も皆發狂して、生涯を煩悶と、徒勞とに終るべく、名譽だの位地だの、錢だの、色だの、と騷ぎ廻つて、青天白日の下に、兩眼を光らして居ながら物に躓づき、戸に突當り、障子に支へられ、出口を失うて、壁を引掻くが如く、戸迷ひする狂子も、居れば、不意な事に出つ會しては、忽ち狼狽して、山へ行く筈の者が川へ迷ひ込み、里へ出る筈の者が海へ顚げ落て、藻掻けば藻掻くほど、出場を失ひ、焦れば焦せるほど浮ぶ瀨無くて、悶へ苦んだ結果は、自繩自縛でクタバルに極つて居る、ケレど尙ほ、虛威と虛勢を張つて、丸で分限者倒れ」と一般で、詐欺、竊盜をしながら道德だとか知識だとか、唐人寢言を云てる狂子も居つて、今の世は狂子で鼻突くやうである、ゲにや、本心を失つた發狂ひの多き今の世を救ふべく譬如良醫の大聖釋尊、智慧聰達の配劑で、八萬法藏の藥草を取集め、四味八數の藥種を撰び寄せ、諸乘一佛乘と調合し、當分跨節の藥研に入れ、正直捨權と擣き叩き、善惡不二と細抹にし、醍醐一實の篩にかけ、如天甘露の法水で、邪正一如と練り合せ、諸法實相と丸めたる、是好良藥の妙法を、第三末法の世に出でゝ、或失本心の衆生に施し、四百四病の惱みは勿論、見思、塵沙の煩惱も貪瞋、痴、慢の三毒五欲、四十二品の無明の病も、根本治療の大良藥、本化ならでは良藥を、末世に弘むる者はなしと、四句要法の箱に納め、宣示顯說と糊を附け、一部八卷の能書添へて、囑托あり し上行は、時も違へず末法に出、日蓮と名乘りて妙法蓮華經、五字の題目旗風高く、唱へらるゝも末世の發狂ひ、狂子を救はせ給はんが爲めである。

我亦爲世父　救諸苦患者　爲凡夫顚倒　實在而言滅

『我モ亦コレ世ノ父、諸ノ苦患ヲ救フ者ナリ、凡夫ノ顚倒セルヲ爲ッテ、實ニハ在レドモ、而モ滅スト言フ』、本佛を指して父と云たのは、本佛が慈悲の結晶であるは勿論のこと、更に肉體や精神やの中心であると共に肉體や精神やの本源である、いくら母がありても、兒の出來得る胤は父方にある、看よや、總ての兒は父から出來得る、其父も亦前の父から出來得る、斯樣に段々と遡上つた時は、唯一人の父であらう、經文に衆聖中尊世間之父とか、我實其父とか、不信是父とか、此句に我亦爲世父等と云はれてあるのは、卽ち一人の父たる本佛を指すのである、ガ此一人の父は音に過去

に遡上つた時の本源のみでなく、現在に於ても、總ての兒の爲には中心である、ケレども本源と中心とは二つあるものでなく、實體は必ず一つのものである、若も中心の父と本源の父と二つあるやうでは、國家が亂れるだらう、天に二日なく、國に二王なく、三種の神器が二通りないのでこそ神聖であらう、若も天皇が御二方あらせ給はゞ、日本國は何うなるだらうか、シテ見ると本源の父と中心の父とは是非一體でなければならぬ、否な之が一體でなくんば顚倒の兒はその皈嚮する所に迷うて永く成佛が出來ないであらう、故に經文には『唯我一人、能爲救護』とも、又『十方佛土中、唯有一乘法』とも、或は『唯此一事實、餘二則非眞』とも、亦は『唯一無二乘』等と示された、此意味からいへば、外敎等の說く父なぞは本源の父でも中心の父でもなく、胤欲しさに一時傭入れの父か、但しは內證の父か戶籍上にない父、表向きに出せない父、納戶の隅に藏つて置く父、腰卷に包んで置く父、ダから表面兒が造られようか、淫奔の罰で兒が出來たにしても、可愛相に父無し兒の私生兒だ、こゝに明す我亦爲世父と申す父は、實に公明正大、堂々たる天下の大慈父にして、三千世界、中心の慈父なれば、隨つて三世一貫、本源の慈父である、其壽命は無始無終、其行動は無量無邊、ゆゑにその親權を行ふことが極はめて永遠に、極はめて廣大である、ダから大なる父の目から見給ふと、吾等衆生は其の子なるが故ゑ、經文にも一切衆生、皆是吾子とか、是諸衆生、皆是我子とか、其中衆生、悉是吾子とか、此是我子、我之所生とか、此實我子等と說れてある、然るに是諸罪衆生の吾等は前述の如くに顚倒の心よりして、他の毒藥を飲んで煩悶憂惱、遂に發狂ひに成て迷ひに迷うて居ので、救諸苦患者の本佛としては之を見逃す譯にはゆかぬ、そこで我亦爲世父の本佛は、色々と心配なされて是好良藥の法華經を與へ給うた、ガ本心を失つてる吾等は、容易に服藥しないそれも其筈よ、前に毒藥を飲んで最早や懲々して居るので、いくら良藥だからと云ても仲々承知しない、デも親の慈悲じやもの、何うかして、救ふて遣りたいと思案に暮れた揚句の果、他國へ出でゝ旅の空、つらき野分けの風にさへ、便り聞きたい親の慈悲、乾く暇なき露衣、チ　と泣く夜の兒ほろぎの、聲聞く秋は哀れにも、何卒病が癒れよと、兒共の病を治したいため、實在而言滅とて、實は死んだでなけねども、態と死去の旨を傳へた、といふ、茲に於てか、予は一言を四億萬の佛敎徒に呈したい、吾が戀慕渴仰する本佛は天下の大慈父にましまして、吾等が諸の苦患を救はせ給ふ、イトも尊貴な御佛である、吾等が四顚八倒の見に迷ふを憐み給うて、救はせ給はんが爲に、常在の御姿を隱して、態と滅度を示し給ふ、是れ之を『我亦爲世父、敎諸苦患者、

爲凡夫顚倒、實在而言滅』といふのである、乞ひ願くは本佛が吾等の爲に遺し給ふた是好良藥を服して、一日も早く本心に立還られんことを。

以常見我故　而生憍恣心　放逸著五欲　墮於惡道中

『常ニ我ヲ見ヲ以テノ故ニ、而モ憍恣ノ心ヲ生ジ、放逸ニシテ五欲ニ著シ、惡道ノ中ニ墮チナン』、馴れては人を馬鹿にするのが吾等の恆である、若も本佛が久しく世にましまさば、罪業深き吾等は難遭の想ひもなく、何時にても佛に遭へる、そして何時にても法が聞れる、と思うてそろそろ横着に成て佛道修行を怠りがちになる、計りでなく『佛の顏も三度』とやらの心を起す、所謂『昆山ノ下ハ玉ヲ以テ鳥ヲ打ツ、蓬蠡ノ濱ハ魚ヲ以テ狗ヲ養フ』で、鑛山には玉が多いから鳥を打つにも玉ですする、漁村には魚が多いから狗を養ふにも魚でする、之は玉や魚が澤山ある所では、却て之を粗末に扱ふの云である、佛も亦然りで、本佛が始終世の中に存在せば、吾等衆生は馴れ狎れしく思て、却て粗末に扱ふが故に、長行の文に『若シ如來常ニ在テ滅セズト見バ便チ憍恣ヲ起シテ、厭怠ヲ懷キ、難遭ノ想ヒ、恭敬ノ心ヲ生ズルコト能ハズ』と示されてある、則ち今の以常見我故、而生憍恣心の句に當る、が啻に憍恣の心を生じ厭怠の念をなすばかりでなく、世に永く在ませば、衆生は却て色、聲、香、味、觸の五慾を恣にして、爲めに三惡道へ墮落する虞れがある、所謂『放逸著五欲、墮於惡道中』である、ダから實在而言死とも、實在而言滅とも云て、本佛は敎化の爲に態と滅相を示して二月十五日鶴林の雲に隱れ給ふのである、斯うなると漸く本佛を戀しく慕ふ心が起り『第一希有、難解之法』として、未曾有の本法を大切にする量見が起るので、長行に所謂『如來ハ見ルコト得ベキコト難シト、是ノ如キ語ヲ聞テハ必ズ當ニ難遭ノ想ヲ生ジ、心ニ戀慕ヲ懷キ佛ヲ渴仰シテ、便チ善根ヲ種ユベシ』とは此意味である、狂子が父親の居る間は難有しとも、何とも思はなかつたが、一度死去したと聞けば、驚き悲の結果、漸く元の本心に立還つて、良藥を服用する氣になつたやうなものであらう。

我常知衆生　行道不行道　隨應所可度　爲法種種法

『我レ常ニ、衆生ノ道ヲ行ジ、道ヲ行ゼザルヲ知テ、度ス可キ所ニ隨ツテ、爲ニ種々ノ法ヲ說ク』、本佛は常に觀機三昧にましまして、衆生の機感の動くや否や、則ち吾等に佛道修行の氣がありや否やを證知證鑑し給うて、吾等が機根の利鈍賢愚に應じて小、大、權、實の法門を施し給ふが、其皈嚮する所は吾等衆生をして無上菩提を證せしめんが爲めの大慈大悲である、若しまた『道』を『ミチ』と和訓して、世道とか人

道とかに約するならば、本佛は常に吾等が世道人道を正直に履行し居や否やを御洞察になるガ『道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらず』、デ何事にも各各道があるから、此道に依ねば通はれぬ、又は此道を外れると汽車の脱線と同樣の目に會ねばならぬ、音にひどい、危險な目に會ふばかりでなく、更に役に立たぬ、用を爲さぬ、湯呑は湯を呑む道具、扇子は風を出す道具、サラバ、湯呑では風が出ない、扇子では湯が呑めない、ト斯う考へて見ると今の世は、例へば細君が亭主に對つて『あなた、西洋料理が出來たら、炉爐の上に載つけて頂戴、あたい、炬燵の中で喰べるの、好きなんだから、ハイ、ハイ、只今大急ぎで、直に持て參ります』と、堂々たる天下の髯面が、ハイカラの庇髪に對して、頗る柔順なのを以て寧ろ名譽と思ひ、細君から『それが澄んだら、此腰卷も、此足袋も、此襦袢も、次手に洗つて頂戴』と云ひ附かるを、却て光榮に思ふ程、能く夫婦の道を行じて居る、或はまた金を借りても、始から踏倒す量見で借りて、口でさへ返濟すと云へば、假ひ實際には返濟しない上に、苦しまぎれに委托品を質入れし、又は賣飛ばしても宜いやうに、借用の道を行じて居る、トいふ位で、今日では正直に世道人道を履行するものは所謂正直馬鹿と評され、不正直に道を行じて、僥倖を得たものを成功者と評さるゝ故ゑ、世は皆闇黑と化して、何が何やら判らなくなつた、其判らなくなつたものをも、何うかして救濟し遣らんとの本佛の大慈大悲、之を隨應所可度、爲說種々法とも說くのであらう。

毎自作是念　以何令衆生
得入無上道　速成就佛身

『毎ニ自ラ是ノ念ヲ作ス何ヲ以テカ、衆生ヲシテ無上道ニ入り、速ニ佛身ヲ成就スルコトヲ得セシメント』、之は、自我偈、二十五行半の結文にして、また壽量一品の末文である、ガ大きく見ると一代諸經の起點なると、共に一切佛敎の終點なので、總ての經文、敎義は此一行四句より流出もすれば、亦此内へ皈入もする、即ち此内から支出もすれば、隨つて此内へ收入もするから、之を從一出多とも、從多皈一ともいふ、例へば金庫から取出した錢が、天下に融通しては米と成り、酒と成り、茶と成り、着物と成り、家屋と成り、將た田畑山林と成り、色々の品物に成る其間には、借錢と成り、貯金とも成り、苦む者が出來れば、樂む者も出來て、他人の懷ろに納れば自分の倉へも納まつて、廻り廻つた末には、再び元の金庫に落着くが如く、從一出多とて此一行の金庫から、華嚴、阿含、方等、般若、の四味、八敎が湧出れば、從多皈一とて小、大、權、實、顯、密、迹、本等の敎相、觀心も此一行の金庫に皈着するのである、然らば何故斯の如き力が現はるゝかといふに、开は如來の身口意三輪不思議の力は、吾等衆生を導いて唯『無上

道ニ入リ、速ニ一身ヲ成就スルコトヲ得セシメン』といふ、卽身成佛の外はない、長行の或示己身、或示他身、或示己事、或示他事といふ形益も、また或說己身、或說他身、或說己事、或說他事といふ聲益も、皆『得入無上道、速成就佛身』の爲めである、之を要するに常住實在の本佛が、非生現生の作用を起すも、非滅現滅の動作を示すのも、本佛御自身の爲めでなく其が悉く吾等失心者をして元の本心に立還つて卽身成佛を得せしめんとの慈悲である、此大慈悲を遂げんが爲めに過現未の三世に亙りて常恆不斷、夜となく、晝となく、寢ても、覺めても『每ニ自ラ是ノ念ヲ作ス、何ヲ以テカ、衆生ヲシテ無上道ニ入ラ』しめんとの御意である、此御意の發動發作が流れて八萬四千の法門と成り、積んで五千餘卷の經典とも成つた、トすれば『是念』といふ文字は、本佛固有の慈悲の本質故ゑ、何うかして無上道を感せしめたい、何うかして卽身是佛を得さしたいといふ、慈悲の凝つた力である、この力を衆生敎化の舞臺に顯はした時、彌陀とも、藥師とも、觀音とも、地藏とも、猫とも、杓子とも成て十界三千の諸法と成る、ケレども根本は唯一人の本佛なるが故に『唯我一人』とも『唯有一乘法』とも說れてある、丁度舞臺にては殿樣家來、姫君、腰元、仇敵、味方、惡漢と成り、善人と成り、馬の脚と成り、お大根と成るも、樂屋に這入れば皆一樣なるが如く、十界三千の諸法も唯本佛御一人の胸に潛在する『是念』の發動發作である、大體に於て、佛の出世されし一大事因緣とは要するに人格を向上せしめて、凡夫を佛になそふといふが大目的、大主義なれば、此一行は卽ち其が明されてある、新註には、此一行を益物不虛に合するを頌すと云ひ、又は開三顯一、開近顯遠、欲令衆生速得佛道、此事必得不虛也と云ふ、然り、之は前述のやうに一切の經文、敎義がこゝから出るとすれば、又こゝに納るものゆゑ、二乘、三乘、五乘、七方便、九法界等の法門を開して唯一乘を顯はすことが出來、或は近成、始覺、迹門等を開して皆久遠を顯はすことも出來るのである、苟も之が出來得た時は、得セ令ン、といふ未來詞にあらで、速カ、といふ現在詞になつた時である、則ち窮子卽長者、失本心者卽本心者と成つた時にして、此時の境界は假ひ大火所燒時であつても、それが直ちに我此土安穩の境界である、若し斯うなれば如何にも結構な、そして難有い生涯ではないか、此結構なそして難有い生涯に成るには、獻身的信仰を是非要するから、大上人も御義口傳に『南無妙法蓮華經ト唱ヒ奉ル者ハ、成就佛身疑ヒ無キナリ』とか、又は『信心弱クシテハカヽル目出度所ニ行クベカラズ』とも仰有つた譯である。

ケルン譯、『我は是の如く、又是の如し、何に依てか我は衆生を證悟に導き、何に依て

か衆生は佛法を得るを得ん』。

法華義決『毎自の下の一行は三世の益の不虚を頌す、正しくは過去に在り、若し此文を見ば能く如來久遠よりこのかた常に衆生を念じ給ふを知らん、我等聞くことを得たるは釋迦大師の毎自の念願に酬はざるはなし、當に知るべし、聞くことを得たれば佛を得ること久しからず矣』。

大上人御義口傳『毎トハ三世ナリ、自トハ別シテハ釋尊、總ジテハ十界ナリ、是念トハ無作本有ノ南無妙法蓮華經ノ一念ナリ、作トハ此作ハ有作ノ作ニアラズ、無作本有ノ作ナリ』。

本多師『毎とは三世不斷にして未だ曾つて暫も止息せざることを顯し、自とは三身即一の應身事常住の我が本師釋迦牟尼佛なり、是念とは盡十方無邊の衆生を濟度せんと欲し給ふ大慈大悲の念願にして即ち意密輪なり、作とは此大慈大悲の念願三世に發動して化他利物の淨用を起すを示す、以何とは廣くは六塵を應用して不思議の妙化を爲すを云ひ、正しくは形聲の兩益を起し化導の施設周備して缺ることなきを云ふ、衆生とは利鈍輕重萬機を攝得して一も漏すことなし、無上道とは法體に約せば事の一念三千の妙法なり、教法に約せば聲色爲經の總持王たる妙法なり、行法に約せば信念成佛の要道なり、果法に約せば久遠實成妙覺極果の大法なり、智門に約せば妙覺極果の妙智を以て事の一念三千の實相を觀念して之を究竟せしむるものなり、信門に約せば本佛毎自の悲願を以て聲色爲經の妙法蓮華經を信念して之に由て修顯得體せしむるを云なり、入とは智門に依らば觀智を成辨し、信門に依らば受持の信念を決定せしむるを指す、速とは頓極頓證の義にして迂廻歴劫に簡び以て即身成佛の妙旨を顯す、佛身とは無上の妙慧を開き無窮の大悲を具へ微妙の淨き法身相を具ふること三十二身皆金色にして身光十方を照すところの相々實相莊嚴尊特の妙體なり、成就とは修顯得體を指す即ち智悲具足の意密輪を具へ形聲自在の身口の兩密輪を現じ不思議の三輪を以て悉く群生を利益し如來の秘密神通の力を獲得せしむるなり』。予曰く、自我偈、二十五行半、五百十字の最初の自我の自の字と、最後の佛身の身の字とを結合すると自身と讀むから、其中間の五百八字は自身を解剖したことになる、ガもし自我の我の字と佛身の佛の字とを結附けると我佛と讀むから、自我偈は全く自我が佛身であることを説明したものである、そして、其が吾等迷中の所見でなくて、本佛悟上の所見なるが故に、長行の文に『如來ハ如實ニ三界ノ相ヲ知見ス、三界ノ三界ヲ見ルガ如クナラズ、斯ノ如

キノ事、如來明カニ見テ錯謬アルコトナシ』と說れて、本佛の所見の最正最眞なることを示されてある、吾等は本佛を戀慕、渴仰することに依て悟上の所見に如同もするし、また無上道に入り速に佛身を成就することも出來得るのである、尙ほ句中の得入無上道と、速成就佛身とは同一體にして、無上道に入れば佛身を成就し、佛身を成就すれば無上道に入るから、謂はゞ一法の二義であらう。

日蓮大上人略年譜

貞應元年　八十五代後堀河天皇、二月十六日大上人は安房國長狹郡小港に生る善日丸と名く、

同二年　二歲、道元宋に入る、

元仁元年　三歲、北條義時卒す、親鸞淨土眞宗を開く、

嘉祿元年　四歲、吉水和尙寂す、

同二年　五歲、

安貞元年　六歲、山徒法然の墓を毀つ、

同二年　七歲、京都鎌倉洪水、道元曹洞宗を傳ふ、山徒京を侵す、

寬喜元年　八歲、

同二年　九歲、園城寺僧徒相鬪ふ、

同三年　十歲、淸水寺僧徒相鬪ふ、

貞永元年　十一歲、天下飢饉、栂尾明惠寂す、

天福元年　十二歲、四條天皇即位、大上人は淸澄寺に入り道善に就て道を禀け名を

藥王と改む、

文暦元年　十三歳、

嘉禎元年　十四歳、山徒京都を侵す、專修念佛を禁ず、

同二年　十五歳、

同三年　十六歳、十月八日戒を道善に受け薙染して蓮長と號す、勅して延暦寺の囚徒を捕ふ、

暦仁元年　十七歳、鎌倉に遊で念佛を大阿に受け禪律を其宗の碩學に受く、

延應元年　十八歳、鎌倉に在り、

仁治元年　十九歳、同上、

同二年　二十歳、同上

同三年　廿一歳、故郷に還り師親を省す始て戒體成佛義を著す、復鎌倉に趣き尊海に知られ比叡山に登りて研究し、兼て京都に圓爾道元等を歴訪す、

寛元元年　廿二歳、後嵯峨天皇即位、

同二年　廿三歳、日朗下總に生る、

同三年　廿四歳、叡山に在り、

同四年　廿五歳、泉涌寺に宋僧道隆に謁す、三井寺に懸錫す、北條時頼執權となる、

寶治元年　廿六歳、後深草天皇即位、山徒興福寺を襲ふ、

仝二年　廿七歳、南都高野を遊歴す、

建長元年　廿八歳、叡山に在り、

同二年　廿九歳、同上、

同三年　三十歳、國學儒道の大家を訪ふ、兼て東寺に秘訣を探り、時頼建長寺を創して道隆を請す、

同四年　卅一歳、叡山に在り、

同五年　卅二歳、故郷に還り四月廿八日をトして清澄山に登り旭日に對て始て題目を唱ふ、法華宗開創せらる、去て鎌倉に入る、

同六年　卅三歳、鎌倉松葉谷に在り、日朗を度す、總州を遊化して富木氏を度す、覺心普化宗を傳ふ、

同七年　卅四歳、註法華經等を著す、

庚元元年　卅五歳、鎌倉に在り、四條金吾進士善春工藤吉隆荏原義宗池上宗仲等檀越となる、

正嘉元年　卅六歳、大旱地震、山徒京都を侵す、
同二年　卅七歳、駿州岩本實相寺に一切藏經を閲して天變地夭の因由を糺す、父重忠逝く、
正元元年　卅八歳、日月薄蝕し、疫病行はる、守護國家論等を著す、
文應元年　卅九歳、龜山天皇即位、立正安國論を作り北條時頼に呈す、兇徒草庵を燒く、去て下總富木氏に寄る、日朗日興來りて投ず、
弘長元年　四十歳、五月北條長時の命にて伊豆國伊東に竄せらる、
同二年　四十一歳、伊豆に在り、此年親鸞寂す、
同三年　四十二歳、時宗大上人を赦して鎌倉に還らしむ、時頼卒す、
文永元年　四十三歳、故郷に母を省す、地頭東條景信大上人を小松原に要擊す、鏡忍等難に死し、大上人眉間に傷く、
同二年　四十四歳、常野二州を巡化す、
同三年　四十五歳、
同四年　四十六歳、母の死を聞て故郷に還る、
同五年　四十七歳、元使初て日本に來る、大上人書を時宗以下十一所に贈り公廳の對決を促す、幕府梶井青蓮兩門跡を沒す、
同六年　四十八歳、元使再び來る、大上人富士に登り手寫の經を山上に埋む、兩門跡門徒神輿を奉じて京都を侵す、
同七年　四十九歳、
同八年　五十歳、良觀行敏等の讒にて龍口に斬首せられんとす、次で佐渡國に流さる、
同九年　五十一歳、佐渡塚原に在り島民を教化す、初て本化の法門を開く、本願寺を山城國大谷に建つ、開目鈔上下の著あり、
同十年　五十二歳、觀心本尊鈔を著して宗教の玄旨を明にす、初て十界大本尊を圖顯す、當體義鈔等成れり、
同十一年　五十三歳、時宗大上人を赦す、鎌倉に入て三度幕府に法を說く、時宗宗牒を贈る、大上人喜ばずして甲斐國身延山に遁る、
同十二年　五十四歳、
建治元年　後宇多天皇即位、身延に在り著作多し、
同二年　五十五歳、師道善寂す、報恩鈔を作て遙か墓前に供す、一遍時宗を創す、

建治三年　五十六歳、草庵を修營し、御義口傳成る、頼基陳狀等あり、
弘安元年　五十七歳、徒を集めて盛に講筵を開く、日向記成る、此年道隆寂す、
同二年　五十八歳、弟子日興等廿四人鎌倉の土牢に幽せらる、淺草金龍山寂海來りて投す、
同三年　五十九歳、著作多し、門徒、三人鎌倉に斬らる、時宗邊を備ふ、
同四年　六十歳、蒙古來襲、身延山久遠寺成る、
同五年　六十一歳、微恙あり武藏國池上に寄る、十月十三日宗仲の邸に涅槃す茶毘して遺骨を遠く身延山に送る、時宗圓覺寺を建つ、伯耆房書日蓮一期弘法書日朗讓狀波木井鈔等成れり、

衆生無邊誓願度　煩惱無數誓願斷
法門無盡誓願知　佛道無上誓願成
願諸衆生　諸惡莫作　諸善奉行　自淨其意　是諸佛敎
和南聖衆
願以此功德　普及於一切　我等與衆生　皆共成佛道　合掌

大上人門下一班

貞應元年　二月十六日安房國長狹郡小湊に於て本化聖祖降誕善日丸と號す、
天福元年　聖祖十二歳、清澄寺の學室に投す、
嘉禎三年　聖祖十六歳、清澄に於て受戒薙染して名を蓮長と呼び是生坊と稱す、
建長五年　三月聖祖三十二歳、伊勢太廟に開宗を奏す、四月二十八日大法開宣怨嫉蜂起して清澄を逐はる、五月鎌倉に入り名越に居をトす、
文應元年　聖祖三十九歳、七月十六日立正安國論を執權時頼に献ず即ち最初の國家諫曉なり、八月怨嫉の徒聖居を襲ひ焚く、
弘長元年　聖祖四十歳、五月十二日北條氏諸宗の讒を容れて聖祖を伊豆の伊東に謫す、
文永元年　聖祖四十三歳、十一月十一日東條小松原の法難あり隨身鏡忍等難に死す聖祖亦た頭に疵を被る、
同五年　聖祖四十七歳、一月蒙古書を寄せて我國を窺ふ（安國論の讖言符を合す）十月聖祖書を裁して官並に諸大寺を警め宗義の得失を公場に決せん事を促す十一

通御書是也、

同六年　聖祖四十八歳、富岳に登て手から法華經一部を山頂に埋む蓋し後驗の爲也、

同八年　聖祖五十歳、極樂寺良觀祈雨に敗て聖祖を官に讒す官之を容る、九月十二日平ノ賴綱に寄せて再度の國家諫曉を爲す同夜刎頸の刑あり、十月佐渡に流罪す、

同九年　聖祖五十一歳、二月開目鈔を撰す、

同十年　聖祖五十二歳、四月本尊鈔を撰す、七月八日始めて大本尊を圖顯す、

同十一年　聖祖五十三歳、三月赦を得て鎌倉に還る、四月八日平ノ賴綱に柳營に見え三次の國家諫曉を爲す官優柔にして移らず、五月鎌倉を去て甲州身延に入る、

建治二年　聖祖五十五歳、三月舊師道善逝く乃ち爲に報恩鈔を撰し日向等を遣はして之を墓前に展讀せしむ、

同三年　聖祖五十六歳、鎌倉桑谷問答に緣して四條賴基主家に寃を被る聖祖爲に陳情の書を裁して與へらる賴基陳狀是也、

弘安二年　聖祖五十八歳、駿州加島の信士熱原神四郎等讒訴に由て官に捕はれ不退の信念の爲に慘刑に死す之を加島法難といふ、

同四年　聖祖六十歳、元寇の役あり、

同五年　聖祖六十一歳、九月八日延山を去て同十八日武州池上に着し、二十五日安國論を講じて告別し、十月八日六上足を定め遺命懇切、同十三日大滅度を示し給ふ、

同六年　日昭延山の清規を定む、遺文の結集に着手す、日尊（要山派祖）日目の化に因て皈伏す、

同七年　日尊日目の旨に依て日興（富士派祖）に師事す、十月聖祖第三年忌の法要を營む、日頂鎌倉に在て法論の爲に遲參し父日常の勘氣を受く、

正應元年　諸國門徒聖祖七周忌の法會を延山に修す、日興延山護持の事に付て議合はず終に波木井氏（南部男爵家祖）と絶す、

同二年　日興南條氏の請に應じて富士上野に到り大石寺を創す、

永仁元年　日像上都弘通の志を發し、由井ゲ濱に苦行を試み次で聖祖の靈蹟を巡拜す、

同二年　四月日像帝都に入て弘通す時に二十六歳、天台の實眼眞言の實典日像に皈伏して改宗す、

同三年　正月元旦日持遠く海外に布敎發途す、

永仁六年　日興富士に本門寺を建立し本門戒壇の準備を規劃す、

正安元年　三月日常寂す、先に日頂其危篤を聞て馳せ到り勘氣赦免を哀請すれども聽かれず則ち其茶毘を遙拜して去る、

同二年　日興重須に在て御義口傳を講す、日尊席に惰容を示して勘氣を被る、

德治元年　日興富士に學堂を設け、日澄を大學頭とし專ら宗義を講ぜしむ重須談所是也、

同二年　日像諸大寺の怨讒に由り詔命下て京師を黜せらる、眞言の良桂日像に屈伏して改宗す、

延慶元年　日興聖志を躅で朝廷武門に諫狀を捧ぐ、日尊京師に法華經堂を建立す要法寺の基源上行院是也、

正和元年　十月日興日尊の勘氣を免す、日尊正安以來行化東西に亙り寺門建立三十有餘と稱す、

文保元年　日頂寂す壽六十五歳、父日常の勘氣を受けしより富士に隱れ日興の敎養事業を扶く、

元應元年　日印柳營に於て他宗僧と對決し之を論破す之を殿中問答といふ、

元亨元年　十月日像三黜十一月赦さる前二を合して三黜三赦といふ、十二月闕下に召され四海唱導の綸旨並に勝地を賜ふ乃ち大本山妙顯寺是也、

同三年　日興門徒秋山忠知轉封の地に就て法華堂を立つ讃岐大坊是也、

正中二年　秋山忠綱土州に轉封して幡田庄に法華堂を立つ、忠綱は與一太郎と稱す重須談所三世大學頭たり、

元德二年　日興富士の上野に東光寺を建つ、

元弘二年　白蓮花阿闍梨日興寂す壽八十有八歳、北條氏後醍醐帝を隱岐に遷し新に光嚴帝を立つ、

同三年　三月日像護良親王の令旨に應じて後醍醐帝の還幸を祈る、日目日興の遺業を受て帝闕奏聞の途に上り濃州垂井驛にて病逝す、

建武元年　日尊日目の遺志を奉じて上洛奏聞す、天皇之を嘉し二位法印に叙し停住の地を賜ふ、

康永元年　日像聖祖の像及童形の自像を刻す、十一月寂す、二月身延池上比企平賀を巡詣せり、

同二年　日尊鳥邊山に自ら逆修の塔を建つ、

康永三年　富士日代重須を去て西山本門寺を開く、

貞和元年　日靜尊氏の外護を得て本國寺を京都六條の地に移し敕願寺たり、富士の日郷初めて日向國を巡敎す、上行院日尊寂す興門の俊也、前年諫狀を朝廷に捧ぐ（京都本門宗、本山要法寺、）

延文元年　中山日祐上洛諫奏して容られず弟子日尊と共に六條河原に頸刎られんとす、

同三年　北朝聖祖に大菩薩號と朗像二師に菩薩號を賜ふ、

貞治三年　龍華大覺寂す、覺は近衞經忠の子日像に皈して其後を稟く曾て敕を奉じ雨を祈りて大覺の二字を賞賜せられ大僧正と爲る、

康應元年　日什二位僧都に補せられ、地を賜うて妙滿寺を開基す（京都顯本宗、本山妙滿寺、）

此外、本法寺日親、本成寺派日陣、本能寺派日隆等雲の如く起て法難に殉せり、

△本書出版に就て▽

佐藤閣下　飯塚由太郎　河原良次郎　來間泰三郎各法華會理事の苦心を多とし併せて大葉寶文館主、竹原編輯部長の勞を謝す

法華會

自我偈俗解終

大正九年十一月　四　日印刷
大正九年十一月　七　日發行

定價金壹圓八拾錢

著作者　橘泰善
發行者　大葉久　東京市日本橋區本石町三丁目十七番地
印刷者　金澤求也　東京市麹町區紀尾井町三番地
印刷所　元眞社

不許複製
自我偈俗解

發行所　東京市日本橋區本石町三丁目　振替口座東京二八〇番　東京寶文館
關西專賣　大阪市東區淡路町四丁目　振替口座大阪四三番　合資會社　大阪寶文館